左の二つの場合、何れに歸するとも明春重て大陸に遊んで更に自己の天分を盡くさんとす。

一、政府が其の言ふ所の如く汪政權の成立を俟つて其の總意に依つて大陸に遊ぶ場合。

二、政府がぐらつき其の總意を自己に托するに至らざる場合。

三、前二者の場合の何れを問はず、明春三、四月の交には出動すること。

其の場合は同文會代表の名を負ふこと。滿鐵、東拓等の關係をも考慮のこと。

斯くして明年以後、兩三年の間、事變處理に目鼻のつく迄は自己を犧牲として興亞に献身することが、與へられたる使命たるを確信するもの也。

歲晚五首　其一

迢迢行路半會經。六十有三堪㆑算㆑齡。別具丈夫心眼月。青㆑於㆓凌雪古松青㆒。

其二

茫茫寰宇兩眸間。天似㆓穹廬㆒月似㆑環。歲闌白雲無㆓一恙㆒。去來隨處滯㆓青山㆒。

其三

湖海萍游席不㆑温。薦天況又近㆓黄昏㆒。邦家大計寸心識。鎖鑰直須㆑嚴㆓北門㆒。

其四

山窓殘臈月過遲。傍㆑枕松陰榑影移。雙鬢添㆑霜心未㆑老。挑㆑爐閒讀少陵詩。

其五

虎擲龍拏彼一時。遠尋陳迹負歸期。寒生北斗光何爛。菊海以南春不遲。

（昭和十四年十二月二十三日五禱莊にて）

七十六、昭和十五年新春、息心海莊隨想、三片

一、庚辰新春の感

滿六十三の春を迎へて殊更に記すべき何物も浮ばないが、思出の儘、二三を綴りて將來の鑑としたい。

（一）本年の行事豫想

イ、事變處理に一役　舊臘記述した通り今後兩三年健康の許し、時局の要求する限り、每年少くとも一、兩回北支を中心として大陸に足を留めて事變處理に冥々の寄與を爲し、以て興亞一貫の志を完ふすること。本件に關しては年末近衞樞相と會見、自己の所信と行動の順序とを叙べた通りに之を實踐に移すこと。左すれば一年の三分の一乃至四分の一は大陸に起居することとなる次第也。因に本件に關して意向を徵したる先輩の名を列擧して置く。

近衞樞相、阿部首相、畑陸相、野村外相、柳川興亞院長官、牧野伯、鈴木大將、勝田參議、宇垣大將等。

ロ、其の他の諸役　一、東亞同文會、人口問題研究會、國策研究會、日蘭協會、日伯中央協會、日土協會等の關係機關を通じて國際情勢の好轉に努力し事變處理の完成に助力すること。ニ、農村振興の重大性に鑑み自己の鄉里たる祖先の遺業を確保すると共に鄉村の向上に力を割くこと。

八、人生の秋を七十迄とし、殘す所約七ヶ年、此の間に自己の使命に邁進する爲には健康と修養と兵糧の三者を兼備せなければならぬ。健康の爲には適度の運動を爲すこと、酒類を節すること必要なり、修養の爲には讀書、思索の時を獲ること必要なり。兵糧を充實する爲には入るを計つて出づるを制し、一層の節約を爲すと共に收入の增加に力め、活動の資は之を自力に據るを原則とす可し。

(二) 冬の用意

秋季の活動を今後七、八年とせば、宜しく冬の用意あるべし。讀書、旅行、閒適の生活を送るには健康と財力の充實に留心して始めて能くす可し。

(三) 資產の狀態と其の處理大綱

祖先の遺產は少くとも其の全額を嫡子に讓りて長く其の惠に浴し、永く其の祀を存するは吾が家法なり、故に鄕里の資產は之を嫡子に讓るべく、自己の積蓄に係るものは第一、生存中の活動。第二、公益。第三、兒孫に頒つ可し。

(四) すべし集

飮酒を節すべし。適度の運動を試むべし。應待に丁寧なるべし。夜の會合を減すべし。故舊に厚くすべし。總て受けて立つべし。散漫を戒め集約を期すべし。祖先崇敬の念を新にし天壤無窮の國體を擁護すべき報本反始の思想を永く子孫に扶植する爲め、祖先や兩親の命日に家族近親を集め祖先の靈を祀り兩親の跡を慕ふべし。禮拜堂の祭神を淸め時々禮拜し自省すべし。

(五) 殘年を如何に用ゆべきか

一、今後約三年（六十六迄）は支那處理に協力すべく日、支の間を往來すること。

一、事變處理、軌道に乘り新秩序其の緖に就けば第八次世界周遊を試みて大戰の跡を探り、戰後の動向を窮め帝國の理想達成に資すること。

一、事情許すに至らば、更に南米、南洋を一巡して自己の足跡を檢し、今後の措置に貢獻すること（ブラジル丸型の新船にて南米一巡を爲すも亦一便法なり）

一、現在關係諸團體は其の大小輕重と其の成績奈何を檢し漸次後進に路を讓り係累を簡易にすること。

一、次代國民の造成にはあらゆる關係を通じて努力すること。

一、六十六歲の歲暮に立てば、過去三ヶ年に步み來つた路を顧みて更に人生の秋に在る者の立場より其の後の方針を檢討し、最善の路を辿ること。

一、七十以後を冬季とし、冬季の進止は秋季の延長たるべきも、自己の心境と體力とに照合して善處すべきものとす。

(六) 偶　感

一、辰の年に入り、須らく受けて立つの構へが大切である。

一、下の土臺を築き其の上に建築すべし。

一、言語動作を愼しみ、無用の葛藤を避くべし。

一、山居一旬、存外に讀書も進まず、思索も爲し得なかつた。

日常行事　一日入浴三・四回。讀書　久原氏「前進の綱領」。栃本大佐の「第二の綱領」。稻葉氏の「東亞民族性」。等を主とし國際文化協會、其の他の時事問題に關する論文、記事等を多く讀めり。（昭和十五年正月五日息心海莊にて認之）

二、今後爲すべく、爲さんとすること

本年以後の自己の行藏、進止は略述した通りであるが、今日、小閑に二階の温室より太平洋の波濤を俯瞰しつゝ靜かに筆を執つて見る氣持になつた。

（一）今後やつて見たきこと。

動的方面

イ、今後兩三年日支の間を往來して事變處理に一役を演じ興亞終生の志を完ふすること。之が爲めには內閣の起倒、政情の變化に拘はらず、若し政府筋に於て消極的態度に出づることありとも、自ら政府筋を鞭撻するの境地に立つて自主獨往すること。其の第一回の試みとして汪政權の成立を待つて政府並に關係方面の主腦と計り、大體三四月の交に於て、先づ北京に赴き約二ケ月の滯在を爲すこと。

北京滯在中又は往復に、中南支に出遊したし。

ロ、北、中支と共に逸すべからざるは南支、南洋の工作なり、機會を得て臺灣、南支に一遊し更に南洋を檢討して新建設の完遂を期すべし。

ハ、日滿一體の見地よりして滿洲の經營にも注意を拂ひ、機會ある每に自ら出遊し又は他の機關を通じて興亞の偉業達成に寄與すること。

日本女子大の滿支進出は自然なり。必要の場合、之が進捗を助成すべし。

ニ、朝鮮に對する因緣淺からざるに鑑み、常に內鮮一如の完成に努力すること。彼等の事業、古均會の目的達成に協力することも亦一手段なり。

ホ、機を見てブラジル丸型の新快船にて中南米に出遊して自己の足跡を訪ね、同時に此等中南米並に南洋地方に對する邦人の發展に協力すること。

ヘ、又事情許すに至らば更に第八回の世界周遊を試み、戰後の歐米を視察して當來の經綸に資すると共に其の山河風物に接し人類の歸趨を檢討して帝國の進運に貢獻すること。

外遊の場合は、許す限り夫婦同伴たるべし。

ト、未見の地、アフリカ中南部、濠洲、ニューギニヤ等にも一遊の機會を捉ふること。

チ、總じて見る、自己の四十餘年に亘る海外進出の足跡を檢討し、更に未踏の地域をも實見し、一は以て自己の心境を拓開し、一は以て皇國の將來に資せんとするのが、今後の動的方面の一眼目である。

靜的方面

イ、「詩と人と境」の續刊。　五年每に一回位の割合にて「詩と人と境」を續行して詩に依る「自己の側面的自敍傳」とすること。即ち昭和五年に第一卷、同十四年に第二卷を刊行せしを以て次回第三卷は昭和十九年、第四

卷は同二十四年と云ふが如し。(昭和十八年に第三卷を刊行せり。追記)

ロ、興亞終生の靜的方面として獨り支那大陸のみでなく、南洋、印度より廣く世界に進出すべき皇國の使命に鑑み、智見を廣め、識度を高め、時々之を世に問ふて世運に小補あらしめたきこと。

昭和十四年の「興亞一路」の如き一例なり。

ハ、之が爲めには常に讀書、思索の時を持つべし。

讀書と旅行と思索は晩年の靜的方面の一部分を占む可し。

(二) 今春を期して爲すべきこと。

一、人口問題研究會の擴充强化。二、東亞同文書院の擴充强化。三、東亞同文會の事變處理に寄與。四、民族調査の充實に伴ふ北支への出張。五、八紘學園の基礎の安定。六、海外高等實務學校との關係の處理。(海外殖民學校長の名は當分持續)。七、女子大の滿支進出に伴ふ施設助成。八、日鮮企業の助成。九、日伯中央協會、日蘭協會、日土協會、古鈞會等常務の任に在る諸機關の機能發揮。十、時々歸郷して郷人と接し郷村の向上に寄與。十一獎學資金の增加と獎學施設。十二、本年度は大體春秋二回の支那行を主とすること。十三、夏季二ケ月は輕井澤生活と登山。十四、三月末亡父の命日に郷里の一族を慰勞旁上京せしめ、法會を催ふし、以後可成、每年一回擧行のこと。十五、今春の好季に伊勢神宮、橿原神宮、能ふべくんば宮崎神宮及高天原に詣づること。十六、「詩と人と境」第三卷の材料たる昭和十四、五兩年の原稿を口授すること。

(三) 以上實行の準備

第一、自力に依るもの、每年〇〇圓乃至〇〇〇〇圓の臨時支出を可能ならしむること。

第二、他力に依るもの、事變處理の爲めの日支往復乂は其の他、外遊の場合は相當の助成は之を受くるも可。

但し人生の秋に在るもの、處身の原則としては自力を主とし他力を從とすること。況んや自主獨往の場合は自力たること勿論なり。

(四) 身 邊 の 係 累

雅二。秀。陽一。シナ子。勝彥。長女支那子。次女幽子。

總て何れも强健にして各自己の使命に獻身しつゝあり。

猶ほ郷里一雄君を失ひたるも留守宅三人共に健在にして其の任務に服しつゝあるは頗る滿足也。

(五) 安　居

一、郷里本宅、機を見て庭先を擴大、整理し、板塀を長方形に延長すること。坐數の一部を洋風にして滯在中の生活に便にすること。

一、目白宅、車庫の側に書庫兼陳列室を設くること。

一、熱海息心海莊、夏季以外の安居たるべく、適當の機會に書庫を增築すること。

一、輕井澤恰々山莊、夏季二ケ月の安居たるべく、兼て登山の根據地たらん。

一、小平村小莊、適當の時機に處分したし。

一、目白宅の附屬家、杉田家族退去の場合は、他に賃貸するか、又は之を學生寮として、教育上に有効に使用し

たし。

以上六戸の所有家屋の中、郷里本宅、目白邸は別とし、他は或は人を會し或は人を招き、或は公益に使用して多少にても世に益することを期したし。

(六) 圖書及古物

一、郷里の書畫、骨董品は、其の中保存すべきものを除き、其の一半を處分するも整理の一方法なり。

一、東京の圖書の內、拓殖に關するものは一部、拓殖奬勵館に寄托せるも他は將來增設の書庫に收めて將來の處理に待つべし。

現在の內外古物珍品は國別、年代順に目錄を附して之を陳列室に保存し觀賞に便にすべし。

(七) 趣味

旅行、讀書、作詩の外は、諸會合に出席し、廣く交友することも平生行事の一なり。今後全國御山陵の參拜も實行したし。要は國家非常時に献身すると共に豐かにして穩かに明朗なるを殘年の生活の本體とすべし。今後の在生を二十年とし今後の七年は秋季、八年以後は冬季として快活に生活し、又時あらば掉尾の飛揚を爲すも亦妙なり。

(正月九日息心海莊にて記之)

三、家妻を憶ふ

明治二十八年二月の雪の日に緣あつて姻戚關係に在る井上家に入つて養嗣子となり長女秀と結婚してより匆々今に四十六年、四年の後には金婚式を迎ふることとなつた。

此の間、第一年の秋に自分は臺灣に在り、支那に往き返つて更に歐洲に留學し、又返つて朝鮮に官し、妻は京都より東京に出で、女子大學に學び、終つて其の教育に從事し、明治四十一年に妻は米國に留學し四十三年歸朝すると、自分は又第二回世界周游の途に就き、四十四年歸朝すると、今度は南洋開拓の業を創め、大正十一年に至る約十二年の大半は南洋現地に在つて家を事とせず、斯くて結婚生活の前半約二十七年は事實上、夫婦同棲の機會が少なかつた。之が妻をして教育に專念し得るの機緣ともなつた。

斯くて明治四十三年朝鮮より歸京して借家住を爲し、同四十五年に始めて目白に借地して一家を設けて始めて安住の巢をトし、長女を郷里より引取り、長男、次女を得たが、大正十一年迄は大半は家にゐなかつた。故に眞の家庭生活は大正十二年以後と云ふべく、今に僅かに十七、八年に過ぎない。今後兩人共に二十年を生存すとせば同棲前後三十七、八年と云ふこととなる。

然し、之に依つて兩人共に自己の使命に精進し得たのであつて、自分は興亞一心に邁進し、世界の隨處に脚痕を印して大日本造成の礎石を打つて後昆に多少の貽す所あり、妻は教育報國に終生し、皇國民の一半を占むる女子の教育、婦人の向上に一役を力め、家政學を創始し、既に女子大校長に進んでより十年、今後の任務は死に至つて止むの外なき境遇に在り。

而して四十六年の過去を顧みるに、兩人共に强健の軀を父母に享け、曾て病を知らず、互に身を忘れて其の使命に邁進し得たことは何等の至幸であるか。

然かも大正十年より十一年にかけ相携へて世界を周遊したことは拙著「改造途上の世界」と秀著「婦人の眼に映

じたる世界の新潮流」となつて公にせられ、大正十三年と十五年のヒリツピン巡遊は共に夫妻同伴し、最近昭和十二年の第七回世界周游も亦夫妻相携へたるものにして其の大要は拙著「大日本の進む路」に依つて懐舊すべし。昨秋の滿、北支行も亦夫婦相伴ふの機を得たのであつた。

自分は常に想ふ。旅行は夫婦同伴がよい。就中自分の如き世界の珍らしき方面に足跡を印するものに取つては、是非家妻を同伴して其の苦樂を頒ちたい。昭和十二年の世界旅行は最近に於ける最も樂しい旅行であつて、東都の新聞が之を「舊婚旅行」として茶化し去つたのであつた。今後の滿支行も印度行も世界行も、可相成は夫婦同伴でありたい。

左るにても夫婦生活四十六年、實に愉快な生活であつた。感謝の生活であつた。就中晩年に至るに從ひ益〻愉快な感謝の生活であり、今後もあるであらう。兩人共に惠まれた健康の保持者であり、相互扶助の生活であり、相互提携の生活であり、一心同體の生活であつた。夫婦は天地開闢の始より、萬物生々の源である。我等兩人は理想の夫婦生活に近い、今後も然りであらう。

故に今後は御互に一層保健に留意して百年の壽を保たなければならぬ。兩人が百年の壽を保ち各〻其の分野に伴ふ献身の生活をすることは兩人に課せられたる責任であり、義務である。兩人は此の責任此の義務に想到して自重自戒、必らず夫婦道の範を後に示さんことを誓ふべきである。而して此の事が子孫繁榮の基礎であり、皇國に酬ひ祖宗に報ずる所以である。

四年後に金婚式を迎ふるに當つては願くは兒孫一堂に相會して過去を感謝し將來を警めて井上家の萬歲、合せて皇國の隆昌を祈りたいものである。（正月初九、息心海莊にて認之）

七十七、昭和十五年春五禱莊隨想　七片

一、皇紀二千六百年紀元の日

朝來家妻は學校の式に赴き、後一時發にて伊勢に向つた。明十二日神宮に參集の全國女子青年團代表七百餘名に對し本部代表として司會の任を帶べるなり、明十二日の式を終ふれば十三日は橿原神宮に詣で更に全國女子青年團代表の大會を司會する筈なり、終つて大阪を經て十五日歸京の豫定である。而して余は〇〇〇なる四十前後の政治史研究者の來訪を受けて東方齋荒尾先生の事蹟を述べ且つ自己の經來つた六十年の道程を語つた。時局の展開と興亞の大業は之を後進に委するの外ないからである。

斯くて相語る三時間、共に午食を取り、二時獨り明治神宮に參拜して敬虔の誠を致し四時歸宅したのである。

問罪西征大義宣。二千六百紀元年。老吾猶有㆓鵬搏志㆒。萬里雲濤券㆓眼前㆒。

庚辰元旦

二、横川、沖等志士の映畫を觀て

昨十二日夜「神の日本」社主催の「二千六百年記念の夕」が第一ホテルにて擧行された。當夜は外に交詢社で鎌田榮吉翁の年忌祭が行はれ之に出席の約をしてゐたが、該會合にはハルピン志士横川、沖兩君等の映畫が上演さるゝを聞いたので、交詢社の方を斷り之に赴いた。

來會者七、八十名、主催者は此頃近附きになつた二六會の中里君であつたので映畫を終へた後、中里君の希望で約十分間に亙り沖と自分の關係に就き物語り且つ沖等が興亞の柱となつた因緣を皆に知らせたのであつた。沖の死する歲三十一、正に三十七年前のことである。然かも昭和七年と十四年の兩回ハルピンに彼の英魂を弔ふたのである。

哈爾賓志士沖君碑下有レ作

欲レ酬二君國一豈思レ躬。曝二骨天涯一志亦雄。髏髅人徂名不レ朽。豐碑矗立夕陽中。（昭和七年卽吟）

松花江泛舟

斜陽影裏濇二煙波一。不レ雨何虹駕二大河一。天末忽看斜陣度。松花橋外雁聲多。

三、ムソリーニの一言

ム公曰く——余は只だ一の大きい書物を使つた。余は只だ一人の偉大な師を持つた。その書物とはこの人生である。その師とは日々の經驗である。

又曰く——常に青年の重要性を記憶することは容易でない。青年の魂を何時までも保持することは容易でない。若さを失はない人は幸な人である。

ム公本年五十六、大正十二年春、余等夫妻世界を巡りて伊太利に出づるやム公はミランに於て新聞を主催し、フアシストの黨制を强行し正に羅馬に進軍せんとするの前半年であつた。三十八にして首相となり爾來十八年世界の一人傑として推さるるに至つた、此人に學ぶべきもの少くない。

ムソリーニ自傳は面白く讀んだのであつた。（二月十九日夜認之）

四、誕生日、二月二十三日

明治十年二月二十三日生の自分は今日、滿六十三の誕生日を迎へた。

正午丸ノ內中央亭で國際協會主催の午餐會で松田海軍大佐の「米國談」に耳を傾け後二時に東拓の定時總會に列し、終つて總裁室で喫茶し、偶々出席の植場殖產局長や池邊副總裁に支那行に伴ふ東拓としての便宜供與方に就き諒解を求めて置いた。

當夜はロータリークラブの家族會、又國策研究會の會合もあつたが、何れも辭して六時歸宅、誕生日を祝ふと共に近く渡印の三菱商事力石君やラングーンへ歸任の浦木君を招き晩餐を共にして一夕を過ごした。忙がしい身に然かも他の會合を斷つて此二社員を招いたのも陽一に對する親の慈愛の顯れなのであらう。

今日週末を利して熱海海莊に靜居し一句あり。

誕辰習レ靜一茅庵。松火蒲團禪可レ參。自笑童時今太閤。馬齡六十又加三。（二月二十四日認之）

五、日曜日の一斷想

最近、新興古書會の人が來て「改造途上の世界」の注文が內外各地から來てゐます。再版されたら奈何ですとの話があり、昨年白木屋の古書卽賣會でも自分の著書が時々注文されます、あなたの時代となつて來ましたとの言葉もあり、十年二十年又は三十年も埋もれてゐた自分の著書が時代の脚光を浴びて浮き上るものと思へる。著書とは別に自分關係の八紘學園に强力なる財的援助者が有り、古鈎會の紀念事業にも有力なる援助者が顯はれたり、何ん

となく隱れたる自分の姿を引出さうと云ふ風の工合も見へる。

それは兎に角、朝來宮本君の易談に耳を傾けた後は、外出を止めて獨り温室に在つて「改造途上の世界」を改めて瞥見した。大正十一年世界周游後の產物で、全篇に氣魄が呈れてゐるのが見え、讀者に多少の感激を與へたものであらう。何にしても大正十一年頃の自分と今の自分に何等質的の變化はない。而して當年の感想は今も首肯せらるゝものが多い。場合に依つては再版してもよいと思ふ。

近く自分は二、三月の日子を以て第二次の渡支を計畫してゐる。其の功果は豫め豫知し豫想する所ではない。只だ自己興亞終生の生活を生活し貫かんとするに在るのみである。

自著を讀み終つて赤池濃氏の隨筆「蒙晋風懷」を見て更に思を大陸に馳するのであつたが、今度は機を見て內蒙山西の境をも探りたいものである。（三月二十四日の日曜日五禱荘にて、今夕寒月皎々たり）

六、「陸奥宗光伯」の劇を觀て

二十六日の夜日本文化中央聯盟の招待で、新橋演舞場に「陸奥宗光伯」劇を觀て多少の感興を惹いた。劇は媾和、休戰、干涉の三幕十場で陸奥伯の剃刀大臣振を主として當年の双方の苦心を忠實に畫き出さんとしたものである。

李伯七十三、伊公五十五、陸伯五十二、伊東巳代治三十九と云ふのである。

僕は媾和會議の年卽ち明治二十八年四月には京都若王子山下の荒尾先生の許に在り、後三年にして北京にて伊藤公を知り、其の翌三十二年には上海にて李鴻章伯を見た。況んや日露戰役後には伊藤公の命を蒙り韓國宮中改革に當つたものとして感慨一層である。

現に生殘りの者は中田敬義老一人となつた。老は八十餘歲で猶元氣である。（三月二十八日夜認之）（此の中田翁も竟に先月白玉樓中の人となつた。昭和十八年十二月追記）

七、古筠先生記念會

今日、古筠先生四十七周忌を期とし記念會を工業俱樂部に於て開催することゝし朝野の名士約千名に招待狀を發し、李王殿下の御台臨をも仰いで盛大に擧行した。來會者三百名、晚餐會に入り俵氏の挨拶に始まり「デザート」に入つて余より記念事業の件を發表し、來賓總代として水野錬太郎氏の賛成あり、大盛會裡に散會せり。（三月二十八日夜）

七十八、參宮並歸鄉

二月二十八日夜十時三十五分東京發參宮急行にて翌二十九日朝九時山田に下車、直に自動車を賃して外宮、內宮に參拜し敬虔の誠を效した。

次前韻神宮參拜

朝暾影朗老杉林。奕奕神威轉覺深。億兆子徠齊跪拜。微臣又效此丹心。

十時半山田發の大軌で十二時半橿原神宮驛に下り神武陵より神宮に詣でた。

神武陵　次前韻

豈爲二虎豹一死留レ皮。報國丹心天只知。春淺畝傍山下路。皇陵拜後步遲遲。

三山の邊に神代より上古の昔を偲び、二時半奈良「ホテル」の客となつた。「ホテル」に行李を下ろし人力車上の人となり、公園を散策し平都の古を偲んだ。翌一日曉起せば四山一白、積雪五、六寸、一面の銀世界なり。

奈良客舍曉雪　次二前韻一

古都春淺曉光寒。白雪皚皚擁二四巒一。飛去飛來六花散。絢爛風物兩眸看。

其二　次二前韻一

旦參二帝寢一養二精神一。夕泊二平都一對二早春一。尤喜夜來天降レ雪。乾坤一白物光新。

三月一日朝十時半發奈良より大阪に出で後四時黒井に下車直に歸宅した。

向レ　鄕

舊都雪滿白皚皚。西入二故鄕一春蕩駘。忠孝由來我家訓。欲下參二祖墓一掃中青苔上。

其　二

天晴山色自蒼蒼。到處田畦枯草黃。一路煙光依レ舊好。春風迎レ我入二家鄕一。

夜一同と語り例に依つて別棟に眠る。天明けて鳥禽の庭樹に囀るあり、母家の內側は戶を鎖ぢず、僅かに「カーテン」を引き廻せるを見るのみ、曰く宅には盜難はありませんと、乃ち一笑して左の句あり。

歸廬第一日　九月二日

雪埋二田圃一未二鋤耕一。四望連山滯二宿雲一。晚入二舊廬一窓不レ鎖。曉來鳥語臥中聞。

二日朝柏原中學校の卒業式に臨んで一場の祝辭を述べ、三友樓に丹波新聞社の主腦と午餐を共にし歸途興禪寺に詣で三日は朝萱原の里に實兄夫妻を省し祖墓に謁し、正午佐治對嶽樓に中島、衣川、足立（重）等竹馬の友と會合し、夕刻黒井棲霞樓に黒井、船越兩村長、學校長等十名を招きて同じく會食し、四日は墓參並に家事に日を消し、五日朝發、篠山に下車、舊友と會し鳳鳴中學校に講演し、本鄕大將の墓に展し齋藤（幸）君宅に小憩、園野、廣石二老等と語り三時半發にて大阪小憩、六日朝歸宅した。早春一週日の環游、故山の風物に接し祖先に感謝の誠を致したことは年中行事の一を果たし得て本懷であつた。

佐治川邊烟霧蒸。大箕山下曉寒凝。感新五十年前事。對嶽樓頭對二舊朋一。（三月十八日認之）

七十九、昭和十五年夏恰恰山莊隨想　十九片

一、林間疎雨有聲詩。七月二十六日

恰恰山莊に立て籠つてから旣に一週日、其の生活は極めて單調だが云ふに云はれない有益の時を費やすことが出來る。大抵朝は六時に起き六時半輕い朝餐をとり、七時頃配達の新聞に目を曝らし、八時過ぎ配達の書狀を閱し、且つ讀み且つ筆を取つて午前を過ごし、午後は同じく机に倚つて讀書三昧に耽るのである。夜は大抵十時前後に床に入つて好きな書物を讀み、睡氣がくると乃ち消燈して華胥に遊ぶのである。

此の間ラヂオのニユースは成る可く聽くことゝし、存外日の立つのが早い。まだ一も纒まつた書冊を終へてゐない。「創造」に出す「燕山巺水」の校正は漸く本日で終つた。之に費やした時間は今後は他へ向けられる。

第一に山荘の好いのは空氣が清澄で嵐氣に滿ち、東京が攝氏三十二三度より一昨日は三十六度に上つたと云ふに此山荘では最高が二十八度、普通日中でも二十五、六度に上らない、今日の如き二十一度である。朝夕のより涼しいことは申す迄もない。故に食慾は旺盛であり、頭腦は明快で、終日門を出でず、讀書し執筆しても毫も倦むことを知らない。其の上に俗塵到らず、俗客も固より跡を絶ち、鶯は終日簾外に囀々して人の耳を樂ましめてゐるではないか。胡林翼の所謂「林間疎雨有㆓聲詩㆒。簾外淡煙無㆓墨畫㆒。」の境地をしみじみ味つてゐるのが今の吾れである。

然し、この靜かな山荘を通じて世間を觀ると、何んと眩しい程の急テンポで急轉回しつゝあるぞ。吾々はこの世界の新潮流と云はうか、世界の舊秩序の破壞と云はうか、將た新秩序の建設てふことに對し、心眼を透して之に善處せなければならぬ。苟くも心眼を開いて事物を透視し之に徹底するならば、其の人は常に老いない、常に青年である。自分はこの世界の轉機に際して、神躍り氣動き、心鏡明澄、何物をも透視し、心地豁達何事にも徹底し得るの心地がする。吾れ老ゆべからずでなく、吾れ老ゆるを知らずでなく、吾れ老いなのである。

家妻は毎朝七時頃より夕刻に至る一日を其の學生の個別訓育に努力しつゝあるが、自分は獨居して猶ほ且つ若々しい氣持に滿ち、感謝しつゝ生活し得るは何等の幸ぞ。世界は變革し日本も推進する。而して自分も同じく變革し推進しなければならぬ。此夏の山荘は自分に取つては絶好の自省自戒の秋であり、更生、若返りの時である。山荘數旬の間に於て一刻一瞬を忽にせずして克く沈思し克く默考して、往く道を究め、來る可き秋に處するの方途を見出し、而して殘年を最も有効に國家民族に奉献することゝせねばならない。（七月二十六日簾外の淡煙に涼氣を滿喫しつゝ恰々山荘にて認之）

二、自己を凝視する

此の世界歴史の轉換機、東亞共榮圈の確立期に當り、朝夕山荘の涼味を呼吸しつゝ自己を凝視する。

自己が興亞の志を立てたのは早や四十六年前のことであり、韓半島の經營に參加したのは三十六年前、南方開拓に着手したのは三十年前、而して海外移住開拓機關に主腦となつてからでも既に十七年、第一線を退いてからも四年の歳月を數へる。先代近衞公の下に東亞同文會を組織したのは四十三年前のことで今の近衞公は年僅かに七、八歳の頃であつたらう。當時、會の幹部であつた人で今に生存されてゐるのは七十八歳の田鍋安之助翁のみであり、韓國時代に於ける先輩同僚も大半は凋落して餘す所少ない。更らに南方開拓を創始せし當時の同役中で今に存命されてゐるのは八十翁の法華津君、六十八歳の森村男だけとなつた。更に溯つて郷里に於ける小、中學時代を顧みると、今太閤時代の德川家康たりし三上伊太郎君は健在であるが、他の七名は全然消息を絶ち、柏原小學校時代に同窓生であつた内山君は生存と思ふが下野君の消息はなし。更に中學時代篠山で四秀才と呼ばれた平野、杉兩君は他界し、村上君の消息を知らない。若し夫れ早稻田同窓に至つては在學中から餘り交らなかつたせいもあらうが、森茂君は死亡し、木塚、權藤二君の健在せるは賴母しい。海軍時代の同窓二十名の中、半ば簀を易へ、一年に一名位を失つてゐるのも頗る心を痛ましむるものがある。更に轉じて四十年前の歐洲留學當時の交友を想ふに、牧野伯が八十の頽齡を以て猶健在なるは愉快なことの一であり、鈴木海軍大將の健在も亦友人として慶賀に堪へないが、當時互に肺肝を披瀝した松石中將は固より、長岡中將、松川大將、明石大將、有田、栗田兩中將始め多數の士は最早や此の世の人でない。而して存命中の多くは或は渭濱に釣し、或は清廬に開居してゐる樣である。此等の舊知の多

くに較べると、年齢から云つても自分はまだ若い部に屬してゐるせいでもあらうが、身體は至つて壯健、氣力も衰へない、鞍上顧眄の勇はある。然し第一線に立つの機會が再びあるかどうか。親しい友人の中には興亞の率先者であり、南方開拓の先陣であつた自分に種々の點から期待さるる人もあり、又自分の書いた書物の賣れ口が多く再版したらとの書肆からの勸誘を受へることも亦一再ではなし「先生の時代が來ました」と云ふ聲もあちこちで聞くのであるが、此等は固より大勢を成すものではない。漠然たる極一小部分の人氣に過ぎないのであつて、再び世間に立つて時艱克服第一線の人となるには背景と地盤と準備がない。何故である乎。曰く

一、官僚、財閥、思想、社會、農商工團體等の背景がない。

二、政治的産業的地盤がない。

三、海外發展を主目的とし來れるが爲め、內地に於ける準備がない。

以上大難把に見ても自分には背景、地盤、準備共に乏しい。現在の世は秀でたる個人よりも、團體の代表が第一線に立つのである。其れには自己半生の經歷は海外に在り、幾多の團體に關係せりと云ふも悉く國際的ならざれば學術的機關にして政治經濟方面に進出するには緣が遠い。換言すればパイオニアの仕事であり、椽の下の力持的であつて、種を世界の一部に蒔いたに過ぎず、刈り取りは固より後人のこと、斯の急迫せる時代に於ても自ら立つの機會は恐らく來ないであらう。自ら立つの機會は現在の政治經濟體制ではどうすることも出來ず、危急存亡の時が廻り來つた場合は、或は已むなく出ることもあり得るであらうが、先づないと見てよからう。

其處でそれでは如何するのか。どうすればよいのかと云ふことになつてくる。

いつも申す通り人生の秋に入つた者には秋に處するの使命があり、冬に入つた者には冬に處するの使命がある。自分は秋の始めに在る者である。而かも身心共に頑健である。生ある限り道を盡くさねばならぬ。道に入らなければならぬ。道を盡くし道に入つて不生不滅、永久の生命を獲得せなければならぬ。其處に爲すべきことが橫はつてゐるのである。

第一、自己の經驗と智識に加ふるに常に廣く智識を古今內外に求めて之を大成し世の指導者とならねばならぬ。

第二、パイオニアの當然の責任として次代國民に自己の信念を鼓吹し、後繼者を造成せなければならぬ。

第三、之が爲めには來る九月より創設する「民族政策研究所」の機能發揮の如き其の一であり。

第四、時に靜居讀書、思索して智能を深め、信念を長養することも必要であり、或は名山大川を涉攀して氣魄を養ひ、或は世界に出遊して當來の經綸に資するも亦行事の一であらねばならぬ。

第五、斯くすることに依つて自己を練り自力を蓄へ常に一歩を世に先じて世を警醒し指導することが出來るのである。

斯くて自彊不息、死に至つて止まざる底の大勇猛心を常に堅持しつゝ朝夕精進せねばならないのである。

生れて玆に滿六十三歲半、七十には猶ほ六年半、八十迄には十六年半、父母逝去の年に攀づるには猶ほ二十年近くを殘してゐる。日々新、日又新で一路邁進すべきであり、邁進しつゝあるのである。家妻は相當の頹齡であるが至極健在で年中使命に突進してゐる。此山莊に在つても朝より夜に及び一日の閑もない、今朝も七時に立つて三泉寮に往つた。昨日は朝七時より夕の七時半迄、山莊に十數名の學生を招きて個人指導に力を致してゐた。吾等兩人

何の幸か、健全なる身體を父母より享け、多數の友人知己がぽつ〳〵脫落しつゝある間に於て、何等の故障なく天の命に從つて涓滴の誠を國家民人に致すを得ることは皇國に生れた有難さと、父母並に祖先の餘惠として一層感謝しつゝ奉公せねばならないのである。（七月二十七日午前十時十五分窓外颯々の風を聽きつゝ認之）

三、最近一年有半に於ける三回の大陸旅行の收獲　昭和十三年の十一月に於ける中支、翌十四年十月に於ける滿洲及北支、本年四月より六月に至る北支と三回に亘る大陸旅行に依つて獲たる收獲はどうかと云ふに、多年遠ざかつてゐた大陸の風物を眼前に見、其の人物に親しく接して東亞新秩序の建設なり興亞の相貌なりを瞥視したに過ぎない。況んや急轉回する世界の狀勢に從つて整備すべき國內の體制、國防國家完成、外交の刷新が擧國的輿論となつた今日に在つては、舊套を脫すると共に舊餇を稽へ、新制を樹立すると共に其の弊を受けざる周到の用意を必要とする。何れにしても今や新人の天下である。五十歲の近衞公を首班とし四十四歲の翰長を之に配してゐる。新政治體制の推進力たる安井內相の五十一歲、稍ゝ長じてゐるが野人法相の五十五歲、何れも新人と云へる、六十三歲の村田遞相、六十八歲の小林商相の二人者は民間人から拔かれた特殊の任務があるのであらう。一律には論じられない。何としても新人內閣と云ふを妨げない。況んや滿洲から星野を企畫院に送り、又近くは大橋を外務次官に据へるとの情報もある。恐らく實現するであらう。滿洲に於て經驗せし統制を母國に移し植へんとするのであらう。之は內外の情勢よりして當然、必然として河田藏相の言ふ通り摩擦を避けつゝ推進するを要する。

翻つて事變處理の問題に轉ずるに、南京中央政權との折衝も順調に進み一方蔣政權の窮迫は漸次其の度を加へつゝあり、內外の情勢は頗る我に有利となつて來た。此の間に在つて新內閣が良く善處し擧國一體の實を擧げ得るに於ては有終の果を結ぶを得べしと考へられるが、問題は猶ほ至る處に殘つてゐる。國民生活が日に窮屈を感じつゝあり、之に對處するに萬全を期することが、今の〇〇、今の〇〇で可能なりや頗る戒心を要するであらう。

而して更に轉じて自己に顧みるに、第三回の北支行は今後兩三年間に於ける連續的の大陸行の第一步たるべきや否やと云ふに、現狀を以てしては否と答へざるを得ない。我々老人には用はないのである。我々老人としては大處高處に立つて中日兩國指導者間の油となるに存する次第であるが、現狀にては之は餘程難かしい。油となるの手段が乏しい。今回成立の新內閣に依り完全に軍、官、民が一體となり、軍、政兩部門の一致を見るを得ば自ら老人の出る幕もあらうが、現狀では中々難かしい、從つて自分の大陸行も差したる意味もなさない。萬一、近く中南支に遊ぶことにしても之は自己の見識を廣め、自己の經綸に資するに過ぎない。卽ち前三回の旅行の繼續に過ぎないであらう。（七月二十九日午前九時半、蟬聲を耳にしつゝ恰々山莊にて認之）

四、寂しみの一とき　七月の二十日に山莊に入つてから昨夕沓掛に往つた外は庭前の散步位で門外一步を出でない。讀書と思索と新聞の熟讀と、偶にはラヂオのニュースに耳を傾けるのが日課である。朝は大抵六時に起き夜の就床は十時であつて、然かも食慾は旺盛で氣魄は依然たりであり。此の山莊を造つてから僅かに七年、當初は落葉松も唐松も往々にして枯死するあり、蟻に犯さるるもあつたので、之を防ぐと共に白樺やアカシヤや樅の木を植へると共に雜草を刈り、山百合、桔梗、萩の類を助成した所、年一年と生氣滿ち、櫻やアカシヤの繁茂は言ふ迄もなく、白樺や樅もぬく〳〵と伸び、僅か尺餘に過ぎなかつたホウの樹が今は屋根を壓するの狀態であり、新に造へた日本座敷の後庭に移植した二本の白樺の如きは亭々として空に聳へてゐる。萩ははや蕾を破らんとし山百合も一

三輪と咲き出てゐる。此の裏に在つて終日鶯の聲を聽くのは最も心を怡ばしめる。蟬や鳥の雜音の中に鶯だけは一段と我が耳を傾けしめるのも彼女の特權であらう。淺間の靈山も朝は空氣澄清、くつきりと雄姿を見せるが、午後は往々白雲の去來に從つて其の姿の一面、半面のみのぞかせる。

主人は此の間にあつて時に默考し沈思する。外の擾々たるに對して內は事簡に俗塵到らず。大自然に浸つて天地の悠久に接し、人間の小なるを思はざるを得ない。曾て北京の紫禁城を弔つて、

鵬飛三萬里。松壽二千年。可笑人間小。利名値半錢。

と歌つたが、山莊でも此の境地をしみじみ味へるのである。同時に忙がしい生活から離れて訪ふ人もなく、讀書、思索以外、爲すこともなく、靜中の生活に居ると自ら時に寂しみを感ずることがある。就中時代の流れは若き人々の活躍を促すのみでなく、彼の漢がと思はるる輩が時流の波に乘つて飛揚するのを見てゐると時代だなあ、との感を起さしめるのである。自己を凝視せしめるのである。自己を凝視して獲る所、何物ぞ。只だ精進一番、自己を錬り、自己を知り、自己を掘り下げて、天地一體、永久不死の神境に入らなければならないと感ずるのである。

寂しみの一ときは自己反省の一ときであり、自己向上の準備の一ときである。靜中に動を藏し、動中に靜あるべきは達人のこと、主人は今夏、山莊の靜境に浸り、寂しみの一ときを天與の賜として之を受け、以て自己の進路を誤らざるべく期待する次第である。

竹籬經レ雨長二苔痕一。幼柏稚松綠掩レ門。天籠放レ吾機外境。讀從二昧旦一到二黃昏一。

（七月三十日十一時五十分、又鶯聲を耳にしつゝ恰々山莊にて認之）

五、殘された道

秋に入つて殘された道は從來何回も道破した所で、玆に架說の要はない。只だ隨感を隨筆するに過ぎない。却說自分に殘された道は如何。それはまだ往き着いてゐない、否な往き着くことの無い永遠の道を往くことである。永生不死の道を步むことである。此の道は東洋先哲の道破した所で、西洋の哲人にも此の種の訓言が至る所に見られる。たしか、サン・アウグスタスであつたか

「吾等の心は落着いてゐない、何時落着くかと云ふに、それは創造主によつて落着く迄は落着かない」

と云つた。又ゲーテのフアストにも

「一瞬間といふものは何と美しく何と綺麗なものでしよう、どうか止りなさい」

とありますが、地上の最もよい、最も美しいものは中々止まらない、すぐに過ぎ去つてしもうのである。然し努力すれば必ず至るのであり、假令ひ古いものでも新しいものでも、總て良いものは之を取り入れるのである。斯くて生きて居る間は何時も新しいものを攝取すると共に古いものをも守らなければならぬ。攝取しなければ古くなり、守らなければ枯れるのであつて、要するに生ある間は自彊不息、努力精進の一路を步み續けるべきである。

此の頃の新聞やラヂオを見聞してゐると山莊に靜居してゐても天下の大勢はよく判る、帝京の塵中に在るよりも却つて視聽が透明になつてゐる丈に克く判る。從つて自分の殘された道も克く判る。然かも之を十全ならしむるには其れ相當の用意がいり準備を要する。それは何かと云ふに

第一、出來る丈け存養して長壽を保つこと、其れには繁を去り簡に就き慾を去り淸を保つこと。

第二、常に古を溫ね、新を知り、時代に魁けして靑年の氣持をもつこと。
第三、入つては古人を友とし、出ては四海を傲遊して心氣を恢弘すること。
第四、事を簡易にし生活を質素にして讀書と思索の時を得、且つ心力を蓄積し氣魄を充實すること。
自らを養ひ廣く人を知り、而かも敢て求めず急がず、天命を信じて居常淡然たるべし。斯くして始めて事に當つて斷然、事に處して決然たることが出來るであらう。（七月三十一日、群鳥の亂鳴を耳にしつゝ恰々山莊に認之）

夜、秋山某著「道元禪師と行」を讀み、其の中に久留米梅林寺の住職として明治以後の教界に多くの俊髦を打出した傑僧某が田舍の酒造家の風呂番から引出されたことが載つてゐた。

この風呂番は後に梅林寺の老僧が迎へに來ることを豫期して風呂を焚いてゐたのではない。又死ぬまで誰に迎へられなかつたとして聊かの悔もない。只のつそりとして風呂を焚いてゐる、ただそれだけの中に融通無碍の境があるのである。迎へらるれば大刹の主にもなる。機會が與へらるれば天下の大事をも料理する。併し進んで取らうとはせぬ、與へられた境に落着いて其の中に無價の興趣に味到する、何の求むる所もない大安樂の境である。支那にはこの種の男は少くない。彼の渭濱に釣してゐた大公望も、南陽の草廬に高臥してゐた諸葛亮も、こんな世界に住む人間の頭株の一人であつたらう抔と思ひ出して胸中快然たるものがあつた。（明けて八月一日の朝七時半追記す）

六、「道元禪師と行」を讀みて

永平寺の開山道元禪師は夙に憧憬せる先哲の一人である。昭和六年全國周遊の砌、途を北陸に取り、福井に滯在中、永平寺に詣でた。永平寺は鄕里の菩提寺の本山であり、且つ我が一家と深い親しみのあつた日置默仙老師が管長として駐錫せられた巨刹で、多年の渴を醫したことであつたが、其の時に

雲程水宿六旬間。僧院悠悠半日閒。這裏兀公曾一喝。餘音嫋々滿二人寰一。

と歌つたことがある。

此の日「道元禪師と行」なる新著を繙いて正法眼藏生死の卷を讀み「生死の中に佛あれば生死なし。生死の中に佛なければ生死にまどはず」の語に及び、夾山、定山二傑僧の眞劍な佛道追求を偲んだことであつた。生死にゐて生死にとらはれてゐる間に生死を離れることは永劫にもあり得ない。まこと脫得の士は、生死にゐて生死を友とする。生死にゐて生死のいとふべきことを知らない。此の時生死も生死でなくなる。俳人芭蕉の「喪に居る者は悲しみを主とし。酒を飮むものは樂を主とし、愁に住するものは愁を主とし、徒然に住する者は徒然を主とす」と云へる。又た良寬は地震に逢つてその知人に書き送つた中に

「震は信に大變に候、野僧草庵は何事なく、親類中死人もなく目出度く候。
うちつけに死なば死なずて長らへてかかる憂き目を見るがわびしさ
然し、災難に逢ふ時節には逢ふがよく候。死ぬる時節に死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」

と言つて居る。之は何も芭蕉や良寬だけの事でなく、我々自身の事である。我々は朝起きから夜寢る迄、喫茶喫飯の一事一事が悉く行でなければならないのである。

日の經つのは早いもので近く立秋を控へ、庭の梧葉が落つるかと見れば、山百合は淸楚な姿を見せて吳れる。そうして靜に禪書を繙いても容易に曹源の一滴は汲めそうにない。二絕あり

山百合

碓嶺新露濕㆓粗裳㆒。燕山舊夢入㆓詩嚢㆒。庭梧葉落秋聲動。百合一輪驕㆓夕陽㆒。

讀禪書

一滴曹源何處尋。千山萬壑白雲深。不㆑如移㆑榻前庭坐。又入㆓幽林㆒踞㆑石吟。

（八月一日夜、疎雨止んで氣爽なる處認之）

七。蘭印に就て＝ニューギニヤ買收問題＝

新内閣成立と同時に自分は首相、外相、海相等に對南方國策の事變處理に不可分なること、其の善處は國策の基本的重要性を帶ぶることを進言し、更に蘭印特派大使派遣に就ても愼重なる考慮と人撰を要することを西歐亞局長を經て外相に注意を促し置きたるが、前内閣時代に内定せし○○大使の派遣を取り止め、更に新内閣に入つて○○大使の派遣説も出た樣であつたが、本日の新聞に○○前拓相の派遣説あり同○○は旅行先より急遽歸途に就き多分就諾するだらうとのことである。自分は○○○に對しては○○就任の懇講ではなからうかと當初は推してゐだが蘭印派遣が實現するかも知れない樣に感ぜせれる。而して○○○の派遣には自分は贊成である。○○○の在任中にも南方國策に就て進言したこともある。仍つて本日親展電報にて

「蘭印特派大使は引受けを期待する。僕は蘭印問題に就ては多少の私案もある。近く面會の上申し上げる」旨申送つたことである。對蘭印策には内外表裏から見て種々の見解も成り立ち又方策もあらう、然し其の一としてはニューギニヤの買受けである。之は第一次歐洲大戰の際、即ち大正三年多大隈内閣時代に自分は「北ボルネオ」の買收案を提議したことがある、當時は容れられなかつたが、今回は是非實現したいものである。和蘭が彼の尨大なる領域を開發し得ないのは、過去の歴史が證明してゐる。獨逸と雖も同島の門戸を開放するに於ては差したる異存はない。米國も同樣であらう。而して蘭人も其の惠に浴する次第である。我が國が之を買收して人と資本と技術とを送つて之を開發せば啻に皇國百年の大計丈けでなく、世界が其の惠を享くるに相違ない。自分は是非共之を實現させたいのである。近く歸京して此の問題を首相、外相、藏相等に進言する積りである。（八月三日後六時、昨夜來の雨止み、庭鳥欣々たり、恰々山莊にて認之）

八、再び蘭印問題に就て

八月五日に○○○○へ蘭印對策に關する國策研究會で爼上に載せられてゐる案を參考迄附して置いた。之れは○○が六日の月曜日に首相と會見するらしいとの情報があつたので、右會見前に入手せしめて多少の資料たらしめたらとの寸志に外ならなかつた。

斯くて六日に歸京してロタリー午餐後、幹事の希望に依り約十分間に亘り蘭印に就て講話した後、日本クラブから○○○に電話したが、都合わるく會見の機を得ず、仍つて七日の午後四時から四時半迄吉田海相と會見し、翌八日は朝九時五十分より十時五十分迄松岡外相と官邸にて、更に十一時五分より正午迄藤原前商相と語り、首相との會見は都合が惡かつたので村瀨法制局長官と日本クラブで會見して首相に傳達を托し、又○○○○には書面を以て注意を促し、玆に自分として一應の奔走を終へた、翌九日の國策研究會民族委員會では水田氏の蘭印對策を主題として討議し大體の意向は分明したが、結論を得ず來る十四日に再討議したしとの通知に接した。

斯くて十日に歸莊した處、最近南方より歸京せし竹井十郎氏が昨正午態々來莊されたので約四時間に亘り意見を交換した次第である。竹井氏は內外の事情、就中蘭印土人の實情に通じてゐられるので參考となつた。要之、外相は既に大東亞共榮圏の中に佛印、蘭印一帶の地域を包含せしめて居り、輿論も南方を生活圏に包含することに依つて始めて事變處理も出來、大東亞共榮圏の主盟たり得ることを認識するに至つたのは、時勢と云ひながら自分等の如き三十餘年來のパイオニアとしては感慨に堪へざる所である。然しながら之を如何にして完遂するかと云ふことは、餘程の熟慮斷行を要する次第であつて、自分は蔭ながら其の誤りなく順調に推移せんことを念願する次第である。偶々佐藤尙武氏も新に歸朝せられたるに付、會見して意見を交換し、又申し遺したが、七日午前中には西、堀內兩局長と會見して情報を交換し意見を吐露したことであつた。玆に歸京中の蘭印に關する奔走の概要を記して、後の參考とした次第である。

一昨十日歸莊せば後庭の山百合は正に滿開で、萩も桔梗も花盛り、加之、兩三日來の冷氣に櫻葉や庭樹の葉が片々として落ち、如何にも秋に入つた感じである。本日の東日紙上、蘇峯先生の朴樹の記事がある。此山莊に植付けた一樹の朴樹が先生の言の如く粗枝大葉で、高さはや二十尺に近く簷を掩ふてゐる。まだ花は着かない樣であるが、慥に山人の眼を樂ましめるものの一である。今夏、家妻が同樹の苗を拉し來つて新に前庭に植ゑてゐる。內二本はついた樣である。今は一尺に過ぎないが明年の姿を今から樂しみにしてゐるのである。（八月十二日、秋霖僅かに止み淡霧濛々の中に認之）

九、波　心　極　目　是　何　州

去六日歸京して日本倶樂部に入ると、玄關子が一葉の書信を渡した。披いて見れば竹潭、中島久萬吉男が羽後湯田温泉からのもので、昭和二年夏に自分が東北諸縣を遊說して、山形縣極北の日本海に面した吹浦の臨海樓に宿つた際に吟した詩を同男が見て之に次韻されたものである。恐らく掛軸か畫帖として殘つてゐるのであらう。曰く

來㆓投羽後湯田温泉㆒。偶有㆓梧堂仁兄臨海樓即吟一絶㆒。乃率㆓次玉韻㆒。遙寄。

復無㆔一事贊㆓皇猷㆒。昨愧㆓不才㆒今白頭。北海孤樓倚㆑欄處。波心極目是何州。

粲政、昭和庚辰孟夏　　竹潭　中　島　久

拙著「詩と人と境」第十六、東北旅行の部に、山形縣の最北端吹浦に講演した夜、私は臨海樓に投じた。折しも窓を開けば、眼下に北海の滄波は遠く西伯利亞、樺太の空に連なつてゐる。浴後涼風に吹かれて、漫々たる水雲をみつめて思ふは又しても萬里遠遊のこと、そこで左の即興即吟あり。

吹浦臨海樓　其の一

敢言微賤贊㆓皇猷㆒。身在㆓蜻州北盡頭㆒。浴後憑㆑欄瞰㆓滄海㆒。涼風吹起是何州。

同　　其の二

鳥海山西臨海樓。倚㆑欄曠望豁㆓雙眸㆒。曉煙散盡滄波碧。一髮青山天末幽。

春風秋雨、早や十三年の歲月を經てゐる。中島男は一世の才人、明治の人傑、衆議院議長信行男の嗣として政界に財界に活躍し、竟に商工大臣の榮職に就かれたが、其の後閑地に就き禪門に歸依し、世俗を脫して鎌倉に坐禪し物外に逍遙さるること幾年、近者漸く世に出でられたるも猶ほ大半は閑雲野鶴の妙境に安住されてゐる樣である。

同男の境地は昨今一段の進境を見てゐるであらう。自分とは全然其の境遇を異にせるも同男の境地はよく判るのである。（八月十二日、秋霖纔に罷み、庭後の落葉片々の音を聽きつゝ午前十一時半認之）

山百合の清楚な姿は最も意に適ふ。

十、係累の簡易化

何時も考へることだが容易に實行の擧がらないのは生活の刷新と云ふか、無駄の排除と云ふか、冗費を省き冗事を簡にすると云ふか、係累を簡單にして人生の眞義に徹することは中々の事である。然かも世界歷史の急轉回しつゝある現在に於て第一線を退ける吾等の日常生活は特に之を刷新し、之を改善して殘り少なき生涯を最も有意義に且つ有効に過ごさなければならない。仍つて來る九月以後は左の條々を逐次實行したいと思ふ。

一、夜の會合は必要已むなきものの外は缺席すること。

一、關係團體の中、自分の創設せしもの、若しくは重大なる關係あるものの外は退會すること。

一、新に加入する場合も必要已むべからざる種類に限ること。

一、現在關係せるものを擧ぐれば

第一種　東亞同文會。南洋協會。日蘭協會。日伯中央協會。人口問題研究會。東洋協會。同仁會。海事協會。東亞振興會。比律賓協會。タイ協會。辛未同志會。國策研究會。氷上育英會。氷上鄉友會。多紀鄉友會。八紘學園。海外植民學校等。

第二種　アフガニスタン倶樂部。海外協會中央會。ラテン・アメリカ協會。移民問題研究會。日本エーメン協會。日本イラン協會。日亞協會。日秘協會等。

第三種、社交團體　日本クラブ。交詢社。工業クラブ。霞山會館。臺灣クラブ。東京ロータリー・クラブ等。

第四種、娛樂クラブ　東京ゴルフクラブ。霞ケ關ゴルフクラブ。學士會ゴルフクラブ。輕井澤ゴルフクラブ。熱海ゴルフクラブ等。

以上の內、第一種は依然連續するものとして第二種乃至第四種は今後機を見て脫退するも可なりと思惟す。差當りは夜の會合には可成缺席するとして時と費の節約に力むべき也。斯くて省き得た時間と費用を以て目下計畫中の研究所の充實圖査の購入、旅行費等に充て、又讀書修養の時を得るに力むるを要す。（天晴れて夕陽簾帷を照らすの時、八月十三日後六時認之）

十一、二十二日夜の放送と其の反響

二十二日夜八時四十分より九時に至る二十分間「東亞共榮圈と南洋」なる放送を試みた。（原稿省略）放送の豫報を見て放送出版協會から原稿の給付を懇望し來り、又東京トーキー會社より錄音してはとの來信あり共に之を承諾した次第であるが、翌朝六時半早くも臺灣松岡富雄氏よりの時間外電報は目白臺の自分の朝餐の卓子前に配達された。

曰く「只今の御放送を聽いて感激に堪へず遙かに滿腔の敬意を表す」

とあり、正午日本クラブにて長延連其の他の諸君より放送を愉快に拜聽したとの挨拶あり、午餐を共にした田島、須田、權の三君が等しく放送に際して「其の氣魄に滿ち洞徹した識見と信念に依つて人心を鼓舞する多大なるもの

のあつたことを信じて疑はない旨」の挨拶があつた。

爾來今日に至る迄、同樣の意味の來書を寄せられたるは、海軍中將岩邊季貴（七十餘の老人にて海軍時代の自分の先輩）横山六輔。佐藤巖。松尾源吾、吉武源五郎。東亞振興會。國防科學研究所等で、東亞振興會や國防科學研究所では放送の原稿掲載方を依頼し來り、或は更に會見して詳細の指示を受けたき旨の申出であり、麻田麻次郎君の如き鄕里の八十翁からは雷雨の爲め折角の講演を中斷されたるに付、原稿を得度而して鄕里の新聞に掲げて多數渴仰者に讀ませたし抔と申越さるるものもありたり、此等の書信を通覽するに吉武氏の來信に在る。

「御高唱は兼て貴臺青年時代の立志先鞭の雄飛に起り、爾來、積み重ねられたる多年のお研究と實地經營との御結晶に成り。是に大和民族の宿命と國民的對南經綸を織込まれ。然かも時局にふさはしき示唆、指導並に激勵に富み、聽く者をして說者の卓勵風發の概を想望せしめずんばあらず候。加之內容の重點主義と簡潔明快を旨とし貴臺一流の雄魂毅魄を以て一氣に大衆に呼びかけられたる所、實に敬聽感激の外無之候。最近の紛々たる自稱南洋通連の放送又は講演とは大に其の選を異にし、所謂同日の談に非ざるは勿論に候。老骨由來お世辭に媚はず、唯だ率直に卑感を呈し候云々」

が、最も此等の人々の拙放送に對する所感を示された代表的のものと思はれ聊か該放送の徒爾ならざりしを感ずる次第也。猶今後も各方面よりの來信に接すべく、果して多數の青年諸君が如何に感じ如何に動かされしやを聞きたいものである。聊か放送の影響を述べ置く次第也。（八月二十六日夕刻驟雨軒檐を打つの聲を耳にしつゝ認之）

十二、ヒツトラーの十二使徒に就て

オスワルド、ダツチなる者の「ヒツトラーの十二使徒」と題する冊子を讀んだが、著者の自序の內に「ヒツトラーは合作者や乾兒が必要であつた。而して今尙ほ必要である。何故ならば、其の使命と自信は別として、彼には獨自の思想を以て體制に活氣を添へることが出來ないからだ。是等は案を持つた人物と行政官とであつた。此の同類がなければ、ヒツトラーも其の體制を考へられない。一九三九年九月一日に、ヒツトラーと其の十二人の相談相手は新しい世界戰爭の火蓋を切つた。今や幾百萬の人間の血はヒツトラーに降りかゝつてゐる。彼の十二の助言者及び乾兒は彼と罪を共にし、凄じき十二使徒となつてゐる。これは今日の我々のヒツトラー觀でなければならない。と云ふのは總統と共に是等の十二人はナチスの權力體制を具現するからである……」と著者の選んだ十二人は、ゲーリング、ゲツペルス、ヒンムラー、ヘス、リツベントロツプ、フンク、ローゼンベルグ、ライ、シラハ、ブラウヒツチユ、シユトライヒヤー、フリツクで、ヒツトラーの五十歲を始め何れも五十歲以下で、リツペントロツプは四十七、ゲツペルスは四十三、ローセンベルグは四十七、ライは五十、最年長のフリツクは六十三、最年少はシラへの三十三であつて五十歲以下四十歲以上の所謂働き盛りの徒である。フリツクは唯一の官僚出身でミユンヘン警察部長時代にヒツトラー及び其の一黨と接觸し、常に其の一黨に同情して、爲めに禁錮に處せられたこともあり、ヒツトラーの宰相となるやフリツクを內相とした最高幹部中の長老である。ゲーリングの出生振りも、ゲツペルスの忠勤振りも、ローゼンベルグの思想的援助も、リツペントロツプの外相振りも世間周知のことで、玆に事新しく敍說の要はない。只だ餘り卓絕した人物とも思はれない十二使徒がヒツトラーを助けて今日の獨逸の躍進振りを示すに至らしめた原因は何れに在りやと云ふ點に就ては、大に考へさせらるる所がないではない。要は一心一體であ

る。一「ヒュラー」を仰ぎ之を目標として之に歸一し、之に憧憬して、全國民に臨む所に現在の獨逸の强味があるのではないか。

時勢の要求は我が近衞公を起たしめた。公は新體制を唱へて翼贊體制に邁進されつゝある。我々は小異を棄てゝ大同に就き、朝野一體各層一心、以て之が大成を助長することが大切である。新體制の初委員會開會の日に當りヒツトラーの十二使徒に關する小傳を讀み、帝國の現狀を想ふて玆に一筆する次第である。（八月二十八日後四時、恰々山莊に於て殘暑、體に佳なるの時認之）

十三、イランの懷舊

日本イラン文化協會出版の「新興國イラン」なる小冊子を手にして一讀した。自分のイラン訪問は明治三十五年夏のことで、カヂャー王朝の波斯に君臨せる時代であり、一日テヘラン滯在中、駐波英國公使の紹介で唯一の日本人としてシャーの天長節に參列し、彼の有名なダイヤモンドで鏤めた王冠を拜し有名な王座に近く擧式を拜觀したことを思ひ出すのである。

今のパーレヴ王朝を創設したリザ、カンが國民議會より選擧されペルシヤ王となつたのは今を距る十五年前、十二月十三日のことであり、越へて十六日に新國王就任の旨を中外に宣言した。而して我が國との通商條約の締結は昭和四年三月のことで同八月に日本公使館を開設し兩國の友交關係は前途洋々たるものがあるのである。

曾遊を懷古すれば、今に四十年に垂んとし、波斯はイランと改名され、新國王の推戴に依つて英露角逐の羈絆を脫して新興國として近東に重きを加へるに至つてゐる。而して自分は幸に頑健にして四方に出遊して四方に關係を有し、近く日本イラン文化協會の創立さるゝや、自分は丁度支那大陸に出遊して不在であつたが、細川護立侯が會長に就任され、而して自分は規約第七章第二十條「本會の目的遂行の爲め特に關係ある學識經驗豐かなる顧問を會長より委囑す」との條項に依り、同會顧問に推薦せられた。想ふに明治維新以後、同國に使ひされた吉田淸成氏一行を除いては自分の記憶する範圍では、明治二十九年の福島安正將軍、同三十年の家永豐吉氏而して三番目は明治三十五年の自分ではないかと思ふ。而して自分と同時に同じく顧問に推薦された笠間杲雄氏が初代の駐在公使ではなかつたかと思ふ。偶々「イラン」を讀み當年の曾遊を憶ふて玆に筆を執つた次第である。（八月三十一日の午後涼風窓を吹くの下認之。明治三十六年民友社發行拙著中央亞細亞旅行記參照）。

十四、埃及の民族運動先鋒のムスタフア・ケマル

ハンス、コオン博士著アジア民族運動史を繙きヱジプトの民族運動の章に於ける、民族運動の指導者ムスタフ・アケマルの活動を叙する所に及び、丁度自分の明治四十三年冬に於ける埃及滯在のことが胸に浮んでくる。

ケマルは自分の埃及視察の前年、即ち明治四十二年に二十九の若さで夭折したのであるが少年時代に「ヱヂプトの危難」と題する小著を公にして同民族の愛國心を鼓吹し、爾來死に至る迄の十二年間を民族解放運動に獻身し多數の青年同志を獲得し或は學校を興し、或は新聞に據つて其の覺醒に力めたのであつた。

自分のカイロ滯在中、彼の創立した高等學校を參觀し、又彼の後を享けて彼の指導せし愛國黨（ハスベル、ヴタタン）彼の兄フアリド、ベイ其の他の主なる黨員と交を結んだことであつた。當時驚いたのは彼等は我が明治維新の依つて起りし原因を窮め、吉田松陰の風を慕ひ、其の小傳をアラブ語で著述して青年學徒に教授しつゝあつた。

而かも時恰かも日韓併合後間もない頃とて青年の中の一、二の輩は「日本は白人の侵略を未前に驅逐し立派な獨立帝國を維持されたことは敬服の外はないが、何故に朝鮮を略取せしや」抔と詰め寄るものもあつた。仍つて自分は日韓の併合は讀んで字の如く我が天皇の下に歸一したものであり、韓皇が我が主權の下に其の國土と人民を進んで提供され、兩國一體となつたものであり、彼の白人の爲すが如き暴力で異民族を征服したものとは全然其の類を異にする所以を說き聞かせたことであつた。

ケマルの起した此の新たな民族運動は後のザクルール・パシヤの民族運動となり、以て今日に至つてゐるのであつて、ケマルの先陣の功は松陰以上と謂はなければならない程度の殊勳者である。兄のフヱリツド、ベーは頗る温厚長者の風があつた様に記憶してゐるが、當時訪問せしアヅ、ハザール大學が此等民族運動の搖籃場となつたことも、後の經過に依つて推察されるのであつて、カイロ滯在、僅か二週日の間に彼等と親しく相交はるの機會を得たことは、今、ケマルの事蹟を讀んで一層の感慨を催さしむる次第である。イタリーは今やヱヂプトの攻略に鋒を向けてゐるが、其の歸結果して如何。九月一日（興亞奉公日）の夕暮れ山莊に於て認之。（明治四十四年民友社發行大陸遊記參照）

十五、トルコの民族運動とヱンベル、シヱフケツト

更にヱヂプトよりトルコに移りて其の民族運動史を讀んで思ひ出づるは青年トルコ黨の首領と自分の面識關係である。自分の初めてトルコを訪ふたのは明治三十四年卽ち四十年前のことで、當時はアブヅル、ハミツドの專政時代であつたが、夙に醱酵してゐた民族運動は國外並に國內の進步主義者に依つて潛行的に畫策されてゐた。

翌三十五年中亞遠征よりベルリンに到着した自分は兼て東洋人としての意識に燃えてゐたと見え、偶々駐獨トルコ武官であつたヱンベル少佐と交を結んだものである。ヱンベルはサロニカ軍團を率ひて青年トルコ黨の背景の下に君府に進軍して青年トルコ黨內閣を組織してアブヅル、ハミツドを廢し、立憲政治を布いたシヱフケツトパシヤと共に中心人物として鳴つたものである。ヱンベルは後、陸相となり第一次大戰に際しては戰ひ利あらず、トルキスタンに奔り遂に其の地にて命を殞したのであつた。シヱフケツトも後陸相となり次で首相の地位に上つたが、最後の自分の君府訪問の時卽ち大正十一年には旣に故人となつて居り、當時のハイ、コムミツショナーであつた內田定槌氏に導かれ、青年トルコ黨の記念碑に詣でたが、其の傍にシヱフケツトの墓があつて默禱を捧げたことを記憶してゐる。

共和國を建設して第一次大統領となつたケマル・パシヤはシヱフケツトの一部下でシヱフケツト、ヱンベル、ニアヂ等の先輩歿後に頭を抽んでた男であるが、當初より力量豐かで、ヱンベル等より敬遠されてゐたらしいのである。

昭和三年の外遊にも最近の昭和十二年にもトルコ訪問の機會を逸したが、日土協會を創立して其の常務理事の位地を汚して已に十數年に及んでゐる自分としては、トルコに關して思出の種も多く關心も深い。

第一次大戰の生んだ舊トルコ領下の悲劇はシリヤ、パレスチン、イラク、ヱーメン等の半獨立國家となり、民族解放の波は定まる所を知らない現狀に推移してゐるが、更生トルコは今や强い步みを踏み出してゐるから指導者の指導宜しきを得ば、小なりと雖も强固なる西亞の獨立國となり、興亞の一部分を擔當し得る樣になるであらう。否

や現在の如き或は露或は英への依存を精算して眞に獨立の體制を整へんことを自分は衷心より希望する者である。

本日は民族史を繙いて初めにヱヂプト、次でトルコに及び、秋の日は早や西に沒せんとしてゐる。涼風は窓を吹いて人意に適せり。日暮れまでに林間を逍遙せねばならぬ。乃ち筆を擱く次第である。（九月一日後六時認之、拙著四大陸遊記並に大正十二年出版改造途上の世界參照）

十六、日本を強くするもの、若さ

林語堂は現代の世界を救ふものは若さと無經驗と正義感とだといつたと云ふ。何も玆に語堂の言葉を引用する迄もない。東亞新秩序の建設とか大東亞共榮圈の確立とか云ふも、要は此の際日本をより強くせなければならない。より強くするには若さを持たなければならない。若さの缺けては強い力と云ふものが出て來ない。若さを力づける正義感は總てのものを動かす力となり、其の力に依つてのみ革新が成されて行くのである。

從つて日本を強化する新體制は、先づ何よりも若さの原理の上に立脚し、其の原理の導く方向に前進するを要する。ヒツトラーは五十歳、その十二使徒の中一人六十三のフリツクがゐるが、之は唯一の官僚出身としてヒツトラーの好幕僚たり得るが爲めであらう。其の外は總て五十以下の若人で、シュラハの如き三十三の青年もゐる。英國のチャーチルは七十の老人だが、四十臺の若さの故に舞臺に乗り出し得た。今秋の米國大統領選擧戰に共和黨の候補として名乗り出たウヰルキーは四十八の壯年であり、我が近衞内閣も首相の五十を始め多くは五十前後の人で、經濟相たる商相の六十八、遞相の六十三はそれ〳〵特種の事情に依つて簡拔されたもの、大體に於て若い内閣と云へる。

山莊に閑居してほつ〳〵世の移り變りを靜觀するに若い者の時代となつたことを痛感する。彼等には幾多の失敗があらう。過誤もあらう。然し若さがなければ力が出てこない。力が出てこなければ革新は出來ない。遠き昔や外つ國に例を取るに及ばない。我が明治維新の原動力は多く二十乃至三十の若ふ人の力に待つ所が多かつた。明治元年に四十であつた南洲、三十八だつた甲東などは年長の方であり、伊藤、山縣、大隈の輩は皆な二十臺の若ふ人であつた。松陰は二十九、景岳は二十六で死んだのである。

翻つて自分を顧みる。三十一で伊藤公の拔擢を蒙り一等書記官として韓國宮中肅清の第一線に働いた。更に溯りて十八歳にして臺灣に渡り、十九歳にして大陸を踏み、二十一歳で東亞會の幹事となり、二十二歳で東亞同文會の幹事となり、二十三歳で同會上海支部幹事となり、同文滬報の主筆となつたことを思へば、前哲の若い時代に於ける飛躍も首肯されるのである。然かも六十四歳となつて身心を檢するに、視力と齒力に於て壯年に劣ることは意識されゐるが其の氣魄に於ては益々皇張して寧ろ壯時に優るの心地がする。之は自己の境遇の然らしむるものと云ふべく、名も求むる所にあらず、生活は安定して利を追ふの要なく、好後繼を得て祖宗に對する責任も輕く、殘す所は如何に餘生を祖國に對し、興亞の立志を如何程まで達成し得るか、如何に死處を得るか、如何に新事態に貢獻し得るかに存し、斷じて一身一家の安を貪るに非らざるが爲め、日常、天空海濶の心境もて生活し對處し得るが爲めに猶ほ若さを保ち得るのであらうと思ふ。

此の意味に於て自分は猶ほ若ふ人であらねばならない。去八月二十二日の放送の影響は、曩に隨想の内に觸れておいたが、諸方面よりする來信に於て相通ずる所は、「其の聲の若く、氣魄に滿ちた」點であり、中にも大正十年

以來相見ざる某氏から二十年前の聲其の儘であつたと申し越してゐる。未知の人は若々しいと一齊に噂してゐるとのことであつた。豈に男兒空しく老いんやである。（九月二日前十一時半ドクトル、フレーンの來書に接し女婿菅君と其の回答を評議した後に認之）

猶ほ「永遠の若さ」を保ち得る自分の特長は、過去四十餘年に亘る幾回かの海外出游であつて、新聞にラヂオに日日の出來事の多くは自己の曾遊せし邦々の事に係り、一事一物悉く自己の追憶を喚起せざるない。バルカンのこと、南洋のこと、南米のこと、印度のこと、歐山米水悉く自己の經過した所で、自ら他と感覺を異にするものあり、關心の程度が違つて居ると思ふのである。之が「若返り」の一條件を具へたものとも云へるであらう。今後、耳の聾せざる限りは世界隨處の出來事に、他と異なる關心を持ち得べく、目の盲せざる限り、東西南北の風雲に他と異なる注目を惹くであらう。是に於て乎、多年の遊跡が老いて自己を樂ましめる一要素となることを想はざるを得ない。以上追記

十七、不敗の地位、確保
―― 脚下を照顧する ――

不敗の地位確保は若さを保つ上に於ての一要件とも云へる。從つて此項は前項の延長とも見られる。死に至る迄、青年の若さを保つことは願はしいことであり、自分は少くとも今日迄は青年の若さを保つて來たと思はれる。其れには不敗の地位を保つことが必要である。不敗の地位と云へば不退轉の境地とも相通ずる。天を相手として人を相手にせず。其の日其の日の最善を盡くし、名を求めず、利に奔らず、昂々然として乾坤に獨歩するの境地、乾坤一布衣の心境、之が大丈夫兒の骨頭とも云ふべく、磊々落々、光風霽月、終始一貫、愉々快々の生活をすることが「青年の若さ」を保つの妙法でなければならない。

更らに不敗の地位を確保するの一要件は生活の安定である。生活の安定が確保されてゐれば、生活に就ての煩累が少ない。如何な丈夫兒でも生活に脅されてゐては其の心を勞することが少くあるまい。所謂恒産あるものは恒心ありで、生活の安定する所、一切を擧げて他に捧げ君國に奉ずることが出來る。自分には有餘の產はないが、どうにか生活の安定はある。生活に煩はされない。卽ち不敗の地位を確保する一要件を備へてゐると云へる。只だ他の爲めに計り人の爲めに盡くすに充分の資力がない。其れには今後の努力に依つて充實を期せなければならぬ。

按ずるに現在の年收は不動產收入、有價證券配當、勤勞收入を合せて〇〇圓內外に過ぎず、年支出を賄つて幾何の餘剩もなし、其れに民族政策研究所や梧室會の經費とか海外旅行とかの費用を見積るに於ては消極的には生活費を節減し、社交費を省き積極的には資產の增殖に依る收入增を計るの要がある。然かもこれは不敗の地位を確保する爲めにも緊要である。卽ち前にも屢次記述した通り、成る可く係累を省き無用の社交を廢して身心の存養を計ると共に冗費を節し、克く世の推移を洞察して生計の確保に力むるを要する次第である。斯くて自己の生活を保證すると共に進んで出來る丈け社會公共に貢獻し得るの資を得なければならぬ。（九月二日午後微雨蕭々の下に認之）

十八、象山神社に詣づ

象山先生は自分の幼少時代から崇敬する人物の一であつた。有志の企にて神社建立の擧あり、一昨夏川中島を弔

つた際にも昨夏、白根山登りの際にも松代の附近を駛過して今日迄、舊渇を慰するの機會がなかつた。偶々八月二十七日に於ける松原湖畔の遞信關係者への講演に赴くに際し、東導者の一人、丸子郵便局長の久保君が松代出身で案内せんと云はるる儘に今日を約したことであつた。

家妻は東京よりの飛電で夕刻迄に着京せねばならないこととなつたが、教育上の好資料も獲らるべしとの見地から、豫定の時刻を繰上げ午前六時四十五分沓掛發で松代に向ふことに打合せ、輕井澤驛前郵便局長の市村君と沓掛にて落合ひ大屋にて久保君來り合し、屋代にて須阪行の電鐵に乘り換へ、八時半に松代に下車した。町役場の岡部君、驛頭に出迎へられ、附近の海津城趾に赴くに、象山神社創建に努力され、地方史の權威である保崎氏、松代郵便局長の齋藤氏等も來り迎へられ、天王臺跡に登り川中島を俯瞰しつゝ保崎氏の微に入り細を穿つ當年の戰況を聽取し、更に明治大帝の明治十一年御臨幸の際、御野立遊ばされた高臺に立ち、御製にかゝる、

信のなる川中島のあさ霧に昔の秋の面影ぞ立つ

を謹誦し、謙信(三十二)、信玄(四十一)、兩雄始め幾多、舞臺に登場した英雄を偲んだことであつた。

時は昭和十三年八月十七日の未明、家妻、菅夫妻の四名で輕井澤の恰々山莊を出で、一路自動車を驅つて志賀高原行の途上、川中島の古戰跡を弔つたことであつた。其の時の詩に（續詩と人と境、第四十三—四十四頁參照）

其　一

訪レ古兩雄鏖戰村。恩讎安在一無レ存。筑摩水邊當年跡。激レ石鳴湍萬馬奔。

共　二

典厩墳孤望渺茫。龍拏虎擲幾登場。兩雄一去山河在。十里平蕪草亦香。

などあり、此の朝、涼風面を吹いて秋氣濃く、四山の風物頗る意に適するものあり、仍つて右の韻に次して左の如く卽吟した。

詣「象山神社」次二川中島懷古舊韻一

其の一

秋風黃落夕陽村。英俊遺蹤歷尙存。指點當年爭覇迹。長流激レ石噴雲奔。

其の二

英雄事業感滄茫。七十餘年夢一場。却有二清溪漣不一レ盡。達人祠畔藕花香。

それから歩して象山神社に詣で、神官の案内で吾等夫妻の外、一行七、八名、內殿に進んで玉串をあげ、神酒、神饌を戴いた。新建早々のこととて木目の香も紛々として鼻を打ち、すがすがしい心地せられ、地下の象山も定めし昭和聖代の隆運に安賭の胸を下ろすと同時に一億皇民の不斷の努力を期待されてゐることと思はれた。終つて神社に隣れる先生の舊居の跡を偲び、社務所の應接室に小憩して更に保崎氏の史談に耳を傾け、又請はるる儘に車中の卽吟などを揮毫したことであつた。

其の三

夙擲二微軀一獻二帝闈一、不レ辭熱血濺二中原一、象山祠仰人千古。欲レ喚英雄不レ死魂。

と云ふのが參拜の際の卽吟である。先生は幕府の忌憚に觸れ四十四歲より五十二歲の八ケ年間を象山山下の自邸に

屏居され、五十四歲の夏京都で川上玄齋の兇手に身を捧げられたので、時至つて神となつて一世の渇望する大人物となられようとは豫期せられなかつたことであらう。天の照鑑は地球の四時回轉すると同じく決して間違はないのである。敢て人に向つて語るを要しない。只だ大道と直前せばよいのであることを示されてゐるのである。社務所を出で十一時、八田家を訪ふて當主彥次郞氏夫妻の接待を受け、其の祕藏に係る象山先生の書畫を賞鑑させて貰つた、中にも先生自筆の山水畫に題された。

城中沽㆑醉眠生㆑花。吟步蹣跚帽子斜。山雨初晴溪路滑。石橋殘日未㆑還㆑家。

予屏居、嘗作㆓此圖㆒、八田子靜、復強㆑予爲㆑之。象山樵夫

一絕あり、書も畫も共に素人の域を脫してゐる。自分は乃ち直に之に次韻して、

海津城外發㆓荷花㆒、款段祠邊日欲㆑斜。絕代偉人猶儼存。遺芬幾寶素封家。

とやつて見た。八田家は眞田家の臺所を持つてゐられた舊家だそうで、象山神社建設會にも會計監督として之に當られたことは記錄に見へる。同家の泉石の配置も見事であつた。由來松代は今日では一萬人足らずの小市であるが十萬石の城下として、風流韻事の趣味ある人も多かつたそうで、街頭に猶ほ少なからざる骨董店を見受けられる。八田家に在る先生の軸物の中に更に左の樣な長古一篇がある。

擬　古

有㆑魚在㆓北溟㆒。長大絕㆓其夷㆒。首尾各萬里。世人何得㆑知。煦爲㆓天下雨㆒。怒作㆓天下雹㆒。掀翻揚㆓波浪㆒。列宿爲㆓蔽虧㆒。身大海猶淺。時時見㆓其鰭㆒。長鯨數有㆑限。難㆔以飽㆓吾飢㆒。託㆑生未㆑得㆑所。何許是天池。

自己を大魚に例へたはよいが、「世人何得㆑知」と云ひ、「身大海猶淺、時々見㆓其鰭㆒」と云ひ、最後に「託㆑生未㆑得㆑所、何許是天池」と云ふに至つては、象山先生らしいが、また一面よりせば缺禮ながら「猶ほ未だし」の感がしないでもない。乃ち自分は次韻して斯ふ唱つてみた。

誰言行路難、大道坦而夷、矯㆑首觀㆓宇宙㆒、斯心天只知、救旱思㆓膏雨㆒、發聾待㆓激雹㆒、君子無㆓明晦㆒、嫦娥有㆓盈虧㆒、自嗤海尙小、不㆑足㆑振㆓大鰭㆒、夙得㆓長生訣㆒、不㆑食亦不㆑飢、洗去人間垢、悠悠浴㆓玉池㆒、

然し、考へて見れば、之は先生屏居時代の作だから四十四歲乃至五十二歲迄の作で、先づ四十臺のものと見てよい。自分は早や六十四となつて、少くとも先生よりは十歲の年長であり、而かも時勢の御影で、自分は歐山米水、到る處に足跡を印し、世界の風物に接し、古今の人材とも典籍の上でも又眼のあたりにも見てゐる。其の境地が先生より徹底し、より洗練されてゐても、それは當然のことで先生を後に憧着せしむる何物でもない。

八田家を辭し保崎、齋藤兩氏に別れ、今度は田町の眞田家菩提寺畔に在る南澤家を訪ふた。先代時義氏は最近迄御存命であつたそうだが今は故人となられ、嗣子は中日實業の濟南出張所に勤務されてゐて、現に若林なる長野師範教授が借家してゐられる、時義氏の實弟安雄君は則ち海軍機關學校時代の同窓で大尉時代、松島乘組となり艦と共に殉死したので青山墓地に在る同君の墓碑の字はクラス會の希望に依り、不肖自分の揮毫したものである。と云ふ樣な次第で、其の跡を弔ひたいと思つた所、岡部君の斡旋で些少の時刻を割いて同家に休憩し、昔しながらの面影を存すと云ふ庭に面した一室で夫妻の外、同伴の市村、久保兩君と携帶の行厨を解いて午餐をしたため、又其の床の間に揭げられた象山先生の五言律

永晝無レ所レ事。散歩愛二園林一。新篁傳二玉色一。淺瀨帶二琴音一。
功名不レ及レ古。經劃無レ補レ今。壯心未二全灰一。時學二梁甫吟一。

を賞鑑した。之も象山山下屏居時代の作で、先生の心境がありありと窺はれる「壯心未二全灰一、時學梁甫吟」で、四十臺の働き盛りに八ケ年の屏居、然かも幕末多難の際に利器を抱いて故園に横臥せし先生の襟懷は充分に拜察される所である。自分は之に對しても次韻を試みた。

山墅微涼動。西風滿二故林一。前庭急二蟬語一。後砌綴二蛩音一。
炎運豈唯古。新籌應レ及レ今。倘懷經世志。不レ用梁甫吟。

十二時半、南澤家を辭し、同五十分發のバスにて篠井に出で、其處で久保君等に別れ一時三十七分發にて秀子は東京へ直行、市村君は輕井澤へ、而して自己は沓掛に下車、徃く徃く詩構を練りつゝ三時半恰々山莊の人となつた。

此の行、松代に在る僅かに四時間に過ぎなかつたが專門家の案内を受け、又舊家の遺藏を賞し、故友の跡を弔ひ抔して最も有益なる一日を過ごし得たのであつた。先生を追憶するにつけても、我が皇國の隆運の一日に成るに非らざるを痛感し、躬ら殘年を有意義に費やし先哲に耻づるなきを期するの熱情に驅られざるを得ないのであつた。（九月四日、近來にない炎暑―華氏八十度―に階下に降りて認之）

十九、ペルシヤとアフガニスタン

コーン博士の民族運動史を讀み續けて今日はペルシヤ卽ち今のイランとアフガニスタンに及んだ、イランの懷舊は「隨想其の十三」に略述しておいたが、アフガニスタンは其の國内には入らなかつた、當時外人の入國を禁じてゐたからだ。然し北は國境のメルブからクシュクに進んで其の一端に觸れ、南はカイバル峠に上りて其の狀勢を一瞥したことがある、前者は明治三十五年後者は同四十三年のことである。共にアフガニスタンが英露二强の緩衝地帶として調査の必要があつたからだ。トルコの共和制、イランの新王朝の成立と前後してアフガニスタンにも歐風漸く侵潤して今の狀態に迄進んで來た。我が國が條約を結んで公使交換のこととなり、曾てアフガニスタンに遊んだ經歷のある田鍋翁の主唱もあり自分も之に贊同して、今のアフガニスタン倶樂部を設け委員の一人となつたのも早や十年の昔のことであつて、歷代の公使や留學生などと交驩の機會もあり、又邦人の彼地來遊者を送迎することも屢次のことであり、他人に比しては關係ある一人と云へる。

印度以東のことは云はずもがな、顧みれば興亞の志を立て先づ北は樺太、西伯利より支那大陸、臺灣に及び、更に佛印、蘭印、英領馬來、タイ、比律賓等南亞細亞の各地に足跡を印せざる所はないのである。或は事業に或は國際團體に關係して今に至つてゐる。

東亞同文會理事（創立四十年）、南亞公司、今の昭和ゴム會社取締役（創立三十年）、南洋協會相談役（創立二十八年）、日土協會常務理事（創立約十五年）、アフガニスタン倶樂部委員（創立約十年）、タイ協會評議員（創立約十年）、比律賓協會評議員（創立約八年）、日蘭協會副會長（創立約十年）東洋拓殖顧問（在任約十年）、其の他亞細亞關係の團體創立に關係し役員となつて今に至れるもの十指を屈すべく、日露協會と日印協會の二者丈けは創立當時に關係したるも中途退會したり。斯く書し來れば自分と亞細亞各國との交涉は古いもので、支那大陸とは明治二十九年卽ち四十五年以來のことで新しいのでも二十年の歲月を閱してゐる。其の間に於ける世界の變遷、延い

ては亞細亞の變遷は著しく、就中、日露戰爭に刺戟されたる亞細亞各民族の覺醒は歷史の轉機を劃する動機となり第一次歐洲大戰より滿洲事變、此次の支那事變、第二次歐洲大戰となつて今日の新體制を馴致するに至つた。我が國が亞細亞の盟主となり大東亞共榮圈を確立して亞細亞の開放を實現し、世界の平和に貢献せんとするの體制已に其の緒に就かんとしてゐる。自分も相當長い歷史の人となつたものである。宜しく身心を存養して長壽を保ち、此の歷史の轉換に一指を染むると共に其の歸趣を出來る丈け長く見守りたいものである。數日來亞細亞民族運動史を閱してイランとアフガニスタンに及び所懷の一端を吐露する次第である。(九月六日後六時半細雨蕭々の下に認之)

八十、イランの近況を聽いて

一昨夜軍人會館に於ける日本イラン文化協會の晚餐會に列して最近同國より歸朝の大日本航空會社の樋口君談話を面白く聽いた。食卓では會長不參の爲め主人席を與へられ自然樋口君と對坐しだので色々と話を交換した。自分のイラン行は明治三十五年のことだから三十九年前である。協會設立に奔走した山內君が之を聽いて自分の生れる以前のことだと云つて相笑つた樣な次第である。爾來イランは新王朝となり漸次歐洲文化を取り入るると共に獨立國の形態を整ふるに至りつゝある。矢張り亞細亞に於てはシャムと共に其の將來に囑目し、兩國との經濟、交通、文化關係を密にして亞細亞興隆の一圈たらしめなければならない。「そよ風」號の一件は兩國親善の一楔機であり其の際にイランに往つた永淵君が主唱して出來たのが日本イラン文化協會であり、自分は長老として顧問の名を與へられてゐる。列席の多くは壯年の人々でイランに關係ある連中の樣であつた。座に田鍋安之助翁ありアフガニスタン倶樂部の今後に就て相談したいとのことであつた。或はイラン協會と合同してとも考へられる。共に中西亞に於ける回敎の國であり、境を相接し人情風俗自ら相通ずるものがある。此の議が纏まれば至極好都合と思はれる。偶々イラン談に耳を傾けて當年の壯遊を偲び、又アフガニスタン倶樂部との合同問題にもヒントを得たことを茲に記す次第である。(九月二十二日夜、熱海息心海莊にて認之)

八十一、昭和十五年晚秋、行事五片

一、石射猪太郎大使を送迎す

一昨二十六日、日伯中央、日蘭、南洋三協會の主催にて石射前駐蘭、新駐伯大使の送迎會を丸の內、丸內會館で相催ふした。集まつたものは次に示す通り三協會役員のみであつたが、三協會を代表して自分より挨拶を述べ石射大使之に答へられた。

仍つて思ふ、大使は同文書院第五期出身であり昭和の初、通商第三課長時代から自分との交涉が始まり、同三年ハバナに第三回國際移民會議の開かるるや石射大使は事務長として又自分は代表顧問として參加し約三週間に亘り世界四十ケ國の代表と會同商議したことであつた。而して自分の副會長たる日蘭協會の相手國たる和蘭に使し、今は亦自分の創立したる日伯中央協會の相手たる伯國に使せんとせらるゝのである。自分とは相當の因緣ありと云ふべしである。

明二十九日後一時半より高輪邸にて總裁高松宮殿下の御召に依り石射大使を同伴して伺候することとなり、明後

三十日は伯國大使の午餐會に共に招待されてゐる。

深尾男曰く「本日の三協會は三協會とも君の造つたものではないか」と眞に然り、二者には副會長、第三者には相談役たるも、三者共に自分が重なる創立者の一人たるは事實也。自分の足跡を追想して微笑を禁じ難く仍つて一言を題する次第也。（九月二十八日認之）

二、紀元二千六百年記念觀艦式を見る

十月十一日の記念觀艦式は天晴れ風なく絶好の軍艦日和であつた。海軍省の案内で金龍丸に乘り込んで其の盛儀を拜觀した。前五時半に起床し、朝食を取る餘裕もなく五時五十分家を出で、漸く七時二十分の定期に乘船するを得た。觀客は船中に充滿し立錐の餘地ない程であつた。見知りの人は加藤平治郎君に加藤正治君位のもので他は一切路傍の人であつた。

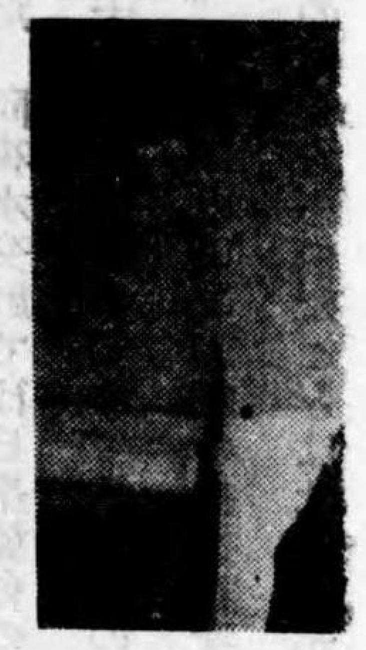
九時、　陛下御着横、御召艦比叡に御乘船、艦列の間を御巡閲あらせられ終つて後二時半御上陸御歸京の途に就かせられた。我が金龍は徐々に碇を掲げ御巡閲の巡路に依つて艦列の間を一巡し後四時半埠頭著、五時上陸、急行電車にて六時歸京、鐵道協會に於ける國策研究會に列し夜十時歸宅したのであつた。

此の半日、船上に停立して想は四方に馳せたが所謂無念無想の半日であつて一詩竟に成らなかつた。只だ無念無想の生活を味ひ得たのみであつた。（十月十七日認之）

三、伊藤公百年誕生記念祝宴

去十六日は伊藤公御誕生第一百年の紀念日に當り同公傳記成りたるに付追頌會同人の記念晩餐會が華族會館で開かれた。同夜水交社では日墨協會の總會があつたので之に顔を出し六時の定刻に會場に赴いた。八十四歳の山本男始め、八十翁の國分三亥氏、國澤新兵衞氏等始め七十翁の石塚、小松、原其他の老壯五十餘名出席。食後、中田敬義老の挨拶に次ぎ、小松、原、大島、岩田諸氏の追悼辭があつて九時散會した。

公の偉大であつたことは此傳記が明に示して居る。自分は明治三十一年天津にて始めて公の顔を拜し明治[illegible]



（一の

（二の

なかつたか　奉祝會の當日に
高松宮殿下の迫力あり熱意ある
奉祝の御言葉を拜し平素親炙の
光榮を持てる自分として特に感

激禁じ難く最後の「臣宣仁謹んで白す」の御言葉を拜するに至りては、是れある哉、日本は神國であり、天子は一天萬乘の君たる尊き國體が身に浸みて有難く感ぜざるを得なかつた。

參列者は五萬餘人、寔に神々しく一同隻語なく四境の嚴乎たる風景、正に悠久二千六百年の祝典を壽くが如し。宮殿や二重橋の上を往きこう鳶の群も此の日は一層神々しさを覺へしめたのである。

又同時刻から帝國ホテルで龍門社の秋季大會の催される日である。然し曩に成吉思汗の雄圖を蒙疆に偲び、耶律楚材の英風に憧憬せる自分としては此の機を逸すべくもない。仍て突嗟の思ひ付きで、劇場に飛込んだ、成吉思汗の一劇さへ看ればよいのだ。七十七錢で三階への切符を求めて開幕を待つたのは正に三時五十分、四時半の開幕まで夕刊を讀んで時を過ごした。此の劇は曾て繙いだ某氏の著の史實に據つたもので、四幕七場、六時半に終つた。

最も興味を惹いたのは彼の夫人に對する渝らざる至純の愛情と、辛酸を共にし大蒙古建設に協力した心友ジャムに對する友情と、即位式後に於ける第二世の撰定、其の發表であり次男が腹違ひの長男を排し相爭ふを見て三男のオゴタイを世嗣としたこと、然かも蒙古帝國建設の大業を偲んで兄弟四人の一心同體を戒めたこと等であつて、彼も亦一大英雄なる哉の感を深うした。（十一月二十四日、息心海莊に於て認之）

二 「得庵詩文」を筐底に得て

一昨日書棚整理の際圖らずも「得庵詩文」てふ一小冊子を獲た。表紙に「明治三十七年二月十四日入手」と手書してゐる、想ふに根津一翁の旨を體して熱海に將軍を訪ひ「朝鮮處分案」起草に當り將軍の高見を聞かん爲めの訪問の際であつたのであらう。昨日の祭日を利用して久振りに海莊の人たるべく、車中之を携へて讀み且つ味つたが其の十三頁「送川上操六之宮城鎭臺」と題する長古一篇の上に

明治卅七年初春、訪得庵將軍於熱海

談論移晷、臨辭、將軍呼侍曹齎其自著、歸宿、蓐中朗吟此詩、吐氣如虹。

とあり、其の長篇の後半に曰く

人鬧杲爲爭奪境。山河竟是渡頭船。茫々乾坤誰是主。還爲群生轉堪憐。君唯低首聽吾語。聽了仰首涙潸然。忠直如君難與道。狂言於我如雲烟。拍手大笑更呼酒。爲君醉吟詩一篇。魯叟榮辱定身後。楚國存亡付生前。君不見北狄近者猖獗。著鞭誰爲祖生先。白馬長嘶風淅々。蒼鷹高飛雪翻々。去矣寒候君且愛。浪華城外路八千。

想ふに將軍明治十三年（庚辰）、居を大阪に移し天王寺畔に嘯傲された頃川上將軍の仙臺行を送られたるものなるべ

く、夙に露西亞の南進に關心せられた狀が察せられる。明治三十一年夏に川上將軍と行を共にして西伯利に長征した自分は、後六年、明治三十七年一月に日露の風雲急を告ぐると共に韓半島より歸京し、越へて二月、朝鮮處分案一篇を草して要路に建議ぜん爲め、時の東亞同文會幹事長根津先生の命を受け熱海に將軍を訪ねて其の意見を問いたのは、未だ記憶に新なものがある。惟ふに「得庵詩文」は其の際御手から自分に賜はつたものなるべく、三十七年後の今日、幸に頑健にして將軍の愛着されたる熱海の山莊に於て、改めて之を通讀して思を遠く當年に馳すると共に、男兒空しく老ゆべからざるの感を新にする次第である。

玆に記して得庵、川上兩將軍を偲ぶ。得庵將軍の詩一、二左記

歳　寒

俯仰乾坤小。自容一介臣。誰知風雪裡。辛苦老成人。

晩　春

欲下擲ニ微躬一報中國家上。功名空競半生涯。如今多少心中事。付ニ與春風一吹ニ落花一。

祭故人

大道茫々欲レ問レ天。功勳未ニ必報ニ生前一。看來末路人多跌。不レ及安然占ニ墓田一。

讀　書

讀書還覺我愛深。慷慨猶存鐵石心。清夜沈々時掩レ卷。短檠照盡古來今。

（十一月二十四日、息心海莊にて認之）

三十二月二日

昨今は相當多忙の日を送つてゐる。試みに十二月二日を例に採る。同日の行事如レ左

午前六時半起床一浴。午前七時―七時半朝食。新着の郵便を檢す。午前九時―十時、松岡外相を千駄谷の私邸に訪ひ用談。十時半―十一時二十分、外務省に大橋次官、山本東亞局長、及南洋局に豐田課長、三好領事等歷訪。十一時半―十二時五十分、和蘭公使館にパブスト公使及ギュリツク通譯官等と會談。一時、日本クラブ午食―二時、鎌田氏來訪、研究所出版の件協議。二時半「丸ビル」に諸買物。三時、大日本石油に水田常務と會見。四時―六時半日本劇場にタイ協會の招待にて「シャム」舞踊を觀る。次の題目たる「支那のスパイ」及「閣下」共に使咬に富めるものあり頗る快心、時々映畫觀賞の常識養成に必要なるを思ふ。七時半歸宅。八時半菅圓吉君來訪フレーン博士著述の件相談。八時半、三菱商事服部常務より電話あり、陽一、今回カルカツタより獨逸伯林へ轉任の命下れりと夫婦大に喜ぶ。讀書十時半就床。

此の如く每日多忙の日程を繰返しつゝあり、時に靜居を想ふ。（翌々四日に息心海莊に入つて認之）

八十三、昭和十六年春、息心海莊隨想　四片

（一）

一、滿六十四歲の吾れ

明治十年二月二十三日生れの自分は本二月二十三日で滿六十四歲となつたわけである「已入ニ無生無死境一、青春六

十髮無﹅霜」ではあるが、人生は眞に無常である且に夕を計られないのが其の恒の姿である。意氣常に豪なりであつても肉體の漸衰は免かれ難い。先づ七十の阪を越ゆれば一段落、七十五で二段落、八十で三段落、我が兩親は八十を越ゆる僅かに二、三歳にして共に他界されたから、其の同じ壽を賜はるとしても今後二十年に過ぎない。其れ以上は餘恵として感謝すべきである。然かも既に第一線を退き秋に入つた自分としては原則として秋に在るものの使命に安住して第一線の者を後援し、鞭撻して國家に奉公し、已むなき場合に於てのみ第一線の守りに任ずべきである。然かもそれは七十を限度とし、七十にして身心共に壯者に譲らざる限り、而して時勢の必需する限り之を延長するも亦可なりであらう。要は求めざるに在り、已むを得ざるに在り。

（二）

斯くすべしとして靜かに自己を顧みる。猶ほ平生の行動に無駄があり、時と心の浪費があり、人生の秋に在るものゝ天職を遂行するに猶ほ專念せざる所あり、之の無駄を省き時と心の浪費を去り、現在の天職を完遂するには如何にすべきか。曰く

一、讀書と靜思と保健の時間を用意すること。之が爲には成る可く夜の會合を廢し、原則として午前中は在宅すること、一日一時間位は徒歩に費やすこと、午前中を讀書と家政と文書の處理と應接に費やすこと。

二、更に應接は原則として倶樂部又は出先にて濟ますこと、官民との接觸、交渉は其の隙間を利用すること。

三、關係團體中、第一線に在るものは漸次之を後繼者に讓ること南洋協會の場合の如くすること。但し現に副會長相談役、顧問等の地位に在るものは毫も差支なく、又人口問題の如き今後の努力に待つべきものは第一線に立つて其の完遂を期すべきは責任上當然なり。

四、南進の指導者として今後に處すべきは已みなき責任なり、從つて必要の場合重ねて南游を辭せず。

五、興亞一路の道を踐めるものとして必要の場合、之に相當の力を割くことも亦已むを得ざる所なるも、昭和十三年以來三回の大陸視察に依つて略々其の概況を知り得たるを以て、今後は自ら進んで買つて出ることは差控へたし、時勢の必要とある場合は別として

之を要するに自己の心境は人生の秋に在るものゝ職責を完遂するに存し、之が爲めに最善の方法に依り最後の努力を爲すべきであつて、此れが爲めには無駄を省き、時と心の浪費を去り、自己の天職を完遂するに最も有効適切なる生活に終始することである。

（三）

山莊の一日庭後の櫻花半ば開き鶯聲欣々、人の耳を樂ましめ、日暮れんとして春霧四塞して眼下の春海は視野の外に在り、時に汽笛は列車の發着を示すあるの時、獨り息心海莊の客となり、想を千山萬嶽の頭に馳せつゝ所感の一端を記して滿六十四歳の吾を顧み吾を送る次第である。（昭和辛巳十六年三月十二日、熱海息心莊にて認之）

附――時と心の餘裕を作り、無駄を省いてより大切な方面に向つて活動し、且つ活動の源泉を涵養する爲め、關係方面の現状と自己の立場を考慮して大小輕重を斟酌すること左の如し。

一、創立以來の關係あるものは出來る丈け關係を持續して有終の美を濟すこと。例へば東亞同文會、昭和ゴム會社南洋協會、日蘭協會、日伯中央協會、日土協會、アフガニスタン協會、人口問題研究會、日墨協會の如き是なり

二、次は創立者に非らざるも永年關係せるものは事情の許す限り之が關係を持續せしめて可なり。例へば朝鮮中央協會、日タイ協會、同仁會、海軍協會、比律賓協會、日本イラン文化協會、國策研究會、日本拓殖協會、東亞振興會、日本國際協會の如き是なり。

三、社交倶樂部としては日本工業クラブ、日本クラブ、交詢社を主とし、臺灣クラブ其の他は便宜退會するか、又は出席を省く可し。

四、娯樂クラブとしては學士會は賛助會員たり、東京クラブは株主たるも會員としては退會し、霞ケ關クラブは陽一名義に切り換へ陽一外遊の場合は地方會員として籍を置くべく、熱海クラブは出資者として殘留し、熱海溫泉は株主として共同の利害を負擔すること當然なり。

之を要するに無駄を省き、事の大小輕重を計つて其の大なるもの重きものに心と時を費やし、其の小なるもの輕きものを棄て身心を長養しつゝ、立言、立行、立德以て最後を全ふすべきのみ。庭後の櫻樹正に滿開、日西に入らんとして春靄糢糊たり、天暮れて只だ蟲聲と汽笛を聽くのみ。（三月二十二日夜七時半追記す）

二、○○○○と我が所謂資本家の態度

最近、聞く所に據れば、○○は○○側の希望もあり、○○國の銅山に手を出し、已に百萬圓近くを之に投資して收益の見込未だ立たず非常の窮境に在り、之に融資せる○○銀行及○○現地も困阨せり。而かも之に對しては定款の變更もせず、從つて株主にも圖らざるのみでなく、重役一般にも協議したることなく、それやこれやにて○○側は其の所有株を○○に肩替りせしめて手を引き、○○は之に依つて總株數の六割以上を保有し居れりと、是れ全く一には彼等が創立者たる自分の意志を沒却し株式の絶對多數を擁して獨斷專行せしものと云ふべく、二には○○側の頤使に甘んじて會社本來の業務の外に逸脱したものにしてお話にならない。曩に之のことを仄聞して○○の○○社長に耳打ちしたのであつた。最近、愈々行き詰りとなつたことを聞き、一言、其の本を正さなければならぬ。

（一）

元來創立者たる自分は大正十四年○○○視察の際、太平洋岸の南米諸國には我が內地資本に依る一企業なく、特に○○○の如きは過去數十年に亘り彼我の交涉あり、○○○○○の金山失敗あり、而して在留同胞は○○の市中に密集し往々にして彼我葛籐の種となるのみでなく彼等を地方に散布して農耕に從はしめ、土に親ましむることが、即ち彼等の基礎を固ふすることであり、彼等に平和生活を爲さしめることであり、兩國葛籐を避くる所以であることを考察して、之を時の大統領○○○氏に計り、其の滿腹の賛同と助力に依つて偶々主人死して未亡人が多數の子女を擁して、其の管理に手を燒いてゐた伊太利人○○○○○所有の○○○耕地を十年一期として租借することとなり、現地に於ては○○、○○出張所長の○○君並に棉栽培に經驗深き○○君を得、歸朝早々、之を○○、○○の兩君に謀り直に其の賛同を得、此の兩君と○○の三者で八割以上の株式を保有し、殘餘を自分の平素親近せる○○の○○、○○、○○、○○○、の外に○○、○○の諸君を加へ玆に全部我が內地資本に依つて經營することとなつたのは大正十五年のことと記憶する。資本金○○萬圓、陣容は自分自ら社長となり、現地の○○君を常務とし○○君を監査役として之に配し、社長を補佐する本社の專務は○○○○專務之に當り、○○、○○兩君側より各二名の重役を出し、之に○○の監査役を加へたのであつた。

（三）

斯くて直に耕地の受渡を了して耕地を整理改善し、其の水量の豐富なると土地の良好とは忽ちにして〇〇〇〇鉛谷に於ける最良の耕地と化し小作、直營の再建に依り又〇〇〇人の外に我が同胞多數を入れて農耕に從事せしめ創立の第二年より一割配當を常例として株主に分配し來り、故服部金太郎翁をして「私は海外企業には贊同を求めらるゝ限り、多少の資本を出して之に協力して來ましたが、大抵は失敗に終れるが如く、只だ一の例外としては〇〇の創業以來成績の良好なるを見るのみです」と語らしめたことは今も自分の耳に殘つてゐる。

然かも自分の庶幾せるは決して區々の利益追求ではない。前に述べた通り、太平洋岸の南米に我が內地資本を投入して我が國が單なる移民の出稼ぎ國にあらざること、我が國力の相當なるものたること、我が資本を先づ出して漸次に彼の國の資本を誘導すること。在留同胞の地位を向上せしむること。斯業を基地として漸次他に及ぼすの第一段たらしめること、內地資本に依る企業を盛んならしめて我が輸出入貿易を擴張せしめること。特に棉花栽培を選んだのは、棉花が我が必需の原料たるのみでなく、〇〇〇棉の品質が埃及棉と同列にして米棉の上に在ること等の觀點から、斯の會社を創立したのである。

（四）

創立者の此の信念、此の希望が後繼者に繼承せらるる限り今回の樣な失體はない筈である。遺憾ながら商估の徒は私利を重んじて國利に輕く、創立の目的に背馳して此の失敗を釀せしもの、痛歎の至りである。今回南游より歸つて一書を著はすに當り、舊記を筐底に得て之を見るに、大正七年卽ち二十四年前、自分が時の仲小路農相に提出せる意見の中に

海外發展の過程に於て邦人の無準備、無覺悟なること、之に反して外人が準備と覺悟に十全を期しつゝあること

資本家は克く事業を諒解して之を現地の適材に委し、現地の擔當者は克く力め克く任じて事業の進展に誤りなからしめつゝあること。

等を指摘しゐることを想出し、今日も依然として資に乏しく人なく、差したる進境を見る能はざるの狀態に在るのである。然かも第一線の人たる自分の創業せしものですら、〇〇の如き蹉跌を見るに至つては、何とも言葉の許しようもない。

我が〇〇〇〇の如きも事前に相談なくして双方の社長、專務に於て之を內定したる後に我々の耳に入れられたのである。創立者たる自分にも双方から豫め談なくして決定されたのである。双方共我が實業界に於ては最も理解ある人々である。然かも猶ほ、斯の如し。所謂實業人には創業者の志とか信念とかは恐らく風馬牛であらう。資本の多寡に依つて萬事を決するのであらう株式會社に在つて事業の運行は株主多數の意志に依るは商法の規定する所であるは言ふ迄もなく、創業者の意志を尊重することは則ち斯業の正しき恒久的な發展を招來する所以ではなからうか。斯く考へて來ると我が邦の企業、就中海外企業の永遠の發展を期するには資本家の思想に改善を加ふるのみでなく、其の準備と覺悟を定めしめ、適材を養ひて之に任じて疑はざることが緊要である。

偶々〇〇の現狀を仄聞して一言之に及び、以て自を戒め他を省みせしめんとする次第である。（昭和十六辛巳春三月二十四日朝息心莊にて認之）

三、舊友を憶ふ

（一）

六十四年を回顧するに最後迄交際を續けつゝあるものは極めて乏しく、又刎頸の交を永く保つたものも極めて少ない。要は時の變化、境遇の變化に依るのであらう。

鄕里時代。太閤時代のもので今に健在して記憶に存せるは、三上伊太郎（德川家康）だけである。

柏原時代のもので寄宿舍に同宿した內山昌雄も下野龜治も亦に健在らしいが交渉はない。

篠山時代。同級の四秀才と云はれた平野、杉二人は死し、村上は消息不明。

攻玉社時代。大角死し山本健在、其の他は消息不明。

兵學機關兩校時代。同窓の半は死し、最近にも坂部、金子二人を失つた。

早稲田時代。元來同級と云ふも交友關係少なく偶々あつたものの中、森、木塚は死し權藤、西川等一、二名を殘すのみ。

ウキン時代。ウキン時代では石井、牧野、藤井、小幡、佐藤（達）、今村等諸氏は健在なるが、石田、竹內、隈、千葉、淺山、肥田、西、能勢等皆他界。

ベルリン時代となつては鈴木、筑土、伊藤等少數を殘せるも玉井、畑、松石、長岡、栗田、川村、田村等多くは他界。

若しそれ事業關係では

南亞創業當時の重役で今に殘存せるは森村、ホケツの二人のみ、他は悉く他界。

東亞同文會創立當時の幹部で今に存在せるは田鍋と自分の二人のみ。近衞、長岡、陸、井手、中野、江藤、佐藤國友、恒屋、池邊等悉く他界。

南洋協會創立當時の幹部としては芳川、內田、田、早川、庄司、渡邊等悉く他界して殘存せるは井上（敬）と自分丈となつた。

（二）先輩を憶ふ

更に故人となつた先輩に見る。和田氏は六十四、伊藤公は六十八、兒玉大將は五十六、明石大將も同齡、實父死して二十三年、實母は十八年、養父は十七年、養母は十四年となつた。

幸に我が家は多幸、我等夫妻も小供も孫も共に健在であるが、老少不常、決して油斷はならない。只だ自分としては分に應じて終生を王事に盡くすべく、然かも若い者に邪魔物扱ひされない樣に心掛くること大切である。「御苦勞樣でした」の挨拶をかけられるは致方なしとするも「此からは私達のみでやります」とまで云はれない樣に出處進退を善處せなければならない。

何れにしても人生の秋に入れる者としては、每度言ふ通り立言、立行、立德の外はない。言を立て行を立てて德を養ふが一番適り役である。

四、大阪財界人との接觸

二月の或る日丸ノ內中央亭の茶會にて小倉正恒さんに會つた時、どちらからともなく、一度大阪に來て南方談を

して貰ひたい、イヤ望んでゐた所だと云ふ風に双方の談はきまり、三月になつたらと豫約して相別れたのであつたが、中頃になつて時日の都合もあるので小倉さんに書き送つたが、しばらくして電話が來て三十一日午後四時から會合したい少數の有力者を集めるとのことで、一昨三十日夜行で東京を立ち三十一日午前九時半大阪驛につき、先づ自動車を馳せて野村海外事業部に細田部長を訪ひ、更に秘露棉花に日置社長と會し、共に午食して秘露に於ける事業の狀況を聞知し、二三氏に電話して用辨、午後二時會場たる新大阪ホテルに小憩しつゝある中に、住友本社庶務係の桑田君來館して出席者の名簿や商工會議所片岡會頭と小倉さん連名主催の旨を述べられた。

後四時前後より左記の顏觸が相次で來會され、後四時半片岡會頭の丁寧な紹介の辭の後を受け約二時間に亘り南方問題、就中邦人の進出に就て講話し午後六時二十分終り、小憩の後、六時半より食卓に就き今度は小倉さんの是亦親切なる謝辭あり、自分之に答へ八時宴を撤し、多數は散會されたが小倉さん始め古田專務、松井、小林兩部長平賀林業所支配人等は後に殘つて休憩室に於て更に談話を繼續し、九時過ぎ小倉さん等に別れ、平賀、桑田兩君の見送りを受けて九時四十分發の臨時急行車に投じて一路今朝六時半熱海に下り、山莊に一日の閑を消して神を養つたのである。

小倉、片岡兩氏の挨拶や自分の意見等を總合するに、大阪財界人として南方企業に進出すべきこと、之に就ては更に自分の來阪を希望することあるべきことを述べられた。出席の通知があつて急に差支にて缺席された庄司、津田等諸氏を除いては出席者何れも財界の第一線に在る代表的人物で自ら自分の話に共鳴さるる所少くなかつた樣子であつた。此の小集が機緣となつて大阪人の奮發とならば至幸とする所である。自分は日蘭協調に依るスマトラ開拓に就ても相當衝込んで述べ、頗る手ごたへのある會合であつた。誠に感謝すべきは小倉さんが入閣問題にて一昨夜歸阪、昨日は午前より午後に亘つて關係方面と會談され、極めて多忙であつたに拘はらず、午後四時より九時迄も自分の小集に參加され最後迄接待されたことであつた。自分は氏が今回は恐らく無任所大臣として參畫せらるるであらうことを信じ、其の健鬪を祈るものである。(昭和十六年四月一日、梅花正に七分咲きの處、山莊に於て之を認む。此日小倉さん國務相任命の發表があつた。出席者二十餘名、氏名省略)

八十四、昭和十六年春雜感　三片

一、南洋協會宛電報寫し　一月三日發

本會相談役、日蘭協會副會長井上雅二氏は本二日芳澤特使の會見に先立ち午前九時半ブイデンゾルグに於て蘭印總督と會見せるが、同氏は四年前同總督着任早々の際、會見せる舊知の間なるを以て隔意なく懇談を遂げ且つ本會並に日蘭協會の兩國親善に微力を捧げつゝある旨述べたる處、同總督は好意を以て之を迎へたり。尙ほ現今國際政局極めて微妙なるものあるも、井上氏は三十年來兩國親善關係の促進に努力せる者として今後も兩國間の平和の橋として努力する覺悟なるを以て蘭印側に於ても同樣兩國親善の橋たるべく御盡力を願ふ旨をも述べ是れ亦其の意を諒とし出來る限り善處する旨答へたり。

曩に石澤總領事着任し、今回又芳澤特使來島を機會として稍ゝ雰圍氣の緩和しつゝあるやに感ぜらるる折柄、井上氏の純民間人としての會見は何等かの效果を齎らしたるものと觀測さる。

猶、同氏は蘭印日本協會長ウイヘルス氏始めスピット副總督、フアン・モーク經濟省長官等とも會見の上來る十一日スマトラへ出發の豫定留守宅へ旅程御傳へ乞ふ。堀口常任幹事（以上瓜哇支部より南協本部へ打電されたるものなるも戰前に於ける現地動靜の一端を傳ふるものなるを以て之を添附せり、昭和十八年十二月追記）

舊バイテンゾルグ蘭印總督官邸の一部一湖面に浮かぶは世界一の大鬼蓮

スマトラ・ブラスタギ・ホテル庭前の述者

二、大日本青年團副會長の椅子

不在中に大日本青年團副團長の椅子が秀子の頭上に下つた。全國五百萬青少年の母であると云ふ、女大校長始め幾多の肩書を有する者として又其の性格心境としても敢て求むべきに非らざるも當局より强ての要請もあり、其の地位に据るを肯んぜなければ、空位の儘とし、他に廻はさないとのことに學校關係者の諒解を得て就任したとのことに自分は大に之に贊同した。何んとなれば此の重大時局に當つて全國青少年の母として之を啓發し指導するは則ち與へられた天職であるからである。學校と社會、不即不離、全國に亘つて之が陣頭指揮に當ることこそ教育の本旨であるからである。

大日本青少年團副團長　井上秀子女史

國家總力戰の立場から久しく待望されてゐた青少年團の一元化は橋田文相を團長として去る十六日華々しく結成された。その副團長となり若き五百萬の母となる日本女子大學校長井上秀子女史は今年六十七歳だが青少年の指導者にふさはしい元氣な「お母さん」である。目白の女子大に井上先生を訪へば、先生は珍らしくも何十年振りかの和服姿であつた。

「これからの指導は目標をハツキりせねばなりません。高度國防國家建設を目指しての國民錬成です。女性は民族の母として將來の皇國の民を育む重大な役割を持つのですから、結婚、育兒、看護、衞生等の素地をもつと眞摯に育成せねばなりません。日常生活の消費方面の指導は勿論、生活の合理化、計畫化がなされねばならぬと思ひます。結局女性の務めは民族の母としての婦德の涵養にあるのではないでせうか」

女史は京都府立高女、日本女子大家政科を出て同校に教鞭をとり、米國留學後、同校教授として女子教育に盡瘁し、昭和六年に同校校長となつた。女子教育の第一人者として立派な經驗の持主である。（婦人雜誌所載）

三、電車の乘り越し

本日の東亞同文會理事會に出席の爲め霞山會館に赴いたが佐藤垢石君の「荒尾精」傳を得て日本クラブに於ける佛印對策協議會に出で終つて後五時半頃有樂町より電車上の人となり、同傳に魅入つてゐる間に目白を乘り越し高田馬場――の聲に驚いて下車、目白に引返したのであつた。

此の小些事を茲に記す所以は東方齋先生を想ふて覺えず、時と場所を忘れて目白を乘越したので人間の感激と興味を語るの一證ともなると思ふからである。

荒尾先生の傳は三十年前の拙著を第一として最近に小山一郎君の著あり、今又佐藤君の著に接す先人を顯彰する多々益々可也。茲に電車乘越の一齣を記す次第である。（昭和十六年四月二十四日後八時）

八十五、昭和十六年春、息心海莊隨想　三片

一、昭和十六辛己年の行事豫想

（一）

暮の三十一日バタビヤよりサラマンに飛んで華僑の頭目と會し、四千五百尺の高原に夜泊し、本年の元旦を迎へ卽日、復たバラビヤに飛んだ。卽ち相變らず匆忙に始まつた辛己の年も、二月十一日に東都に還つて此處當分は靜的境遇に入つた樣である。昭和十一年春に第一線から退いてより早や五年、同年秋の南游、翌十二年の第七次世界周遊、十三年冬の中支游十四年春の朝鮮游、同年秋の滿洲及北支游、十五年春夏の又北支游、同年秋の朝鮮游、而して同多より今春への南游、數へ來れば年として外遊の擧なきはなかつた。之は興亞一路の自分として當然取らねばならない行程である。然かも之に依つて東南亞細亞の新なる實地檢討は一應終つたと云へる。本年は恐らく靜の年であらう。靜の年には靜の年に對處する道がある。時局の推移は眞に端倪を許さないものがある。廣く學び深く考へ篤く行はなければならぬとすれば、本年は廣く學び深く考ふべきである。而して必要の場合、何時でも立つて行ふのである。

白首未レ封レ侯。遊蹤徧二九州一、平生一片志。唯在レ展二皇猷一、

（二）

そこで本年の行事を豫想する左の如し。

一、民族政策研究所の機能を發揮すること――本年中に數冊の研究發表を爲し、漸次同好の士を招來すること、一二年の成績を見て其の後の施設を考究すること。

二、南方問題が實行期に入れるを以て之に寄與すること――四月發行する「南進の心構へ」は、國民に克く冷靜に克く堅實に人を造り財を投じて南進すべきを示すの一助たらしめんことを希ふに出づ。大阪財界人との接觸も亦其の一階段なり。

一、近く人口局の設置となるべく、仍つて之を機として人口政策の推進に努力すること。

一、今夏は可成輕井澤山莊に立て籠つて讀書、靜思し、經綸を養ふこと。

一、「詩人と境」第三卷の原稿を作り上げること。

一、スマトラ開拓案實行準備のこと。

三、旅行大事記

十八歲の時、始めて海を渡つて臺灣に航してから本年二月南游を終へるに至る。此の間年を閲する四十七、今其の重なる外游を列記するに左の如し。

第一、準備時代――明治二十八年十月―同二十九年五月、臺灣蕃界――同二十九年六月―九月、中支、蘇杭州――同三十年七月―九月、東部シベリヤ、樺太、露清韓三國國境――同三十一年七月―十月、中支より北支、戊戌政變に邂逅（東亞會幹事として）――明治三十二年五月―三十三年十月（東亞同文會上海支部幹事、同文滬報主筆）北清事件に際會して屢々長江を上下す――明治三十三年十一月―十二月、東亞同文書院設立の爲め全國遊說――同三十四年四月、渡歐、ウキン大學入學（東亞同文會西部アジア特派員）――同年六月、バルカン半島――翌三十五年四月―五月、獨、英、佛、蘭、白等――同年六月―九月、露西亞、高加索、中央亞細亞、波斯方面――同年十二月、露西亞中央部――同三十六年四月、バルカン半島、土耳其――同年九月―十月、露西亞、土耳其、バルカン、露西亞シベリヤ、滿洲を經て歸朝――同年十二月―翌三十七年二月、朝鮮、內地巡遊、京城滯在。

第二、在韓時代――同三十七年二月、東亞同文會韓國特派員、遞信省囑託として渡韓、京城滯在――同五月、鴨綠江及南滿方面（第一軍に從つて）――同三十八年十月、韓國政府財務監督官として全南各郡巡視――明治三十九年十月―十一月、全南各郡巡視――明治四十一年七月―九月、韓國宮內府書記官時代、賜暇を得て福島少將（後の大將）と共に北支より中支へ――同四十一年正月、韓國皇帝南巡に陪從して南韓へ――同四十三年五月―四十四年四月、第二次世界殖民地視察、アメリカ、歐洲、アフリカ、アジア諸國二十八、行程約六萬哩――同四十四年五月、渡鮮。

第三、在南洋時代――明治四十四年六月、南洋開拓專業創始――同年十月、南亞公司設立、專務就任（現地擔當十二ケ年）此間南洋―日本並に南洋各地往來、其の重なるものを擧ぐれば――大正二年、軍艦淀にて蘭印及英領ボルネオ各島へ――同五年、スマトラ視察――同六、七年、三ケ月に亘りジヤワ及スマトラ視察――大正十年十一月―大正十一年九月、第三次世界周游（夫妻同伴）、アメリカ、歐洲、アジア三大陸。

第四、南米時代――大正十三年三月、海外興業社長就任、ヒリツピン視察――大正十四年四月―九月、第四次世界周遊、主として南北兩米方面――大正十五年七月―八月、第二次ヒリツピン視察（夫婦並に長男同伴）――昭和三年四月―十月、第五次世界周游、南北兩米を經て渡歐、シベリヤ經由歸朝――昭和六年十月―十二月、

移植民奬勵の爲め前後二ケ月に亘り各府縣遊説（足跡の至らざるは高知、山梨、長野、沖繩の四縣のみ）——昭和九年四月—九月、第六次世界周游、重に南北兩米視察——昭和十年秋、熱帶產業調査會委員として渡臺

第五、第二線に入つて——昭和十一年秋、十四年振に南洋視察、重に蘭印、英領馬來及タイ國方面、歸途臺灣に立寄る——昭和十二年四月—十月、第七次世界周游（夫妻同伴）、アメリカ、歐羅巴、アジア、南洋方面—パリーの國際人口會議に日本代表として參加、オランダに於ける國民使節、ヌルンベルグ大會參列——同十三年秋、中支方面——同十四年春、朝鮮（夫婦同伴）——同十四年十月—十一月、滿洲及北支（夫婦同伴）——同十五年四月—六月、又北支、蒙疆及熱河へ——同年十二月—十六年二月、芳澤使節と同行、蘭印、英領馬來、タイ、佛印、臺灣方面。

此の間の旅費を其の當時の時價に依つて計算しても約十二、三萬圓に達する。中支一ケ月半の旅費が僅かに四百圓、中央亞細亞約三ケ月の旅費が僅かに千五百圓の時代から、近頃の第七次世界周游の二萬數千圓に及び、四十七年に亘る大小の旅行數十回、其の實費十二、三萬圓と云ふ所、之に南洋往來二十數回の往復を精細に計上せば相當額に上るべく、此等を一々加算せば先づ十五、六萬圓と云ふ所であらう。何れにしても此の旅行、此の旅費が世界的智識と氣魄を養ふ學校であり月謝であつたと云へる。斯くて刻々眼前に展開する世界の新聞は多く曾識の處、時々顯はれる映畫も亦多くは舊知の國、玆に人をして永遠の青年たらしめ永久の若さを保たしめ、所謂無生無死の境に入つて六十、猶青春の氣に滿たしめる所以ではあるまいか。昔から「可愛い子には旅をさせよ」と云ふ「旅は物のあわれを知らしめる」と謂はれてゐる。旅に出でて世の甘酸が自ら判り、旅をして自ら人を知り他を知り、物の判斷が廣く且つ正しくなるのである。「井戶の中の蛙」は旅をせぬものの往々にして陷り易き病根であらう。玆に於て乎、過去四十七年に亘りて幾回か世界の山川風物に接し得た自分は天惠の渥きものとして、之を我が父母に謝し、我が國家に謝し、我が境遇に感謝して此の天惠を忝くせざるに力め、更に機會だにあらば之を續行して旅の賚らす恩惠に浴し、依つて以て國家民人に奉公し、死に至つて止むべきであると思ふのである。

偶々去月末に大阪財界人と接觸して歸途、此の海莊に客となり、淹留三日、滿開の櫻花の裏に淸明の季節を送り得た機會に曾遊の跡を偲んで此の記錄を爲す次第である。（昭和十六年辛巳春四月四日朝、將に歸京せんとするに先ち、熱海息心莊にて認之）

雲烟縹渺海天蒼、黃鳥綿蠻繞二海莊一、底事狂風吹不レ已、芳花委レ地我心傷、

二、「牧野伸顯」を讀んで

下園某氏の新著「牧野伸顯」を得て卒讀した。常に申す通り、牧野伯は私の生涯中最も尊敬し師事する先輩である。伯と私との關係は四十年前の昔、卽ち伯のウヰン駐在公使時代に始まる、私は明治三十四年五月に渡歐して、ウヰン大學に學び、翌三十五年六月中央亞細亞遠征の途に上る迄約一年有餘の間、終始指導を蒙り、特に中亞遠征には同伯の御援助に依つて實行し得たのであつた。春の夕、秋の朝、屢々伯を訪ふて其の訓諭を得たのである。歸朝後も其の關係は絕へず大正八年のパリ媾和會議より歸朝せらるゝや、偶シンガポールより同船して、伯は間もなく東亞同文會々長に就任され、私は伯の懇望に依つて同會常務理事の椅子を汚したのであつた。伯の書翰の中、同時代に於けるものが最も多く私の手許に存してゐる。

拙著の幾處かにも出てゐる通り、私の進退行藏に就ては常に伯の教を受けて最後の斷を下したもので——。明治四十四年の南洋開拓創始の時然り、海興社長就任の時然り、衆議院議員立候補の時然りであつた。伯は私の短所とする所を長所とせられてゐる方で、從つて私には最も有難い指示を受ける心地がするのである。

身邊の多忙と最近には乘り物の不便の爲め屢々奉伺の機會を得ず、心ならずも御無沙汰を致してゐるのである。たしか昨年六月北支より歸つて後に御伺して以來、まだお目に懸らないのである。本日偶々伯の傳を讀み、伯を思ふの情に堪へず、一度最近に奉伺する積りである。（昭和十六年二月二十五日、熱海海莊に入つて認之）

三、春山に薇を采る

此の日、天半ば晴れて風なし、朝八時海莊を出で夫妻相携へて久振りに日金山に上り、觀音堂に小憩して御籤を引く、番人に小資を給するの寸志に出づるのみ、固より吉凶をトはんとにはあらず、然かも左の句を獲た。

第二十六吉　將軍有ニ異聲一、進レ兵萬里程。爭知臨レ敵處、道勝却ニ虛名一、

却ニ虛名一の三字、最も我等の意を得たり。達人は宜しく虛名を却くべきである。此の頃〇〇の身邊に起つた問題にも〇〇が虛名を却けた實例あり、已むを得ずして立つ、自ら求むるを爲さずとは彼女の態度なり、我れ亦其の境地に安住しつゝあり、仍て此の句に次して

讀盡千篇秩、踏周萬里程、大觀天地小、一笑却ニ虛名一、

大觀せば天地猶小なり況んや區々五尺の身をや一笑虛名を却くべきである。

日金峠の茶屋に小憩して峯づたいに山を下る、行く行く薇を採るに少刻にして背嚢に滿てり即ち二絕を得たり。

其　一

春風促レ我度ニ崔巍一、近靄如レ然還樹微、夫唱婦和凾嶺路、携ニ將滿嚢蕨薇一歸、

其　二　次舊韻

攀ニ上春山一神氣淸、老櫻紅墜只鶯聲、采薇不レ着夷齊痕、滿嚢携將和ニ菜羹一、

薇を手にしつゝ相語る底事ぞ。虛名を却くるに在り、殘年を有意義に過ごすの手段に在り。父祖に感謝を捧ぐるに在り。來る五月二十一、二兩日に歸村、亡父十七周忌法會を營むに當り、紀念の爲め兼て興禪寺より申出でありたる位牌堂の新築に喜捨すること、井上神社新築の棟上祝を爲すことも亦話頭に上れり。夫婦此の日感恩の念に滿てり。益ゝ自肅自戒して殘年を公に献せんとす。（昭和十六年四月二十六日夜認之）

八十六、昭和十六年晩春五禱莊隨想　八片

一、昨　日　と　今　日

久振りに日曜を熱海海莊に過ごして采薇に半日を樂んで同夜歸京した自分は、月曜（二十八日）早朝九時日本クラブに入つて永田安吉氏の來訪を求め同時半相携へて首相官邸に村瀨長官と會し佛印對策協議會申合せの事項並に理由書を首相、海、陸、拓務、大藏、商工の六大臣に手交を托し、歸途海軍省に立寄つて副官並に軍令部員と會し十一時日本クラブに引上げた。外相は病缺の爲め友田祕書官に傳達を依賴し、更に戸別訪問を後日に期したのであつた

正午中央亭に於ける國際協會評議員會、同十一時半A1に於ける滿洲移住協會の同じく評議員會に顏を出し、三時又日本クラブに立寄つて小幡君とアフガン協會の件、鎌田君と出版の件、魚屋君と橫濱出張の件等を電話打合を爲し又鄕里臼井林三並に輝雄の兩君に通信して、亡父十七周忌法會の機會に

井上神社の改築式を擧ぐること、

興禪寺位牌堂擴張工事に寄附を爲すこと、

の意向を洩らし五時半歸宅した。

夜に入つて〇〇〇〇〇より秀に電話あり婦人代表として渡獨のこと、愛婦、國婦より各一名推薦あり代表三人となり而して秀に之が團長たられたき旨の相談あつた。

佛印問題に關する有志申合

第一、政府は今次の佛印經濟交渉に於て左記の目的を貫徹せんことを望む。

（イ）國防及國民生活上必要とする物資は相互に優先的に最大限度の融通を確保し以て兩者經濟力の强化を計ること。

（ロ）佛印に於て我が國民の企業、船舶及貨物に對し佛本國と同樣の待遇を確認せしめ以て彼我協力の增進と佛印の開發とを促進すること。

（ハ）上記事項の完全なる實行を保障せしむるの目的を以て必要なる期間交趾支那にも駐兵權を承認せしむること。

第二、以上は東亞共榮圈確立上絕對的要件と認めらるるに付、之が貫徹の爲佛國の態度如何に因りては最も有效適切なる手段の斷行をも辭せざるべきこと。

本日（廿九日）は天長節に加へて折柄の曇天、次で春雨に門を閉ぢて出でず、終日讀書に暮らし又「詩と人と境第三卷」挿入の寫眞を整理した。

H、gラスキーの「英國の進むべき道」フリーダ、アトレー女史の「消へた夢」共に面白く有益に讀過した。動の後に靜あり、此の日の靜居も亦人をして深思默慮の機を與へしむるのである。（十六年四月二十九日後五時浴後認之。時に細雨霏々、點滴の聲を耳にしつゝ）

二、力を養へ、御五の身になつて考へよ。

二月十一日歸朝以來各方面の要請に應じて或は坐談會に或は講演に南方事情を中心としての心構へに就いて披瀝する所あつた。其の記憶に存するもの略ゝ如左。

時日	主催者	來會者數	時日	主催者	來會者數
二月十九日夜	海軍報道部	六人	同　日晝	水曜クラブ	二百人
同　二十日夜	日蘭協會	二十五人	同二十一日夜	南洋協會	百餘人
同二十四日晝	國際協會	八十餘人	同　日午後	國策研究會	四十人
同　日夜	軍令部	八人	同二十五日晝	南洋栽培協會	二十餘人
同二十八日晝	交詢社	百餘人	三月　四日	工業クラブ茶話會	二百二十人

同　十八日午後　朝鮮中央協會　三十餘人　同　十八日　夜　放送（南洋共榮圏經濟の樹立に就て）二十分間
三月三十一日　住友小倉氏及商議會頭片岡氏主催新大阪ホテル　三十人　四月　七日　晝　神田基督敎青年會　四十餘人
同　八日　日本拓殖協會　四十餘人　五月　二日　神奈川縣主催　五十餘人
計　十六回

之に對し相當の反響あつた樣に思ふ。曰く今や議論の時でなく直に實行に入るの秋である。大阪、横濱等の重なる階級が南方に頗る關心を持てること。自己の信念が實行より生れ出たること、實行者であること、三十年の經驗あること、等が相手に多少の反響を與へたであらうことが推察せられるのである。私は私の講話が實行に移るの一助ともならば本懷であり無益でないであらう。（十六年五月四日の休日に認之）

三、中　庸　の　道

本日曖日曖依山莊に於ける龍門社總會に列した。會務報告の後、小倉國務大臣の經濟新體制に關する口演の末尾に中庸の道を處世の大道としてゐる旨の敷衍あり。青淵先生の論語、經濟と道德の一如と相合する所ありとの話であつた。就て思出すは青淵先生の「惟精惟一」の扁額である。之は丹波の本宅に掲げてある。小倉老は矢張り此の句に言及されたのであつた。次に穗積博士の「權利義務の新考察」に就ての口演も亦結局揆を一にしてゐることを發見したのである。

法律萬能は不可、道德の領域を出來る限り廣範圍とすべきである。（五月四日曖依山莊より歸つて後四時半認之）

曖々遠人村、依々墟里煙、明治三十四年應澁澤氏需慶喜書。

右曖依山莊の由來也

四、伯林開催國際婦人大會へ日本代表として秀子の渡獨

四月の中頃、突然伯林開催の婦人大會に日本代表として渡獨方に就て聯合婦人會より推薦あり、他に適材なき場合には自ら之に當るも亦已むなしとの態度を以て之に臨んだが、東條日獨伊婦人會長の斡旋に依り愛婦、國婦よりの代表の外に是非首席代表として秀子の出席を熱望され外務當局亦特に最初決定の二人の外に更に一名を增加し秀子の渡獨を希望され旁々已むなく承諾するに至つたのであつた。

秀は已に三回獨逸に往き今度は四回目の渡獨であり青少年團副團長としての職域もあり、又敎育家としても現在の獨逸を觀察すること必要なる點よりして私も之に贊成したのである。然し査證が果して豫定の二十一日迄にソ聯より着電するや、猶未定なるに拘はらず、既に昨十七日夜新聞に發表と相成りたる爲め之を記錄し置く次第也。因に陽一は本十八日夜行にて先發大阪を經て水路渡滿、新京かハルピンにて一行に合する豫定にて、只今切りに行李を收めつゝあり、母子相伴ふての渡獨も亦吾家に在つてはあり得べきのこととして微笑の外はない。（五月十八日後二時認之）

五、靜　居　隨　想

二十三日午後三時半〇〇〇〇〇を訪ふて歸宅、多少の發熱あり二十四日朝、矢田博士の來診を仰ぎ、風邪、氣管支炎とのことに四、五兩日を靜居した。最早や平熱に服したので明日は外出の見込。久振りに靜居して思は種々の空に馳するのであつた。

第一、時代の推移と人の進退である。秀は今猶、女子大學に據つて青少年團や聯合婦人會や櫻楓會等に出で今度は又々婦人代表として獨逸に使した。彼女の環境は恐らく死に至る迄今日の狀態を繼續するであらうが、自分は國内に關係少なかつたこと、海外に目を注ぐものの少きこと、從つて國内に利害關係の少きこと、自然交渉の少きこと等所謂パイオニヤの生涯として自然成を百世に求むるの外なきこと。

其の結果は立言立德を主とするの外なきこと。

第二、秀は婦人代表として渡獨の途に上り陽一も亦獨逸に轉任となつて其の母と共に征途に上り、宅には自分と嫁と長孫とを殘すのみとなつたことも人生の過程たること。

第三、第一線を退いて關係事業や團體の用務の外に往來少なく從つて身邊漸く閒を得るの途上に在ること。

第四、閒を得るに從つて之を讀書並に思索に費やし、立言立德の素地を作り得ること。以上（五月二十五日の月曜日に認之）

此の間、三井辨藏、川崎榮助二氏の死去あり。和田豐治、高橋是清兩翁の記念品到着あり。世は樣々なり。

六、アンドレ、モーロアの「フランスは敗れたり」を讀んで

モーロアの「フランスは敗れたり」を讀んで其の敗因の鑑とすべきに思ひ至つて戰慄を禁じ難いものがあつた。而して彼の渡米船中で書き留めたと云ふ次の樣な句を面白く且つ適切に讀んだ。

一、强くなること。一、敏捷に動くこと。一、輿論を指導すること。一、國の統一を保つこと。一、外國政治の影響から輿論を守ること。一、非合法的暴力は直接的且つ嚴重に所罰すべきこと。一、祖國の統一を攪亂せんとする思想から青年を守ること。一、治者は高潔なる生活をすること。一、汝の本來の思想と生活方法を熱情的に信ずること。

等の句は我が國にも適用出來るのである。（五月二十五日認之）

七、陽一の性格

五月十八日東京を出發した陽一より第一回は玄海洋船中より、次でハルピンより飛電に接したが、一昨二十七日我等兩人よりシベリヤ國際列車宛打電したるに其の電報はイルクーツク附近にて接手したものと見え、本二十九日後三時三十八分着にて「ダンケ、アツレス、グート」とあり、右は陽一の屈托なき明朗の氣持を表現してゐる。

ストックホルム郊外の陽一

彼は吾が家庭にヌク〳〵と育ち、成蹊の教育を受け運動競技に秀で、「チーム、ワーク」に慣熟し、自らを高しとせず、否な自を卑しとして上長を敬し仲間と協調して決してでしやばらない。是れ彼が常に明朗豁達なる所以であらう。

今本電を讀んで彼の本性が端的に露呈せるを思つて覺へず微笑を禁じ難いものがある。

猶、秀は昨二十八日朝新京よりの案内人を迎へ同地發、同日ハイラルに着いたとの情報が外務省に入電したとのことであるから、多分ノモン

ハン方面に赴いたのではないかと思ふ。何れにしても、一行三人共元氣で、滿洲視察の程に在るものと思はれる。

（五月二十九日後十一時記之）

八、今日、此頃の懷舊四件

一、鳥尾將軍と朝鮮處分案

去十四日の土曜に大道社の定例茶話會が如水會館で開かれた際、鳥尾將軍に關する追憶談もあるとのことに、フト思ひ出したことは日露開戰直前の明治三十七年正月、私が新に歐洲より西伯利亞線に依り滿鮮を經て歸朝、更に朝鮮に渡り風雲を觀測中、愈々開戰の機熟せるを觀取したるを以て東京に引返し、條件付にて内諾せるシャム顧問としての赴任を斷はり、東亞同文會創立、第二の目標たる「朝鮮の施政改善を助成すべし」の趣旨に依り挺身之に當らんと決し、時の東亞同文會幹事長根津一先生と謀り、先生の構想に私見を加へて朝鮮處分案一篇を草して之を當路に建白することとしたが、先生は平素親交あり且つ其の達識に推服せられたる將軍の意見をも徵すべしとのことに、偶々熱海に靜居されてゐた將軍を訪ふて處分案の閲を仰いだ所、將軍は處分案の大綱にも處置案にも全然贊意を表せられた後、我が對鮮政策の實行に當りては從來の失敗に鑑み、苛察ならず拘泥せず特に官場の向背などには超然たるべく、卽ち「拘はらざるの態度」を堅持すべきことを指示され、更に處置案の「殖民開拓」の項に於て半島の歷史に徵し「咸鏡、平安の二道を占據して北、滿洲を制し。南、六道を御すべく、古來長白山を制するものは克く滿鮮を制し得べく、滿鮮に據つて大陸に伸ぶべきである」と申されたのであつた。

斯くて該處分案は直に政府に提出し、一方松方元老、青木子、樺山伯等巨頭の共鳴をも得たのであつた。而して間もなく日露開戰となり、日韓議定書の成るや、青木子か樺山伯の何れかが、最高統監として半島に赴かるるやの風評あり、何れにしても先發するがよからうとのことに、遞信省囑託に同文會韓國特派員を兼ねて開戰後間もなく半島入りを爲し、玆に在韓六年の因を爲したのであつた。將軍の所謂「拘はらざるの態度」は異邦民族に蒞むの要諦なることは今も昔も變らない、且つ將軍の一言に使嗾を得た計りではないが後、時の公使館付武官であつた齋藤力三郎大佐等と謀り、征露第一軍の諒解の下に「長白山一帶探檢隊派遣の議」となり、更に半島の南北に點在せる「荒蕪地一千餘萬甲開拓案」となり、之が轉じて明治四十一年創立の東洋拓殖會社創立となつたことは、私の關係する限り將軍の一言に暗々裡の交涉がないとは申されないのである。將軍と會談の後、ホテルに投じ、偶々同宿の渡邊無邊子を訪ふて共に杯を傾け、更深けて辭して洋間に入つて寢に就いたが、翌早朝誰人か戶を叩く氣はいしたが起き出づる隙もなく一片の紙片を遺して立ち去つた樣であつた。起きて後、之を拾ひ上ぐるに無邊子が一詩を書して私に贈られたもので「落々乾坤荷二雙肩一云々の一絕」であつたことも續で思ひ出されるのである。

二、南京政府外交部長徐良君との會見

十七日朝汪主席隨員の一人として着京した外交部長徐良君は東亞會當年の同志たる大同學校長徐勤君の令息である。昨年北支巡遊の際は徐勤君病氣の爲め相會するを得ず、一書を南京の徐良君に裁したが返信に接せず、然るに十六日の夜、上海滯在中の船津辰一郎兄より徐君渡東して私に面會希望の旨申越されたるに付、同日午後二時、本鄉大將未亡人告別式の途中、帝國ホテルに徐君を訪ねた所、折善く在室したので握手して相語つたことであつた。明治三十一年戊戌の政變當時に彼は八歲であつて今は五十一となつたとのこと、彼の態度容貌は父君に似てゐて溫

厚の相がある。滯在中更に再會を約して別れた、これも懷舊の一件と云へよう。

三、舊雨會の集合

十七日の午後五時半から丸ビル九階の精養軒にて定例に依り臺灣始政記念日をトして舊雨會が開催された。舊雨會は明治二十七、八年領臺當時に何かの關係で臺灣に在つた連中の會合であり、私も其の一人である。此の夕、集まるもの十三名、八十五歲の年長志村鐵太郎翁、七十九翁の木下新三郎翁、大井成元大將、七十五翁の仙石吉之助石塚剛毅兩兄、七十二翁の田川大吉郎、新元鹿之助、野間五造諸氏等で最年少は申す迄もなく私であつた。

食後テーブル・スピーチに入り木下翁の挨拶に次ぎ志村翁の發言あり、其の指名に依り私は立つて日蘭交渉と其の經緯、我等の心構へに就て說明し、次で田川、新元兩老の所感談があり、八時半散會したが、此の會員も年々其の數を減じ九十翁の後藤松吉郎翁も今は故人となつた。果して誰が最後の一人となるや杯と話し合つたのである。然し和氣靄々の裏に始政第四十六年目を迎へて猶此の集まりを見るも亦聖代の御蔭と天壽の賜でなければならない

四、海軍同級會の會合

本年に入つて海軍同期生の歿するもの數名を數へ、驚く可く不幸の歲である。私が南方より歸つたり、此等亡友を偲ぶのよすがにもとて催されたのは昨十八日夜に於ける水交社の級會であつた。

集まるもの八名、將校科よりは和田博愛(六十八)、田尻唯二(六十八)、安村介一(六十八)、松下東次郎(六十六)大見丙子郎(六十六)の五名、機關科より木村貫一(六十七)、藤江逸志(六十七)と私(六十五)の三名で、本年に入つて亡き數に入つたものは松村、金子、阪部、福中の四人である。

聞けば將校科卒業當時の十九名の中現存七名、機關科十八名の中現存六名、之に私を加へて七名、即ち兩者合せて三十八名の內、現存者十四名であるから三分の二翁が鬼籍に入り三分の一强が生を保つてゐるのである。然かも此の中に在つて幸に私が早く籠を脫したが爲めに最も多忙の生活を爲し、從つて最も健康に惠まれてゐるのであらう。年も一番若いが。斯くて互に歡語し、又私を中心としての南方談が交換され食後、更に控室に於て歡談を續け一同の健康と再會を祈りつゝ八時半散會したのであつた。十四日より昨十八日に至る間に於て懷舊四件を數へたので其の要を錄すること如是。(六月十九日朝、目白五禱荘にて認之)

八十七、昭和十六年夏、恰恰山莊隨想　三十二片

一、ピヤ・パホン前タイ國首相の僧院生活

タイ國の民習は全國民が一度は僧院生活を送るべしと云ふにあつて見れば、ピヤ・パホン君の今度の僧院入りも同國人に取つては甚しく珍らしいことではない。然し同君の如き革命の先驅となり生死の巷に出入した、而かも溫良恭謙の人に在つて此の事あるは私の頗る感銘する所である。

昭和十一年のバンコツク滯在中、君は首相であり、議會開會中、然かも病後の身たるに拘はらず快く引見して相語るの機を與へられ、今回は引退して議事堂側の僑居に靜養中であつたので、刺を通じて去つたに過ぎなかつたのに翌朝態々使者を私のホテルに迄つて惜別の意を表せられたのであつた。

本年漸く五十四と云へばタイ人としては老人組であらうが、まだまだ今後に活動すべき人であるが、君の將來は

果してどうであらう。君が「日々」の記者に語つたと云はれる。「心を淸めること、親孝行すること、僧侶となること」の三者を兼行したいとの言葉は君が衷心より迸ばしり出た言葉であらう。朱門軒冕が必ずしも君の目的ではあるまい。否な現代の如き世相では君は恐らく念を直接政治に絶ち一代の高士として一國の元老として、暗々裡に國民を指揮し國運に寄與せんとするのであらう。

昨、入山の車中で物した左の一絶は自らを歌つたものだが、直に君の心境を歌つたものとも申すべく、近き機會に之を書して君に贈りたいと思つたので玆に之を記し置く次第である。

又趁二涼風一到二翠微一、白雲雲裏排二山扉一、朱門何在無二軒冕一、浩浩乾坤一布衣、

一布衣を一衲衣とせば猶ほ能く當てはまる。（昭和十六年七月九日後四時、山莊にて認之）

二、アフガニスタン協會を引受く

去四月九日華族會館に於けるアフガン經濟使節團歡迎會に先つ本季アフガニスタン倶樂部總會に於て之が改組を決議し、會長始め役員の選定を發起人に一任されたが、規約第五條に依り會長を先づ推薦し、顧問、評議員、理事長、理事、監事、參與及主事は會長が之を委囑することとなつてゐるので、先づ會長の推薦が第一義であつた。然る處倶樂部創立以來常務委員田鍋安之助翁を助けて資金調達等の世話をしたのは委員小幡酉吉君と私の二人であつたが、外に委員たりし人々は松井石根、岡部長景、白岩龍平、林毅陸氏等の外に、外務省側は歴代の歐亞局長であつた。此等の關係者より會長を選ぶとせば自然小幡君か私となるわけであり、岡部子の名も話題に上つた、而して先づ第一に小幡君の承諾を求めんとし、私も再三之を慫慂したが遂に之が承諾を得ず、却つて私の就任となつたのであつた。私としては漸次身邊の係累を減少して閒を得たき希望あるのみでなく、アフガニスタン關係の如き田鍋老あるが爲めに之を助成し來つたもので、今更ら會長の任に就くが如き意志は毫も存せなかつた。當初田鍋老より今後の措置を一任せられた際、小幡君も私も繼續の見込なければ解散も亦已むを得ずとしてゐたが、國際情勢の變化は回教國民との接觸も漸く其の必要を感ぜらるるに當り、且つ私としては日露戰前已にアフガニスタンの國境を究め、同國が英露の緩衝地帶として相當重要なるを知れるものから、今後同國と經濟、文化、貿易各方面に於て一層親善を加ふるの急務を感ぜられる折柄、玆にペルーより歸朝、閑地に就ける元アフガン公使北田正之君を想起し私より同君に之が經營に當られんことを慫慂したるに同君の快諾あり、同君より此の際クラブを改組し、協會としてはとの提言あり、私は直に之に贊同し、同君に理事長として任に當られんことを希望し、理事者もクラブ時代の顏觸れを避け第一線の人物を以てすべく從つて私の如きは顧問位の位地に引退したしと語り合つた次第であつた。斯樣の經緯に依り、會長の推薦は田鍋、北田、內藤等の諸氏に一任して置いたのであつたが、第一候補小幡君の承諾を得ずしてお鉢は私に廻つたのである。而して若し私が固辭せば恐らく協會も立消えとなる虞れなきに非らず北田君を推した私として又兩國關係の親善促進は大東亞共榮圈確立の爲めにも必要であると斷じた私は、前記諸氏一致の強ての推輓に玆に會長の名を引受けたのである。

總會の決議を距る二ケ月餘卽ち六月中頃に至つて漸く會長を得た同會としては急速に役員の選定に移らざるべからず、又會長を引受くるに當つては經營の資金を求めざるべからず、仍つて私は直に忙餘の閑を割いて之が協力を各方面に求めたのである。斯くて官廳側は外務、情報局、農林、內務方面、民間側は日本航空、昭和通商、正金、

三井、三菱、臺銀、三井(銀行)郵船、商船、日本貿易振興等の協力を求め、又大阪方面は專ら北田君の活動に任せ更に陸軍、海軍方面の協力をも得ることとなり、數回打合の末、去七月七日夜五疇莊の會合に於て略々役員の選定を終りたるを以て先づ會員に役員表を通知すること、評議員の承諾を求むること(顧問、理事者は大體口頭又は電話にて承諾を得たる爲め)新に會員入會勸誘狀を發送すること、新に赴任する小林アフガン駐在公使を招待すること等を決議し、又正金、昭和通商、郵船、三井銀行、日本貿易振興等よりは更に寄附金を領收せるを以てアフガニスタン協會々長口座を昭和銀行目白支店に設けて之が保管に任じ、別に東亞同文會吉永會計主任に從前通り會計事務を管理することを依賴し、吉永君の請求あらば必要經費を隨時支出して事務を運行することとしたのである。

北田氏を理事長に東京側常務理事に内藤智秀氏、大阪側に吉田誠一氏を依囑し、主事は尾崎三雄氏を常任に依賴したが、同氏は近く海南島に出張の爲め不在中は内務技師の藤森氏に常任を依賴したので略々陣容が整つたのである。會長就任より三週日にして兎に角協會の形も一應整ひ、資金の見込も立つたことは同會の爲め、又兩國親善の爲め幸である。本邦駐在アフガニスタン公使を名譽會長に推薦することは北田理事長に一任して置いた。

私としては協會の基礎成る迄の會長就任を諾したのであつて可成早い機會に於て會長の任を辭したい心持ちであることを附け加へて置く次第である。(昭和十六年七月十一日朝、山莊にて認之)

三、孔子の志は政治に在つて然かも後世の範となつたのは其の著述に據る

孔子の畢世の目的は治國平天下に在つて、用ゐられんことを求めて喪家の狗の如く諸國を流浪して廻つた。孔子は魯に生れて魯に用ゐられないで、隣の齊に行つたが之も甘く往かず、魯に歸つて定公の九年、五十一歳で中都の宰卽ち都の知事となつて功を奏し、五十六歳で大司冦卽ち總理と司法を兼ねる王魯の顯官となつたが、魯の王は齊の賄賂に溺れて孔子を相手としなくなつたので、又漂泊して衞に適き、宋に往き、陳を訪ね、復衞に赴いた。所が楚の昭王が孔子の風を聞いて重く用ゐんとしたが令尹子西の反對で之も駄目になつた。斯くて歳月流るる如く孔子も早や六十八になつて頹然として魯に歸り、其れから仕官の念を絶つて三千の子弟を養ひ、盛んに述作に從つて七十三で死んだ。

卽ち孔子の千歳不滅の業は六十八から七十三迄の間に成されたものと申してよい。孔子は何も區々の名利を求めて四方に放浪したのでは勿論ない。實に治國平天下の理想を現世に行はんとしたのであつたが、時利あらずして差したる功を收め得なかつた。そこで退いて述作に耽り門弟を敎へて支那歷史上最大の跡を後に貽したのである。卽ち立言、立德に依つて百世に貽したのである。自分は明治、大正、昭和の聖代に世を享けた御蔭で、少にして域外に遊び、革新支那を幫け、半島の經營に當り、更に南進して開拓の先驅となり、遠く中、南米に同胞を送り、企業を創めて海外發展の礎石を海の外に築いて玆に四十年の歲月を經た。六十一歳で事業の第一線を退いたが、南船北馬、席猶ほ暖かならず、身邊の係累も數十を算して日夕多忙の生涯を送つてゐるのみでなく、幸に頑健で身心共に何等の衰へを感ぜず氣魄壯年に勝るの槪があるのは天恩の優渥なるに感謝の至忱を捧げなければならない。

今後益々身心を存養して立言立德に精進し、時の趨き、天の命ずる所進んで挺身國に捧ぐるも亦固より當然であり、覺悟の前である。朝來、連日の霪雨漸く晴れ、雲間に多少の陽光を仰がんとし、啼禽の欣々たるを側聞しつゝ偶々孔子の出處を偲びて自己の心境に及び、寸言を記し置く次第である。

山荘雨

濕雲朶朶熟㆓黄梅㆒、烟緒雨絲遙長レ苔、午睡一醒茶一椀、倉唐杜宇促レ詩來、

骨将レ仙

幽庭經レ雨碧逾鮮、浴後傾レ杯氣爽然、不レ管風雲隨處變、閒窓獨座骨將レ仙、（七月十二日）

四、松岡外相退陣の短歌を讀んで—自己の過去を顧みる—

（一）

今朝の新聞で松岡外相退陣の短歌を讀み、又その模樣を知つて思ひ見るのは自己の姿である。之は松岡その人の姿を揣摩するのではない。取つて以て自己の姿を見、自己反省の機とするのである。

一年を無我夢中梅雨あけず

坊主めが行倒れたり梅雨の旅

彼は就任以來丸一年、眞に無我夢中で働き、長い梅雨のあけない中に去つたのである。彼れの頭はイツモいが栗頭なので自ら坊主と稱へてゐるのであらう。梅雨の旅の中に行倒れたのである。目方が就任當時より三貫目減つたと云ふ、誠に其の言葉の通りであらう。而して熱が下つたら山の生活に入つて一切世緣と絶ちて讀書三昧、小鳥と遊ぶのだと喝破してゐる、さうであらう。

たしか彼は本年六十二か三で、自分より二つか三つ年下である。而して彼の過去は外務省を出てからは彼の言ふ如く野人の生活が多かつた。それにつけても思ひ起すは自分の過去の姿である。

（二）

自分も比較的早く世に出た。十九の時に陸軍通譯の肩書で臺灣に渡り蕃民撫育に當つたのを手始めに、一面學生一面有志と云ふ風に二十一の時に亞細亞興隆を目的とする東亞會を興して其の幹事となり、支那革新派の首領と交を締し、其の關係で明治三十一年十月に於ける北京の戊戌政變に逢ひ還つて今の東亞同文會創立に推進力の一人となつて創立當時の幹事となつたのは僅か二十二歳の時で、會長の近公は三十六、幹事長の陸先生は四十數歳、幹事の同僚は何れも三十五、六以上であつた。二十三の時に同文會支部幹事として上海に駐在して「同文滬報」なる日刊漢字新聞を發行して日本側の主筆となり、それから東亞同文書院の創立に參し、終つて同文會の西部亞細亞特派員として渡歐、ウキン、ベルリン兩大學に植民經濟を學ぶと共にバルカン始め中亞、波斯、トルコ、小亞細亞、ロシヤ等を視察したことは申す迄もない。歸つて犬養老の推擧に依るシャム顧問の地位も日露開戰となつて中止し、同文會創立の第二目標であつた韓國施政改善を助成する爲めの渡韓となつた。肩書は遞信省囑托と同文會の韓國特派員の二つであつた。それから在韓六年の官場生活となり、韓國の中央、地方の財政整理と地方産業開發に當り、又宮中の肅清、改革に主役を演じたことは忘れ難き人生行路の一である。

韓國宮中改革肅淸も其の緒に就き、日韓併合の機運も釀成されたので、三十四の時に官囑を以て第二次世界周遊の途に上り、歸途路を印度より英領馬來に取つて地をジョホール河畔に相してサルタンに永代租借を願ひ出でて歸朝、時の桂首相始め先輩二十餘名一致の贊成に依つて遂に南方開拓の第一線に立つこととなり、即ち其の名も南亞公司（南亞細亞會社の意味）と命じ「明治の太閤はセシル・ローヅ」たるべしとの見地より「セシル・ローヅの私生

涯」一篇の譯著を世に公にして「新に南方に國を建つべく」再渡航したのは明治四十四年六月のことで大正十二年迄前後十三年の間は南方を根據として開拓の第一線に働いた。卽ち三十五より四十七に至る人生の夏の大半を玆に捧げたのである。

此の間屢々シャム、佛印、蘭印、ヒリツピン等に遊び又大正十年末より十一年にかけて第三次の世界周遊を試み歸つて南洋企業の合同を策したるも機未だ熟せず、間もなく大正十二年の大震火災となつて朝野は駭然今更らの如く海外移住開拓の急に目覺むるに至り、瀕死の海外興業會社も政府の援助に依り蘇生することとなり、玆に迎へられて社長の任に就いたのは大正十三年三月のことであつた。それから昭和十一年三月に至る十二ヶ年は専ら海興の主腦として海外各所に人を送る十六萬、企業を起すこと數ヶ國、範圍は南洋より中南米諸國に跨つてゐる。

然るに昭和九年に於けるブラジルの憲法改正、之に伴ふ移住の大制限は社業に影響し、遂に昭和十一年に至つて入社當時の希望と理由に反して開拓關係の事業を東拓に移譲し、海興は單に移民取扱會社として大正六年海興創立以前の狀態に復舊することとなつた。斯くて入社當時の政府なり大株主の自分に求められたる所と相反する事態に彼等自ら轉向することとなつたので、自分は潔く社長の任を辭して所信に殉じ、玆に年正に六十一、第一線を退いて人生の秋に入つたのである。

（三）

人生の秋に入つて秘棉社長始め事業會社重役の地位を去り、今日に存するは創業以來の關係ある昭和ゴムと東拓常務顧問の二者だけとなつたが、他方國際乃至興亞關係の團體は南洋協會專務の地位を退いた外は、却つて增加して現に役員として關係するもののみにても無慮四十を算ふ可く、社交、運動、諸關係を加ふれば總計七十餘に上ることと思はれる。此等も漸次に退いて身邊の係累を減じて人生の秋を味はんとしてゐるのである。彼れ松岡は自分の立場と異なつてゐた爲め、此等の係累も少く、世緣と絕つて山中生活をするにも比較的容易であらうが、自分はさう簡單には往かず、漸を追ふて之を絕つの方針である。而して之を爲す如何。

第一、に事業の安定し基礎の立つたものは之を後進に讓つて顧問的地位に立つこと。

第二、最近に至つて已むを得ざる事情より表面に立つに至つたもの、假令へばアフガニスタン協會の如き可成早い機會に於て第一線を他に讓り同じく顧問的地位に立つこと。

第三、自己の創立に係るものにあらざるもの、而して平會員に過ぎないものは可成早い機會に退會すること。役員に名を列するものと雖も比較的緣故の薄いものは漸次に關係を絕つこと。

第四、斯くして得たる餘裕を以て、身心の存養、智識の吸收、人格の鍊成、信念の長養、不生不死の境涯に入神する爲めに費やすこと。

第五、その餘裕を以て可成鄕里に往復して祖先の墓を掃ひ同鄕に盡くし、又あらゆる機會を利用して內外に出遊し又讀書思索に時を用ゆること。

第六、卽ち民族政策硏究所の實績を擧ぐるに努め、又可成立言以て現在及將來の國運進展に指導的地位を占むる樣精進努力すること。

等が直に頭腦に浮ぶのである。而かも其れには「寸陰を惜みたい」「一瞬一刻をも徒爲に過ごしたくない」靜可な

り、勤亦不可ならず。要は隨時隨處に身心を錬磨して神格を養ひ、永遠の生命を獲て我が皇國大使命の達成に一使徒となりたい。即ち幼年時代の太閤が中年にしてセシル・ローヅとなり、晩年には孔子となつて立言以て人を益し世を益し世界を益したい。千年不死の人となりたい。孔子が四方を放浪した後、魯に歸つて述作に着手したのは六十八の時で七十三で歿する迄僅か五年の間の述作が百世の範となつたではないか。「力めて惑はず」「一路直進せば道に至るべし」偶々松岡君退陣の狀を紙上にて承知し、自己を顧み、自己の姿を直視するの機を得て玆に之を記す次第である。時に連日の陰雲視界を閉ざし、烟雨霏々、群鳥も亦聲を潛めつゝあるの秋。（七月二十日後二時四十五分、雨滴を聽きつゝ認之）

五、井上民族政策研究所の第一回著作刊行に當りて

昨十五年九月一日開設した井上民族政策研究所は各方面の專門家に託して研究著作を依賴しゐたるが、漸くヴィトル・フレーン博士と三吉朋十君の二書、一は叢書第一卷とし、他は資料第一輯として刊行の運びに至つたので、去十四日夜關係者三吉、館、江上、永田、菅夫妻、原、上田、窪田等諸氏（板澤、松本、西野入、井出、善生諸君不參）を銀座Aワンに招きて慰勞旁々披露の小宴を催ほした。本年中には江上、井出、善生、原（板橋）諸氏の著作完了して出版し得る豫定である。

近來民族硏究熱が各方面に熾んとなつて來たが、我が研究所は所長たる自分の半生の經驗に依り各專門家に委囑して民族政策に關する東西古今の實蹟を檢討して之に所長の感想と申さうか結論と申さうかを加へて締めくくりと爲し、之を江湖に訴へて其の參考に資し其の經綸に補あらしめんとするものなるを以て自ら獨自の途を步み獨特の貢献を爲し得る樣心掛けてゐるのである。

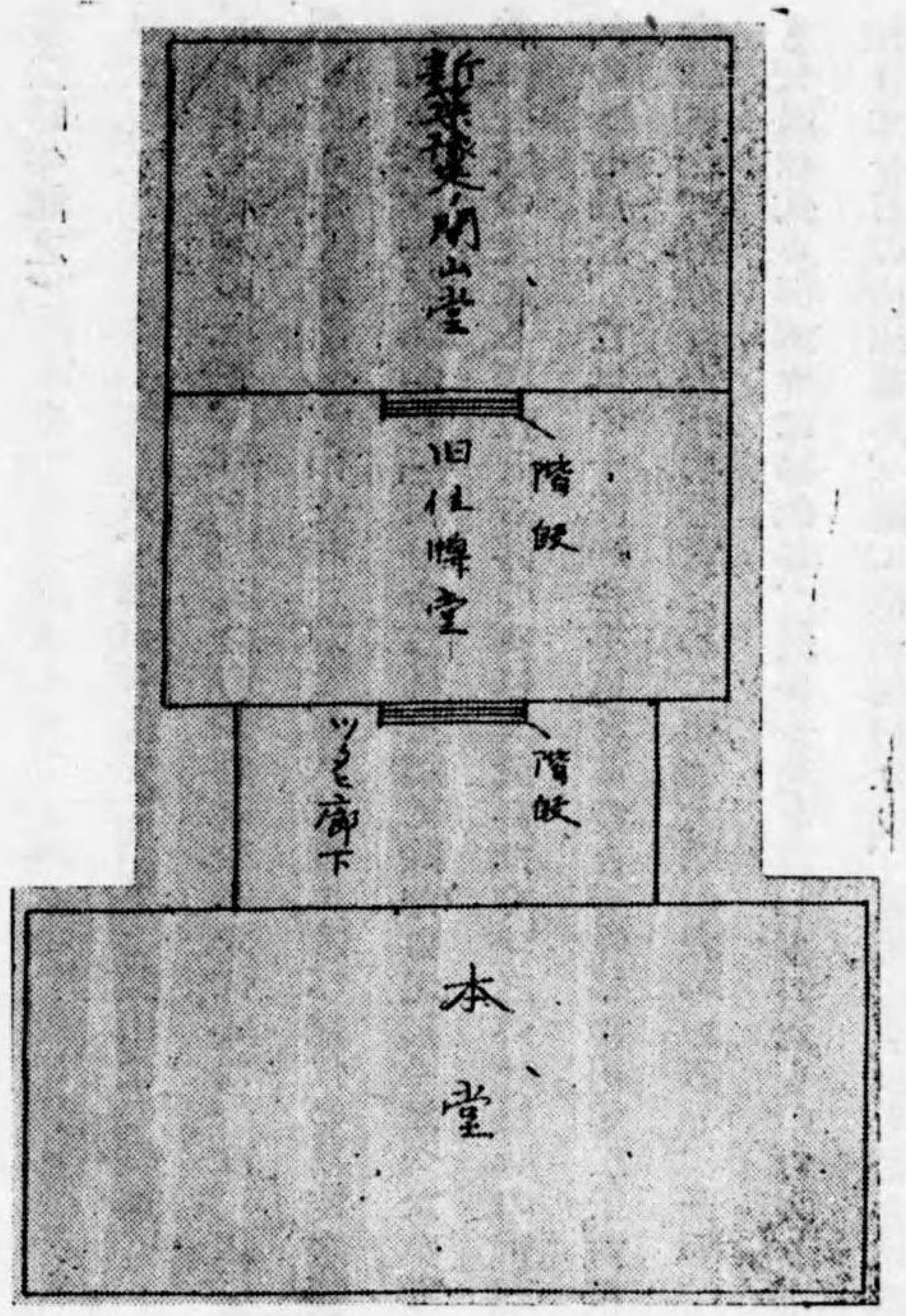
偶々新刊二著作の廣告文を刀江書院より回送し來つた機會に之を記し置く次第也。（昭和十六年七月二十一日、後二時半認之）

六、鄕里菩提寺（興禪寺）開山堂の寄進

井上一雄君の死後、鄕里菩提寺の興禪寺檀家總代となつた。之は他に人なく强ての住職からの依賴で父祖の業を偲び已むなく承諾し、臼井林三君を總代代理に選び總代の事務を代行して貰ふこととしたのである。

然るに昨年住職から「自分も古稀を越え餘命も乏しくなつたので、生前開山堂を新築して開山の靈位を奉安し、兼て檀家の重なる靈位をも其の側に安置したく」之が建築費の寄進を申込まれた。偶々本年は祖先の二百年忌、亡父の十七周忌、亡母の十四周忌等に當るのと、昨年の紀元二千六百年祝典に秀は叙勳の恩典に浴し、文部大臣から表彰され、自分も海外功勞者として拓務大臣の表彰ある等、吾等の今日あるは單一に父祖の餘澤に外ならず、而かも父祖は代々興禪寺に歸依し、幾多寄進を爲し來つたものであり、又質素、勤勉、代々相承けて家業を守り隣保相扶けて今日の山田部落、延ては船城村なり、近鄕の美風善俗を造成するに多少の力ありたること等を思ふて此機會に父祖に感謝の意を表し、其の追善を爲すの意を含めて欣然之に應ずることとしたのである。今日の臼井君の情報に依れば開山堂の新築費約三千三百餘圓で、之を我等兩人にて負擔し、舊位牌堂の修繕其の他に要する經費二千圓は之を他の一般檀中に依賴するとのことであつたから、直に同君に返書して贊成の意を表し、而して開山堂は全部我等の寄進に依るべく、其の他の修繕は自分を加へて之を他に待つこととされたき旨申送つたのである。

法會は今秋農閑期にして我等兩人の都合よき日をトして興禪寺にて擧行のこととしたが、更に山田自宅背後の松林の小丘の頂に在る「井上まき」の小祠も改築することとなり、之も留守宅に托して既に完成したそうであるから今秋歸村の機會にささやかなる祭典を施し祖先の靈に感謝の微忱を致す豫定である。（臼井君に回答した後、昭和十六年七月二十三日の朝認之）



開山堂の圖

七、自分の支那語と荒尾先生

山荘の閑寂を破るものは窓外の鳥聲風籟と室内のラヂオ・ニュースである。東京ではラヂオ、ニュースに聽き入るの隙は殆んどない。從つてラヂオの備付けがあつても稀にしか使用しない。然るに此處山荘の人となつては、坐して世界の轉變に接し、又耳を樂ましむるものは先づラヂオである。仍つて入荘の翌十日にラヂオ一臺を賃し來つて、少くとも朝夕のニュースと重なる講話や、山の音、人の聲に耳を傾くることとしてゐる。今朝フト支那語講座を聽いて忽ちにして當年洛東若王子山麓の東方齋に於て東方齋荒尾精先生から支那語の手解きをして貰つたことを思ひ出す。

たしか華語跬歩を教科書として先生から殆んど毎日一時間位づゝお稽古したのである。あの二十三貫に餘る巨大漢の先生が、啊!、啊!、と口を開いて聲高らかに讀み上げられるのを最初は自分一人、次で來山した宮阪、曾根原、木下等の諸友も同席して反覆複習したことは今でもありありと眼前に浮ぶのである。

斯くて夏となり白岩龍平君が同宿せらるゝに及び、今度は白岩君を師範として練習を繼續し、其の秋、先生の推輓に依り支那大陸に渡る前提として先づ臺灣に渡ることとなり、東京に赴き參謀本部に出頭、支那語の受験をした時の試驗官は先生門下の三澤信一君であつた。固より未熟の吾等として合格も危まれたが、試驗官の手心があつたか、上長川上參謀次長の士を愛するの致す所か、宮阪、曾根原の二友と共に合格、たしか陸軍通譯、月俸三十五圓の待遇で其の年の十二月に臺灣に渡り、自分は埔里社民政支廳附となり蕃民撫育掛として蕃民の撫育に任じ、明治二十九年正月の元日、臺北にては叛徒の城壁に迫るの珍事が起つたに拘はらず、此處埔里社では霧社の蕃目を歸順せしめ、早朝數名の兵を率いて東方濁水溪の邊りで下山して來た頭目等を迎へ、蕃人の式に倣つて頭目と相抱いて燒酒を飲み合つた後、一同を伴ふて廳に歸つて廳長檜山鐵三郎氏等と新年の杯を擧ぐると共に蕃酋の歸服を祝し、毛布、牛等を贈物として再び山に放つたことであつた。

當時通譯としては山田良政、河野久太郎の兩君あり、山田君は後、明治三十一年北京に於て再會、戊戌政變に會して王照を拉して、袁世凱軍重圍の中を暗に小舟に搭じ白河を下つて塘沽碇泊の我が軍艦大島に難を避けしめたこともあり、後、彼は南京同文書院教授たりし時、孫文の革命に同情を寄せ、竟に孫文の廣東擧兵に際し惠州にて難に殉じ、邦人中、革命犧牲の第一人者として今に國民黨感謝の的となつてゐることは、今次、王兆銘君の渡東に當

つても人を使はして弘前に於ける彼の墓前に展ぜしめたことに依つても、新に邦人に記憶を喚起さしむるの人となつた。河野君は後、官を辭して大倉組に入り漸次頭角を現はし大倉鑛業重役として支那滿洲に於ける同社の事務を監するに至つた。之も數年前功成り名遂げて白玉樓中の人となつたのである。

自分は通譯と云ふは名のみで、曾て一度も通譯抔したこともなく、したらば飛んだ喜劇否な悲劇をも演じたことであらう。通譯の任は之を山田、河野の二先輩に委し、自分は蕃民撫育掛に終始したのであつた。當時自分は大陸に渡る準備として機關學校在學時代から頭髪を切らず退校後、一年を經て長さ一尺數寸に伸びてゐたので、結髪してゐたのである。之が檜山廳長の目に留まり、支那語の未熟と相待つて通譯ならぬ蕃民撫育掛たらしめた一因でもあつたかと想像されるのである。

何にしても事は四十六、七年前の昔であり、當時學んだ支那語の片言隻語は其の後、渡支の際にも多少役立ち自動車の運轉手やホテルのボーイに命ずる位のことは出來るのである。今支那語講座を耳にして、フト自分の支那語と荒尾先生との因縁を想ひ、先生去つて已に四十六年、當年の同志にして他界せるもの尠からず消息を絶てるものは更に多く、時々舊を語るもの只だ白岩君一名のみ、曾根原、大原死し、木下病み、宮阪とは殆んど相會はず、顧みて人生の匇忙を歎ずるのみ、何の幸ぞ自分は其の後、興亞の一路を直進して、屡々世界に出遊し又隨處に人を送り業を興して倦まず、身心猶ほ健にして殘軀を抛つて奉公するの勇氣あるを、又何の幸ぞ天恩我に暢舒の秋を與へ此の山莊に靜居して立言立德の素を養はしめることを、偶々支那語講座を耳にして當年の先生を偲び、故友を思ひ兼て自己を反省して益々身心を存養して涓滴の誠を盡くさんとするの熱意に燃へつゝ之を記す次第也。

一昨日沓掛への途上、渡邊千冬子の別莊を遠くに望み昭和十二年秋ナポリより神戸に至る一ケ月に亘る同船の舊を偲び、更に昨年四月十七日であつたか、神戸より船出して北支に向ふ船中、其の訃に接してから早や一年有餘、自然思は彼の上に及んで賦したのが左の一絶である。

沓掛途上懷二渡邊無劍一歸賦　七月二十一日

北馬南船亦有レ因、殘軀想レ獻世難辰、山莊夏半涼如レ水、默數親明少二一人一

之は渡邊子のことを偲んだのであるが、又以て多數の亡友を懷ふの詩でもある。北馬南船するも亦因がある。殘軀を抛つて君國に酬ゆるには宜しく辰に及ぶべきである。（昭和十六年七月二十二日、昨夜半の風雨漸く晴れ、陽光綠樹を照らし、庭禽欣々、吾が心を怡ばしむるの時認之）

八、何故に海軍に志し、海軍を罷めたか

これは云ふ迄もなく五、六歳の幼童時代に豐太閤を以て自ら任じたる自分としては、陸軍大將となつて大陸を征伐し、都合よくば、青海の王たらんとしたのを、中學に入るに及び、同窓の多くが陸軍に志し、而かも比較的容易に合格するのを見て、恒に易きを棄てて難きに就くを信條とせる自分は、同じ軍人となるのには易き陸軍を棄て難き海軍に入るべしと考へ、玆に方針を轉じて陸軍志願から海軍志願となつて、未だ資格年齢の滿十六歳ならざるに戸籍面を八ケ月繰上げて貰ひ、明治二十五年十二月で滿十六年六ケ月として海軍兵學校機關生徒に應募し、志願者千三百人の中、第十九番で入學を許されたのである。

斯くて二十六年二月に江田島に入つた。江田島の朝夕は青年の心を怡ばしむるものあり、其の生活も將校生徒と

餘り變らず、愉快に暮らし得たが、同年十二月に至り兵學校條令が改正されて別に横須賀に海軍機關學校が設けられ、自然之に轉校のこととなつた。横須賀は申す迄もなく軍港として造船所處在地として機關科生徒の訓練には適當せるも、學校は造船所の表門側に在つた機關術練習所即ち下士官養成所であつた所を引繼いだもので、四圍の風光、校中の生活は江田島と比すべくもない、

教育其の他も江田島時代とは異なり連日造船所に入つて「ハムマー」にて鍛錬の稽古をしたり、「ボイラー」をいぢつたり、製圖板に向つたり、全くの技術教育であつた。之は機關生徒として當然のことで、斯くあるべき筈なるも、もともと海軍大將となつて大陸に押し渡らん念願に燃ゆるものとしては漸次不快不滿の念を增し、曾て孫呉の兵書を袖にして校門を入らんとすると當番の士官に咎められて沒收の厄に逢つたこともあり、機關學校の教育方針が油蟲を造るに在り、海軍大將を造るに非らざることを感得するに至つた。(當然のことながら)斯くて其の翌年七月、孤劍漂然海内を漫遊して到る處に其の地方の人物と稱へらるゝ人々を訪ふて議論を上下し、山川風物に接して豪氣を養ひつゝ松橋から船にて鹿兒島に渡らんとし、途、風に遭つて日奈久に上陸し、熊本に引返して同市に歸省中の同學から日清開戰のことを知り、直に歸京、風雲の赴く所を凝視しつゝ休暇の期盡きて歸校したが、先輩が卒業期を繰上げて定期より早く卒業して軍に從ふは固より、支那に志ある在京の友人にして或は記者として或は人夫長として從軍するものあり、雄心勃々たる少年時代の自分をして竟に意を決して機關學校を辭し、徐に政治經濟の學を修めて自己の力を養ひ然る後に支那に渡らんとし、或は眼鏡をかけて近視たらんとし、或は小試驗に〇點を付して學業の成績を低下せしめんとしたが、何れも物にならず。就中江田島以來、糞勉强して十九番より五番に上つた自分としては、病氣にもなれず、落第も出來ず、二十七年十二月に第二期試驗を終へ昇級したが其の頃よりして教官であつた船橋、入澤、賀茂、其の他の諸先輩は自分の志を憐み其の目的を遂げさすべく考慮せらるる所あり、保證人の田健治郎氏の默諾を得、兩親の諒解をも經て十二月三十一日に至つて機關學校生徒を免ぜられ、勇躍校門を出で、郷里に歸り玆に所期の政治經濟を學ばん爲め東京遊學の途次、京都に荒尾精先生を訪ふて一夕の傾談、志を語つたのが奇縁となつて東上を中止し、先生の許に教を乞ふこととなつたことは屢々述べた所であつて玆に絮說を要せない。

此の程、海の記念日制定を機として各種の企てあり、又ラヂォに新聞に海事思想の擧揚に朝野の關心を唆りつゝあり、今朝のニュースにも海に關する面白き挿話ありたることに興味を惹き、何故に海軍に志し又之を辭したかの經緯を述べて後に貽す次第である。

要するに自分の志は天下に在り、大陸征伐に在り、自分の信條は易きを棄てて難きに就くに在り、不言實行に在り、此が爲めに小學時代は陸軍大將たらんとし、中學時代に入つて海軍大將たらんとし誤つて機關生徒となつて海軍大將たる能はざるに至りたると、日清戰爭に際して從軍するを得なかつたことと、機關學校の教育が大將教育に非らずして技術官養成に在ることを知りたること、而して總じて支那に渡るの機を得なかつたこと抔が、罷めた主因であつた。當時餘程の秀才で且つ身體强健ならざれば容易に海軍に合格し得なかつた。普通一度で入學するものは極めて稀れで異數とせられ、大抵二度三度乃至四、五度も受驗して猶ほ合格しなかつたものも多く、此等は或は陸軍に或は商船學校等に方向轉換したものであつた。卽ち當時にあつては海軍兵學校は一の登龍門とせられ、青年

羨望の的であつた。故に吾等の同學中にも機關教育にあきたらず退校せんとしたものもあつたが、之を決行したのは自分丈であつた。そは自分の志が天下に存し支那の王たるに存し、海軍は其の手段たるに過ぎなかつた、其の手段にして其の目的を達するの道程に非らざることを觀取した以上、退校するのは自然であり、兩親始め保證人も心友も之に同意し贊成し、而して所屬上長が遂に之を許すに至つたのも自然であらう。偶々海の記念日制定に前後して海洋思想の擧揚に力めつゝある狀況を見て此の言を爲し後に貽す次第である。（昭和十六年七月二十三日後三時半、海に關するラヂオ放送を聽いて後認之）

九、ボリビヤと獨逸人

之れもラヂオ放送に引き出されての感想の一である。本日のラヂオで、ボリビヤと獨逸が國交斷絕を宣せんとするの差し迫つた情勢となつたと云ふことである。南米に對する米國の壓力が增大するに從つて獨逸及獨逸人に對する葛籐の起るは當然であらう。この事を言ふのではない。思ひ出すのは大正十四年であつたか、自分が南米を巡遊し、チリーのアントフアガスタから山岳鐵道に依つてボリビヤに入り海拔一萬二千尺のラパス市に滯在中、時の大統領や其の他の要人と會したる節、參謀總長のクンツ將軍と快談したことである。クンツ將軍は獨逸人でボリビヤ國に住んで參謀總長となつてゐたのである。彼は自分に向つてボリビヤ人の勇敢なこと抔を語り、別るるに臨んで「馬上の姿」を撮つた寫眞を自分に贈つて吳れた。後、風の便りに彼はボリビヤを去り、アマゾンの開拓案を提げて祖國の人士に呼掛けたが、事意の如くならず、何時の間にか影を消したと云ふことを聞いたが、果して如何、今は知る由もない。然し、當時から獨逸人はボリビヤの高原に迄伸びて其の國の指導的地位に据つてゐるものゝあることを知つて我れ未だ大に及ばず、大和民族の積極的進出を希つたことであつた。（昭和十六年七月二十三日後四時、久振りの天晴れて室內の氣温二十四度に上れるを眺めつゝ之を認む）

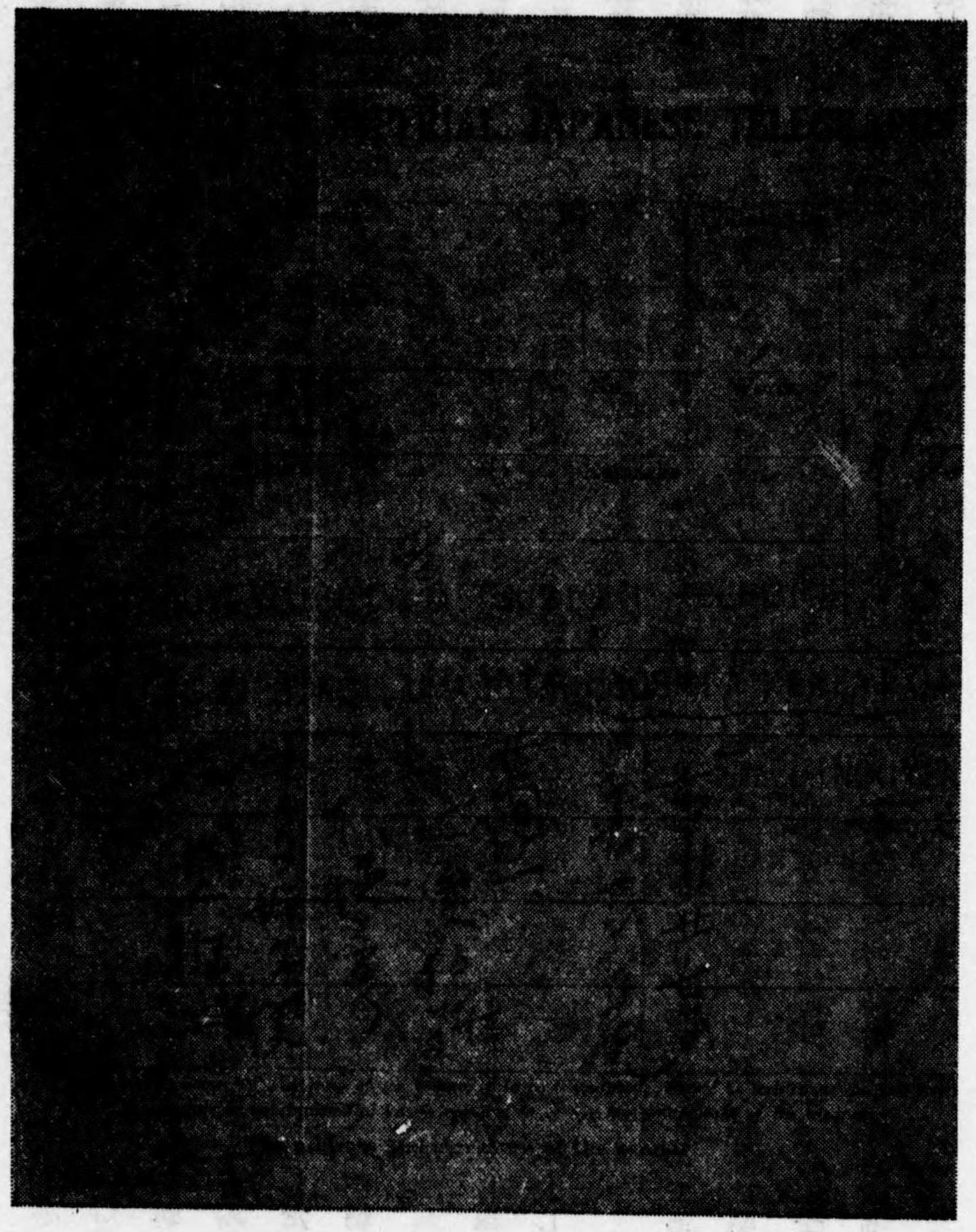
十、恒彥生る

二十四日夜東京より至急歸京すべき旨或る方面の電報に接し、二十五日早朝發歸京、二十六日にかけて所要を果たしたれば、歸莊せんとして家妻の意向を正した。シナ子の狀態にも差して變化の樣子なく、平日の通りに元氣でゐるので、先づ先づと思ひ、夫妻後四時半目白宅を出で五時四十分上野發準急にて十時過ぎ歸莊した。明けて午前六時突如東京より電話あり、曰く、「今朝五時、男子出生、母子健在」と、次で安東女史より「今朝男子出生、母子共に健全御安心乞ふ」との來電に接した。

仍つて家妻は祖母愛の發動する所直に旅裝を整へて朝九時五十分沓掛發にて歸京した。又自分は直に次の如く伯林の陽一宛に打電し、名も兼ての相談に本づき恒彥と命じたことを知らせ、赤飯をたべて祝意を表し、且つ鄉里の留守宅並に足立助役に恒彥入籍の手續を依賴した。

是より先、去五月陽一獨逸行に先ち、陽一は此度の子供が印度カルカツタ在任中に姙娠したのであるから、之に因んだ命名がしたいとの希望であつたので、ガンヂス河卽恒河に因み、恒の字を冠し、長男勝彥は昭和十三年六月に生れ、戰勝を祈る旨の意味を象徵して命名したのであるから、今度は男子なら恒彥、女子なら恒子と命名することに吾等夫婦と小供夫妻の間に相談一決してゐた。依つて今度も男子であつたので、直に恒彥と命名し其の旨陽一に打電し且つ其の手續を鄉里に依賴したのである。

露光量違いの為重複撮影



更に思ふ、自分は人口問題研究會の創立者である、常務理事として創立以來之に關與し、人口の増殖と質の向上促進に多少の寄與をしてゐる。その自分の孫に二男子を得たことは他人に比して一層の喜でなければならぬ。家妻曰く、陽一は兵役に服するの機會なく、ベルリンにて爆彈の洗禮を受けつゝあるのがせめてものことである。ソコデ孫に二人の男子を得たこと、更に男子を得ることは國家の爲めのみでなく井上家の爲めに幸である。多數の男子を獲て國家に奉公せしめたいと、自分も前述の立場上、少とも數名の男子を得たいことは平常陽一夫妻に告げてゐる所であるのに、本日幸に又た男子を得たことは井上家に取つても我が奉公の立場に於ても極めて祝すべきのことであると夫婦御互に話し合つたのであつた。玆に一言を記して後に貽す次第である。（昭和十六年七月二十七日後一時、又颶風の警報ありとのラヂオを耳にしつゝ認之）

三十日朝追記　今朝在京家妻より來信あり曰く「恒彦は生時一貫百二十八匁と云ふ稀な大きい小供でした。一昨二十七日見舞つた時は、眠つて計り、多分大ようなゆつたりした小供でしよう。勝彦も留守しても餘りむつかりません。之から又病院を見舞ひます、二十七日午前二時半に入院して五時に出產と云ふ頗る安產でした。シナ子の產褥も至極平穩です云々」第二郎は或は大物たらん。

十一、急電に接して

二十四日夜に入つて東京より來電あり「急用出來た、すぐ歸京せよ」とのことに、二十五日早朝發、夫婦相伴ふて十一時歸宅し、午食後、野村證券を經て先づ〇〇省に〇〇大臣を訪問したるに、折よく在省、直に會見したが、案の條に佛印と共同防衛條約の出來たこと、追て發表のことを內聞したので、昨夜の急電の事情も自然判明したの

露光量違いの為重複撮影

であつた。

其れより外務省に〇〇次官や南洋局の局課長を叩き、對ふ側の海軍省に〇〇少將や、副官等と語り、藏相官邸に小倉新藏相を訪ふて祝辭を述べて六時半歸宅した。

昨二十六日早朝六時半〇〇君の來訪を受けて更に或る筋の意向を聽取した。ソハ〇〇との協定成り、現地機關擴充のこととなれば其の最高顧問格で出馬を願ひたいとの或る方面の希望があるとのことであつた。其れより八時半に〇〇大臣を官邸に訪ふて數分間の短會見に要領を語り、改めて外務省に局課長と語つて條約案の內容等をも側聞し、更に〇〇省に〇〇次官〇〇〇局長、〇〇第二課長等を歷訪して現地機構の組織等に就て側聞し、〇〇祕書官に對して〇〇〇相に進言の要項を語つた後、日本クラブにて〇〇君と會食して打合せ、後一時〇〇少將と會して更に意中を內示し玆に大體の要領を得たので、後三時歸宅家妻を伴ふて後五時四十分上野發にして昨夜十時歸莊したのであつた。

日本クラブにて中井川浩君に出會つた處、彼は直に曰く「いよ〳〵あなたの時代となりましたなあ」とのことである。濱田老も亦同じ樣な挨拶である。要する南方問題の浮出した以來、苟くも舊知の人は誰彼れの別なく、自分と出會つて吐き出す言葉は大同小異で「これからはあなたの時代です」と云ふ一言である。彼等は自分が南方問題の多年の實踐者たることを何時とはなしに承知し、此の語となるのであらう。之は〇〇相でも同一であつた、〇〇〇〇諸相亦同一である。之は人の聲ではなく、天の聲であらう。實踐が物を言ふのである。之が自己の吹聽でなくして、自然の聲である。それだけに自分の責任は重い。自分は協力を求めらるゝ限り、協力の案さへ立てば之に殉ずる覺悟である。知らず現在の官僚の作爲する所果して自分の出る幕となるや否や、固より全くの未知數である。否な或る方面の推進あるとしても、自己の出る幕が明ける樣になることは中々であらう。要は自ら求めざるも、三十餘年前「志は新に國を建つるに在り」と宣して伊勢大廟に謁し南方開拓、南方建國を神に誓つた自分として此の一代の風雲に會し、輿望を負ふて之が遂行の一部を擔當することは當然の義務であるとも考へらるるので機あらば敢て涓滴の誠を致すを辭せないのである。否な辭すべきにあらずである。（昭和十六年七月二十七日快晴、陽光の燦々として窓を照らすの處、机に依り啼禽を聽きつゝ認之）

十二、共同防衞議定書發表、皇軍南部佛印へ增派

昨二十九日議定書發表、同時に陸海軍部隊の佛印增派が實現した。之に就て自分の特に快心に堪へないのは、自分の觀測の誤りでなかつたこと、自分の信念の實現したことである。屢次記述した通り、本年二月に自分が蘭印よりタイ、佛印、臺灣を經て急遽歸京したのは、

一、佛印を完全に把握すること、そのことが東亞共榮圈確保の第一段であること、

一、佛印を把握することは、やがてタイ國を圈內に確保する所以であること。

一、佛印を把握することは、卽ち蘭印を制御するの第一段であること。

一、更に加ふるならば、佛印を把握することが東亞新秩序建設の第一步たること。

一、而して苟くも皇軍の平和的進駐を理解する限り、各國は我が行動に異議を挾むの餘地なきこと、若し之に盲目にて我を誤解する國ありとするも、我に正義あり、平和の意圖あり、共同防衞たる限り、毫も躊躇すべきに

非らず、斷々乎として佛印の完全なる把握に邁進すべきこと。

等の意圖を抱き其の實現を期するに在つた。

其の後タイ、佛印國境協定調印となり、日佛印經濟協定の成立等となつて、其の線に沿ふて進行しつゝある一方に、佛印に於けるドゴール派や華僑の蠢動、シリヤに於けるドゴール派と英の合體に依る成功、英米蔣合作に依る南方亞細亞の對日包圍陣の强化等は、日に迫りつゝあるの情勢を馴致するに依り、五月初に結成したる佛印對策協議會の二度の決議となり、萬全を政府に進言しつゝあつたが、今回更に來る八月一日に同協議會を開いて、

一、日佛印間に强力なる混合委員會を設けて東亞共榮圏確保に關する諸般の問題を處理すること、

一、日佛印經濟協定に於て規定不充分なる邦人の入國居住、各種企業、貿易、交通、公有地の拂下權等に付佛本國人と同樣の自由を認めしむること、

一、佛印民衆を開放し、匡救して、東亞共榮圏内の一民族としての實力を備へしむること、

等を決議して之が實行を政府に迫ることとなつたので、自分は明後一日、歸京して之に參劃し、推進することゝしたのである。

佛印協議會は元ハノイ總領事の永田安吉君等の發言に依り、自分が當初より之に參劃し第一回の決議の際は自分が專ら政府と折衝したのであり、今後とも之が實行に努力せんとするものであつて、前述の如く、自分の二月に急遽南方より歸朝したるは、卽ち佛印把握が南方國策の確立、否な支那事變處理、東亞共榮圏確立の前提たるを信じたるに依る以上、而して其の大勢之に向ひつゝある以上、能ふ限りの力を盡くして、其の完遂に向つて盡力するは自然の順序であり、當然の責任であると云へる。偶々本日の新聞にて議定書の發表、皇軍進駐の報を得て、喜びを新にすると共に之を記して自己の信念と責任を明にし、自分の職域奉公に邁進することを改めて心に誓ふ次第である。(七月三十日後二時、時に濃霧到つて視野を沒するの處、庭禽の聲を耳にしつゝ認之)

十三、靜かに自己を顧み自己を想ふ

(一)

對日包圍陣の强化に對抗し之を粉碎すべく、佛印への平和的進駐は益々關係諸國の神經を尖銳にし、軍備に經濟に外交にあらゆる手段を以て我に迫らんとする頗る緊迫した情勢となりつゝある。此の時に當り我等は如何なる心構へに依り、如何に對處すべきか、而して自分自身は如何にすべきか等の問題が心中を去來し、眼前に展開するのである。獨り小亭に坐して瞑想す。鶯聲は常の如く吾が耳を樂ましめ、咲き誇れる山百合の白蓮は暗に芳香を送つてくる。然かも天曇つて殘間の靈嶽は白雲の中に隱見して全貌を呈せざるも、風死して四圍の蒼松白樺は森閑として吾が心境を一層澄淸ならしむるものがある。吾れ果して何物ぞ、生きて何の用かある。自己に殘されたる使命は如何。否な責任は何ぞ。斯く考へて八月四日の半日を靜思に費やしたのである。

(二)　吾れ果して何物ぞ

明治維新の風雲まだ收まらず、否な西南の一角に於て戰火揚らんとするの秋、卽ち明治十年の二月に生を享けた自分は、幼にして豐太閤を以て任じ、十歲にして鎭西八郎の風格に憧憬し、其の後五十餘年に亘る行動は、此の二先輩の蹤を追つたものと云へる。豐太閤となつて朝鮮を併せ、支那大陸を制せんとすること。之が爲には先づ陸軍

大將となり、次第に依つては青海あたりに王と稱せんか、或は稜威の下我が國第一の官となつて大日本の造成に當らんか。若しくは天下の大平民となつて大和民族發展の指導者たるべく志したのである。

而して幼少時代よりの標語は、一、易きを棄てて難きに就くこと。二、言ふよりは行ふこと。不言實行のこと。三、一直線たること。四、宇内一統は吾が志なり。五、朝夕、世界を呑吐すること。六、手段は目的に伴ふこと。等であつた。斯くして自分の過去を顧みれば、自ら此の線に沿つたことが直に看取される。曰く

陸軍大將より海軍大將志願に變つたことは一の標語に據れるもの。海軍を中途退學して支那に渡つたのは六に據る。卽ち日清戰爭に際會して從軍の出來なかつた自分は、海軍大將たる手段を棄てて直に支那大陸に渡るの手段を取つて目的を遂行するの近道に據つたもの。

斯くて十九歲にして臺灣を經て支那に渡り、二十歲にして歸京、早稻田學窓の人たる三年の間に、早稻田に於ては外交研究の同人會を起し、二十一にして「亞細亞を興すを以て目的とする東亞會」を起して其の幹事となり、二十二にして「支那を保全し、朝鮮の改善を助成するを以て目的とする東亞同文會」の創立に參劃して、又初代の幹事となり、二十三にして早稻田を卒ゆるや、第一線に躍り出で東亞同文會上海支部幹事となり、日支聯結の機關たる同文滬報を起して其の日人側主筆となり、北清事變に會して東南半壁の支持に力め、事變終結して歸朝、東亞同文書院の創立に參じ、其の成るを告ぐるや、二十五歲の時、西部亞細亞特派員として歐洲に渡り、バルカン問題研究の據點であつたウヰンナ大學に入つて經濟、殖民を專攻する傍ら、屢々バルカン、トルコより中央亞細亞、波斯、ロシヤに遠征し、二十六の秋、ベルリンに轉學、二十七の秋、バルカン、トルコ等を經てロシヤに入り、シベリヤ經由、滿鮮を橫斷して歸朝したが、日露の風雲緊迫せるを以て同文會創立第二の目標たる朝鮮處分に努力せん爲め、處分案一篇を當路に献じて、同文會韓國特派員の肩書に遞信省囑託の任務を加へて、再び朝鮮に渡り、爾來七ケ年、三十四歲の時に至る間、政府財務官、宮內府一等書記官等に歷任して施政改善の衝に當り、特に宮中の改革肅清には伊藤公の擢拔を蒙つて之が遂行の主役を演じ、併合の勢成れりと見るや、官を辭して官囑を以て世界殖民地視察の程に上つて三十五の春に歸朝した。

是より先き、日韓は併合となり、支那大陸は我が擧國的推進に依るに非らざれば保全の目的を達し難きを見て、今にして南亞細亞を制せざれば支那問題の解決も困難であり、興亞の大目的を遂行すること至難なるべきを直感し身を挺して開拓に當ることとなつて、其の年の六月に再び南洋に赴き、兼て願出で置きたるジョホール河畔に土地を租借し「明治の豐太閤はセシル、ローヅである」との見地からローヅ傳を世に公にすると共に、會社の名を南亞公司卽南亞細亞會社と命じ、伊勢大廟に謁して、祖宗三千年の遺烈に依り、大和民族享天の命運を開拓せん爲め南航するものたることを報告して神明の加護を祈つたのである。

爾來十二年、四十七歲に至る人生の夏の眞盛りを象や虎を相手とし、マラリヤと鬪ひつゝ創業建國の業に專心したのである。大正十一年卽ち四十七歲の時に夫妻相携へて第三回目の世界周遊の途に上つて戰後の形勢を檢討すると共に、南方企業合同の素地を作るべく計劃したのであつたが、十二年の大震火災は之が實現に支障を與へたる一方に、我が國民は今更の如くに人口對策より延て海外進出の要を痛感するに至り、玆に之が機關たる海外興業の活動をが促すこととなつて翌十三年三月、四十八の春に、迎へられて之が社長となり、從つて事業の範圍は南洋より

南米に伸び、爾來昭和十一年六十歳にて引退に至る十有二年の間に、約三千數百萬の國費の助成を得て、人をブラジルを主とする海外各地に送る約十六萬、開拓の業をペルー、メキシコ等に創め、コロンビヤに試驗植民地を設け又ヒリツピンの麻栽培を助成したのであつた。此の間、昭和九年に於けるブラジル憲法の改正は我が移住者の數を年三千以下に制約さるることとなり、一年二萬人内外を送出し來れる海興の取扱は數千に激減のことどなり、加ふるにヒリツピンの麻事業が國庫の借入金に據つて經營され、而かも麻事業の不振は國庫への返還期を後らすこと二回、遂に保證者たる東拓の直接責任となつた等の關係で、麻事業を擧げて海興より東拓に移讓のこととなり、海興の事業は單に移住者取扱一本となつて海興創立の趣旨に副はない。卽ち海興創立以前の單一な移住者取扱機關に還元し、從つて海外開拓移住中央機關の主腦者として迎へられた自分の素志に副はざることとなつたので、自然社長の任を去つたのである。

斯くて十九で臺灣に渡つてから四十二年、三十五で南洋開拓に挺身してから二十六年、人生の夏を過ぎ秋に入つたので、視野は益々擴がり、心境は愈々澄み、玆に昭和十年冬の渡臺、十一年の南洋行、十二年の第七次世界行、十三年冬の中支行、同十四年冬の北支行、十五年春夏の北支蒙疆行より更に同年冬より今年春にかけての南洋第二十餘度の行となつて、今、此の山莊に靜思の機を得てゐるのである。

斯く撿し來ると人生の春より夏を經て秋に入れる六十年（六歲で自ら豐太閤と稱す）の生涯を一貫するものは幼少時代よりの標語を實行に移したものであることが判る。豐太閤と鎭西八郎との混生兒であることが判る。想ふに吾れに英雄の氣を吹込んだのは吾が父であり、興亞の志を立てしめたのは、荒尾先生であり脚下の實學を敎へられたのは森村翁であつて此等の師父は自分の生涯の進路に少なからざる指標を示されたものであることは申す迄もなく、又時代の影響に依り、且つ世界を家とせし過去數十年に亘る經歷が今日の自分を產んだものであらうが、然し其の根幹となつたものが六歲の豐太閤十歲の鎭西八郎から生れ出でたものと申しても大過はあるまい。

今や滿六十四歲を越ゆる半歲顧みて諸先輩の齡を算するに大隈侯澁澤子等の長壽者を別として伊藤公は六十八、和田氏は六十四、兒玉伯は五十六、明石大將は同じく五十六、若しそれ南洲翁は五十一、大久保侯は四十九は云ふ迄もなく、荒尾先生の三十八、松陰先生の二十九、橋本左内先生の同じく二十九、各々相當の使命を果してゐらる。而して自分は旣に頽齡に及んで、何等爲す所がない。先輩に對して耻づべきであるが、然し決して自らを輕んずべきでない。自分は兎に角生涯を一貫したものを持つてゐる。それは明治の豐太閤たり、鎭西八郎たることである。セシル、ローヅたり、海外第一線の拓士たることである。種を蒔くものは自分等であり、之を刈り取るは次代の人である。已に名もいらず利も求めず一意國民の海外進出、皇道の世界宣布に涓滴の誠を致し來つた自分には、自ら自己滿足があり、然かも多數の先輩同志の多く、逝いて墓木已に拱せるに、天吾れに壽を與へ身心共に强健にして殘軀を國家民人に奉獻し得るを思へば感謝の外はない。

（三）　生きて何の用かある

自己の過去を檢し、自己の現在に鑑み、更に現下の時勢を顧みるの秋「生きて何の用かある」の問題は言はずして自ら明瞭であると云ひたい。

我が國は今、生死の巖頭に立つてゐる。美辭麗句を駢べて我が國の使命を宣べ、我が國の前途を禮贊しても、此

の國難を打開して皇道を四海に宣布するは結局人の問題である。而して現に其の人あるか、言多くして、行ひ之に伴はざるなきか易きを棄てて難に就きつゝあるか。一億一心たり得たか。指導階級の氣魄と信念奈何。斯く考へて來ると、更に一層の努力と捨身の態度を要求せざるを得ない心地がする。而して幸に六十年一貫の信念に生き世界の風霜に暴され來つた自分には、些少ながらも此の心境があり確信がある。此の心境があり、確信がある限り、時に應じ變に際して、之を露呈するは斷じて自己の爲めではない。祖國の爲であり、一億同胞の爲である。生きて用ある所以である。

故に「生きて何の用かある」の問題は現在の狀態に於ては「大に用あり」で問題とするの餘地はない。苟くも生を神國に享くるものの老弱男女を問はず、各其の職分に應じ渾身の力を致して、其の奉公の誠を盡くすべきの秋たるに於て自分の如き最も有効に殘年を奉献せねばならない。

(四) 自己に殘された使命は如何

從つて「自己に殘された使命は如何」の問題であるが、之は略前述の生立ちと信急と經路に依つて自ら明となる所であるが、一言を加ふれば

一、興亞の素志を貫くこと。

一、之を貫く可くあらゆる部門に献替すること、就中、對南國策の樹立と遂行は焦眉の急にして尤も之に力を致すべきこと。

一、これやがて近頃の言葉である東亞新秩序の建設であり、大東亞共榮圏の確立であり、延いて皇道の世界宣布であり、八紘一宇の顯現である。

之が指導と遂行に全身全靈を捧ぐることが自己に殘された使命でなければならない。

(五) 自己の責任は何ぞ

使命の在る所、責任之に伴ふ。已に興亞一路に邁進し、六十餘年の風霜を凌ぎ來つた者の責任は其の使命の完遂に在る。使命の完遂には

一、あらゆる努力を爲し一億一心の實を擧げ各人をして皇國の大使命完遂の使徒たらしむること。

一、世界の趨勢と人類の歸趨に鑑み、我が國の現在及將來に亘つて蒙るべき大苦難を甘受して、敢然之が打開を爲し、光明の天地を創造する様、獨り我が國民のみならず廣く東亞の同胞を指導すること。

一、人生は短かく其の成し得る範圍も亦狹し、宜しく思を潛め想を凝らして立言以て世を警醒し、人を啓蒙すること。孔子が六十八にして漸く郷閭に歸耕し七十三にして歿する迄の僅に五年間に於て不朽の言を貽して千歳を益しつゝあるが如き一例とすべし。

要は、人生の秋に在る者の爲すべく、爲さざるべからざることに想到して、自己の出處進退を誤らざること緊切なり。松陰、景岳兩先生の如く、三十に滿たずして死するも命なり、大隈、澁澤、諸老の如く九十の齡を重ねるも亦命なり。即ち二十も人の一生、九十も亦人の一生、天より享けた自己の壽命に恭順し其の間に全靈全身を捧げて自己の使命に忠實ならば、天壽は問題でない。況んや齡六十五に及んで身心猶健に、此の世紀の大轉機に會ひ皇國萬世の基を此の時に立てんとす。眞に感謝の外はない。宜しく一瞬一刻をも徒消せず、使命と使命に伴ふ責任の完遂

に邁進して死に至つて已まざるべきである。

書して玆に至り輕井澤國民學校の敎員三名、約に依つて來訪す、乃ち惡筆數葉を揮つて之に酬ゐ、更に小亭に坐して此の記を草し了る。時に午後二時四十五分、天未だ晴れざるも風起らず、鶯聲に加へて蟬聲あり、後庭の山百合の花開くこと數寸、敢て他に向つて誇らないのが最も吾が意に適するものあるを覺ゆるのである。

十四、山百合花を詠じて重光君に郵す

昨夜入莊、今朝の東朝紙長野版に目を曝らし、フト重光大使が七日輕井澤に上り、夕刻高原を襲ふ雷雨を眺めつゝ讀んだ一句「夕立や本の下蔭のゆり一つ」と云ふ俳句を見て同大使の心境を窺ふと共に自分自身が山百合の花を愛し、其の深山幽谷に清素の姿を現はして何等他に向つて媚びざるの境地に入神するを常とし、今を盛りと咲き誇れる皓姿に魅惑されつゝあるを想ふて歌つたもの數首を書き送つて一は以て同君の勞を謝すると共に自分の心境を語つたのである。猶ほ昨十五年八月上高地に遊び燒ケ嶽に上つた際、御前橋が怪石奇巖、磊々累々たる裏に清素な姿を現はしてゐるのを見て、塵外に超然して媚を求めざるにあらず、媚を知らざるの無我無心の境地に魅惑されたのであつたが、其の時の卽吟に曰く。

高山千古雪如レ賓、深壑萬重雲主人、御前橋草不レ知レ媚、清姿世外絶二纖塵一

重光君もロシヤより英國へと欽差の命を拜し、戰亂の眞只中に身を挺して五ケ年振りに祖國の土を蹈み祖國の山河に接し感興多大なものがあるであらう。之に關連し忽ち思ひ浮ぶは、去る昭和十二年夫妻相携へて第七次の世界周游を爲すや、歸路をシベリヤに取るべく、蘇聯通過並にモスコー滯在の允許を求めたる際、重光君にソ聯への交渉を依賴し、又一方當時のソ聯駐獨大使ユレネフ君を訪ふて之が斡旋を依賴したるも、二ケ月を過ぎて猶ほ許可の通知に接せなかつたので、歸程を急ぐの要もあり、榛名丸にて印度洋經由のこととし、其の旨重光大使に申送りたる處、大使より「室を淸めて待つてゐたのに大に遺憾だ」との來信に一詩を寄せられたので、自分はローマで大使のこの書翰に接し、直に左の一絕を送つて大使の勞を謝したのであつた。

重光大使に答ふ

欽差萬里鄂羅天、持レ節誓期宸慮宣、夙獻二一身一家二世界一、知君樂辱淡レ干レ煙、

（昭和十二年八月九日朝、東朝紙を見て所思を誌るす）

十五、漸次凋落の舊友を憶ふて

無劍渡邊千多子爵とは、明治三十四年在歐當時から昨年四月同君の歿するに至る約四十年に亘る舊友の一人である。先日山莊より沓掛に出で途上、ふと同君の見山莊の森を眺めて一絕を得た。

沓掛途上、無劍渡邊子を懷つて　　七月二十一日

北馬南船未レ了レ因、殘軀尙想二國難辰一、山莊夏半冷如レ水、默數親朋少一人、

其の後菅圓吉君と沓掛町外に土地を撿しての歸途、未亡人に見參したく見山莊を訪ふた所、幸に在莊されてゐたので久振りに挨拶を爲し故人を語つたのであつたが、昨八日中央亭に於ける南洋協會主催の南洋經濟懇談會の午餐食卓で長男の武君と相隣つて坐した。武君は明治三十九年生れで本年三十五とのこと、爲替管理送金課長の職に在る。そこで復、大に故人を語つたのであつた、寔に奇しき會合であつた。依つて昨夜入山、本朝の小閑に前記の一

絕の外に左の二絕を書して、未亡人に屆けることとした。年を經るに從つて故舊、親朋が漸次に殂落するのも「四時の序、功を成すものは去る」の哲理で如何ともし難いが、自分が幸に頑健で涓滴の誠を致し得るのは天の惠と云はなければならない。

昭和十六年、三たびライン河畔に遊び戰勝記念碑に謁して故渡邊父子を想ふて

邂逅萊因討㆓舊盟㆒、古城殘壘後先迎、不㆑堪四十年前感、戰勝碑邊夜話㆑兵、

昭和十五年四月十七日、余北支視察の途に上り舟中に在り、十七日舊友小幡龍峯新に樞府に入るの報あり、次で十八日、渡邊無劍薨去の報に接し、喜悲交々到る、乃ち賦して懷を遣る。

無劍當年氣似㆑鷹。龍峯風骨尙崚嶒。曾吟歐水亞山月。又共花明柳暗輿。
私雨春風四十載。哀榮契濶意不㆑勝。喜悲交到眠難㆑就。獨對船窓半夜燈。
（昭和十六年八月九日朝十一時半、於山莊）

十六、チャーチルの通信趣味から想起して

今の大英帝國首相ウヰンストン・チャーチルが二十一歲の中尉時代、キュバ叛亂鎭定の西班牙軍に從つて始めて新聞通信員を囑託され、一編五「ポンド」づゝの報酬を得て五回の通信を「デリー・グラフヰク」に送つたことがある。之が彼をして頓に文章に興味を感ぜしめた動機となり、其の處女作 Man over board を發表し、更に四年の後に Savrola なる一篇を公にした。其れから彼は二十五歲の秋に印度に遠征しスーダンに轉戰し、更に遠く南阿の戰爭にも參加したが、いつでも戰時通信をして本國に名聲を博し、二十六歲で政界に入つて下院に議席を占め三十二歲でローズベリー自由黨內閣の殖民次官となり、三十四歲でアスキス內閣の商工大臣となり、爾來英國政界に馳驅する三十年、戰時內閣の首相として必死の努力を祖國に捧げつゝあるのであるが、最初の記者生活が彼の驥足を伸ばすの奇緣となつたようである。

之に就て想起するは矢張り自分のことである。自分が始めて讀賣新聞に通信を載せたのは明治三十一年の支那旅行の時で偶〻北京滯在中に彼の淸末政變として名高い戊戌事變に際會したが、自分は東亞會の幹事であり、康有爲一派の革新黨も會員であつた關係から該事變には特別の繫りもあり、自然自分の發表した「大陸嘯傲錄」は此事變の表裏を第一着に東都に報告した爲め、時人に多少の感興を與へたのであつた。

翌三十二年同文會上海支部の幹事として赴任するや、又日本新聞の通信を委囑された、と云ふのは同文會の幹事長は日本新聞社長の陸實先生であつたからでもある。斯くて翌三十三年の北淸事變に際しての自分の通信は常に日本新聞を賑かしたのであつた。

三十三年に歸朝し三十四年渡歐に際しては、同じく日本新聞の委囑を以てバルカン問題始め歐洲の狀況通信を爲し、三十五年の中央亞細亞旅行には大阪每日に通信し、更に三十六年歸朝、渡韓するや今度は特に德富蘇峯先生の委囑に依り國民新聞に通信のこととなり、更に明治三十七年春から翌三十八年にかけて、自分が韓國政府に任官する迄の約一ヶ年間は加藤增雄顧問や天春又三郞君等の懇望に依り仁川にて發行された朝鮮日日新聞の社長に就任して直接新聞經營の短かき體驗を積んだのであつた。

〻明治四十三年より四十四年に亙る第二次世界旅行に際しても、大阪每日に通信を揭げてアフリカ、印度方面の事

態を國民に知らしめたのであつた。斯くて自分の新聞通信はチャーチル同様一の趣味となり、趣味が體驗となつて爾來幾多の著書を公にしたが、明治三十六年の中央亞細亞旅行記を始めとし、大陸遊草。四大陸遊記。新に西半球を巡りて。若き日本の進路。大日本の進む路。等等幾多の著書は多く其の骨子を旅行中に構成したものと云へる。自分の外國からの通信は自分の著書の大綱を成せるものと云へる。偶々チャーチルの通信關係が彼の一生を通じての道樂であり、其の道樂が彼の今日の素地を成したことを知つて、自分の通信緣故に想到した次第である。（昭和十六年八月十日夜八時認之）

十七、人を動かす力

人を動かす力は至誠一貫、終生渝らざる集積に依ることは略々諒解出來るが、或は楠公の如く或は乃木將軍の如く、變故に際し自を犧牲にしたのではなく、八十年の長日月に亙つて愈々名聲を掲ぐるに至つた我が頭山滿翁の如きは蓋し稀な例であらう。今朝もある記事を讀んで南米ブラジルあたりの在留民の中に最も人氣あり、エライのは翁であると云ふことである。何故に然るかと云へば、現に翁の如き型の人物が無くなつた爲でもあらうが、要は翁が一生を貫ける宦途に就かず政黨に入らず、而かも支那を愛しアジアを愛するてう大きな處、自ら求めない處に人氣が集まるのであらう。或る方面に於て發表した所に依ると我が國での一番人氣男は中世に於ては楠公であり、近代に於ては南洲である。楠公は四十四、南洲は五十一で不幸にして夭折した。頭山翁が八十を越えて矍乎たる特異の存在であることは更に珍しいと云はねばならない。而して其の然る所以を考へて自ら戒め自ら學ぶ所がなければならない。

自分が翁が知つたのは勿論荒尾東方齋の關係であり、明治三十年夏シベリヤ遠征の途次、福岡にて其の風姿に接したのが最初である。翁は荒尾先生、佐々克堂先生と三人兄弟と云はれた。從つて荒尾先生に因緣ある自分は佐々先生とも面識となり、特に明治三十二年の多か三十三年の初め、自分の上海在留中克堂老の來遊となり、老の驥尾に付して郊外劉學洵邸に北京行途上の李鴻章翁を訪ふたことは、今でも當時の狀況がありありと眼前に展開するのである。

頭山翁は曾て荒尾先生を評し「五百年に一人位出て來る大人物だ」と云はれたことは拙著「荒尾精」にも掲出されてゐる。翁の先生に傾倒された樣子がわかるのである。其れに就ても考へさせらるるのは我が民族性の一缺陷と云はうか、兎角永續性の乏しいことである。機會主義であることである。我が邦人の俊敏にして進取的たること、他の長を採り我が短を補ふこと其の他幾多の長所あり、優秀の民族たるは申す迄もない。卽ち其の素質はよいが、一面飽き易く、變化を好み、永續性の乏しき缺陷がある。どうしても之を匡正陶冶せなければならない。翁の如き此の點よりしても景仰すべき「一貫の生涯」を辿つた存在であらう。吾等は翁に學ぶべき何物かを感ずる。（昭和十六年八月十二日前十一時認之）

十八、永續性の乏しき一例

今朝は又「南米と日本」との關係に就ての權威筋の問答を讀んだ。結論は我が日本の政策に永續性の乏しいことである。日支事變以來、南米問題は兎角世人の耳目から閑却され勝ちである。否な世人ではない、〇〇自體がである。昨秋態々ブラジルの首都に在中南米諸國駐在の外交官を召集して大公使會議を開いて對中南米策を講じた後、

間もなく此等の中南米に智識あり經驗ある我が外交官は多く退官となりて引上げ、後に殘つたものは若年の外交官のみとなつた。對中南米外交は中絶したのである。自分の如き南米に渡ること三度、ブラジルを始め中南米各地に事業を創め人を送つたものとして、猶ほ現に此等の諸國に關係を有するものとして、現在の狀況は切に遺憾とせざるを得ない。斯樣な體たらくでは、堅實な世界帝國の建設は至難だ。我等は我國民族性の缺陷に鑑み、速に之を匡正して、粘り强い强靱な品性を鍊成して此の難局に對處せねばならない。否な此の難局こそは好箇の鍊成機會であり、鍊成道場となるのである。

山莊に靜居して念頭に浮ぶは帝國の前途であり、其の難局であり、而して此の難局を擔當するの人が乏しいことである。此の意味に於ても自分等の任務は必ずしも眼前の局面打開に寄與するのみでなく、國家永遠の爲めに立言立德して次代國民を指導することであり、不死の生命を我が民族に與へることである。（昭和十六年八月十二日前十一時半認之）

十九、勤　か　順　か

荏原區中延町に一家を營める〇〇〇は、最近四ヶ年餘り見習として目白宅に住み、忠實に勤務したものであるが、昨年緣あつて〇〇家に嫁し、主人は某新聞社に勤めて仲睦しく家庭を造つてゐるが、來る九月初に初產の豫定で其の產兒の命名を是非にとのことに、之に應じて左の如く命名すべき旨申し送つた。之も家庭敎育より出でた一箇の產物であらう。母子の健在を祈りつゝ。

男の場合　　勤（つとむ）

左傳曰、求二諸侯一、莫レ如二勤王一、老子曰、上士聞レ道勤而行レ之、淮南子曰、群臣勤務而不レ怠。

其の他字例多し。

女の場合　　順（じゆん）

禮記曰、心知百體、皆由二順正一、史記曰、湯武逆取、而以レ順守レ之、易經曰、君以二順德一、積レ小以高大、其の他字例多し。（昭和十六年八月十七日、恰々山莊、梧堂）

二十、支那四千年史を繰り返し讀んで

支那の建國、蔣介石の所謂黃帝の子孫たる支那民族四千年の史實を玩味すれば、其の妙味津々として盡きないものがある。堯舜の政治、無爲にして化する政治が如何に少なく、戰亂に苦しむの時代が如何に多かつたか、而して今は最も堯舜の政治に遠ざかつた時代である。蔣は支那をして益々其の本來の支那民族の欲せざる方面に驅り立ててゐる。支那は昔から天下太平の時には大なる思想家も、文豪も詩人も顯はれずして一生を官途に終るのが常であるが、世が亂れて青雲の途が絶へると或は「晴耕雨讀」と稱し或は「跡を江湖に晦ます」と稱へて窮愁の間、落魄の裏に其の性情を養ひ、其の品性を煉つて百世の師となり、萬代に生くるの聖賢豪傑を出してゐるのである。孔孟始め古來の哲人傑士は多く戰國の產物である。而して今の支那に果して哲人傑士を生みつゝありや、否な支那ではない、我が國に果して哲人傑士を生むの環境あるや、然り自分は必ずや長期戰に伴ふて志あり氣魄あるの士にして江湖に落托しつつある者、一朝天の命あらば蹶起して時艱匡救の爲めに献身する機會あるべく、又退いて千古に生くる思想界の指導者を出す好機であらうことを信ずる者である。

古人の所謂、貧賤に在つて貧賤に處し、富貴に在つては富貴に處すべく、窮通榮辱を以て其の志と行を二三にせざるは男子の眞骨頭であつて自分は斯る人士の少なからざるを信ずる者である。而して斯る哲人傑士は今の支那に生れずして我が東方の君子國に生れるであらう心地がする。支那四千年史に新に目を曝らして此の感が深い。（昭和十六年八月十八日認之）

二十一、青年の自分に對する憧憬の書の一例

時々未見の人から自分に對する憧憬の至情を寄せる書面を受取ることがある。此等の人々は多く青年に屬するが中には中老年で世故を經た人がないでもない。堺市の〇〇〇〇君の如き其の一人であるが、本日入手せし〇〇〇なる青年は當年二十四歳、本十九日露西亞語通譯として陸軍に奉職して任地に向け出發するとのことである。此の青年と自分を比較すれば時代の相違もあるが、自分は

十九歳の時に陸軍通譯として臺灣に赴き、二十歳の時に支那に渡り、二十一歳の早稻田時代に外交研究の同人會を組織し、又東亞會の幹事となり、二十二歳で東亞同文會幹事となり、二十三で「支那論」を著はし、同文會上海支部幹事として上海に駐在し、二十四で同文滬報の邦文主筆となり、二十五で渡歐した。

こと抔を思ひ合せると自分の早熟が偲ばれる。然し〇〇君の如き感激の青年の出ることは時勢の然らしむる所と云へる。後の參考の爲め彼の書を保存することとした。（書翰略す）

二十二、單純と一直線の生涯

ヒツトラーの「マイン・カンプ」を改めて讀んだ。何も彼に負ふ所あるのでもなく、新に啓發せられるのでもない。只だ彼に依つて更に自己の信念を裏付けるものがあるのである。其れは何か。曰く物事の簡單化であり、處生の簡素化であり、作爲の單純化である。簡單、簡素、單純は何れも實行から來る哲理である。實行の妙味に依つて自然にさうなるのであり、さうさせるのである。

世の中が斯く複雜怪奇となつては人は之に惱殺されてヒステリツクとなり神經過敏とならざるを得ない。之を打開し之を解消するは則ち物事を簡單にし、處生を簡素にし、作爲を單純にするに在る。自分は小供の時分から不言實行者であり、知行合一共鳴者であり、直線主義であり、難に就き易を棄てる流儀であつた。而して其れは物事を自然に簡單にし處生を簡素にし、作爲を單純ならしめる。斯くて世の中を明るく渡り來つた、自分を誤解し曲解する人は相當多數であらう。自分は曲線的言動を取らず、赤裸々、露堂々と言動し來たつた、行動に依りて世に示し、言論に依つて說明はしなかつた。誤解曲解は已むを得ない所であらうが。自然に時が彼等をして正解直解せしめるであらう。敢て辯解するの煩を採る迄もないことである。

ヒツトラーは亦、敎育の方針として第一に身體を鍛錬すること、第二に精神を陶冶することとし、智識の吸收を第三位に置いてゐる。之も大體に於て首肯せらるる、身體の强健、精神の剛健なる者は、能く信念に生き、之を貫徹するの勇猛心を出し得る。其の上に廣く智識を吸收して世に處し人に處することに誤りなきを得るのである。彼の方針は彼の體驗から來る所多からざるべく、且つ彼の至純な否な單純な强き性格は多年の實驗に依つて益々純化され强化されて今日の彼を大成せしめたものであらう。妻帶せず、肉食せず、飮酒せず、てふ禪僧的生活は一層彼の强き性格を鍊成せしめたのであらう。而かも年猶ほ僅に五十一、自分よりも十三歳の若さである。其の造詣は更

に今後に待つべきものが多大であらう。彼に就て大に學ぶ所がなければならない。

又ウヰンストン・チャーチルの傳も讀んで見て、青年時代よりの直線的行動は今日の彼を大成せしめたに相違ない。彼も單純家である。今日彼が兎も角も全英國の輿望を擔つて「ナチス」打倒に邁進しつゝある所は、即ち彼が印度に南阿に、將たガリポリーに軍に從つて死線を越えた經歷と同一線上の行動である。彼は本年六十八歲、圓熟の境に入るべくして未だ衰老の徵なく、當年のチャーチルとして本大戰に一方の旗頭たる。一に彼の單純家なるより生ずる勇猛不退轉の境地から湧き出る信念に據るのであらう。敵乍ら彼に於ても亦單純の妙味を見るのである。自分も亦此の至純、單純の心境に安住して之を處生の訣となし、作爲の方針として一路直線的に進むべきである。偶々ヒツトラーとチャーチルの傳記を改めて檢討して所感を綴り置くこと如斯。(昭和十六年八月二十四日、南原お別れの會に臨まずして、山莊に認之)

二十三、「ダニューブ河畔の諸國」を讀んで

ヱミイル、レンギール著「ダニューブ河畔の諸國」を讀んで興味深く、當年のダニューブ河畔の游より、ダニューブ河を上下した思出が津々として念頭に浮び出るのを禁じ難いものがある。

ダニューブは二萬年に亘つて源を獨逸のシユワルツ、ワルドに發し、蜿蜒一千七百五十哩、黑海に注いでゐる。而して巴里が一漁村として現はれる數千年前に已に文化の中心であり、其の流は二千年の文化を示してゐる。上流には獨逸近代的機械文明の所產たる工業都市が榮へ、その黑海に注ぐデルタ地方の漁夫は使徒ペテロの頃の舊態を存してゐる。ダニューブを下るのは人類の過去に溯ることであり、且つ此の河ぐらゐ戰爭を見たものは無いであらう。その流れはヱジプト王セントリスの射手、ペルシヤ王ダリヤスの弓隊、マセドニヤ王アレキサンダーの重甲部隊、フランク王シャーレマンの槍騎、ハンガリー征服者アルパツト大王の戰士、回教ソリマン皇帝の親衛隊、乃至は蒙古から長征した成吉思汗の大軍もナポレオンの精銳をも見たのである。

ダニューブは矛盾の河であり、ローマンスの河であり、政治的噴火山の河である。古來幾多の興亡は此の河を繞つて起つて來た。自分が明治三十四年卽ち四十年前にダニューブ河畔のウヰンに來たのは此の政治的噴火山たるダニューブ河畔の諸國の實況を視ることが其の目的の一であつた。當時滿洲は東洋のバルカンであり、バルカンは西洋の滿洲視された。東に於ける日露、西に於ける露土の抗爭が自分を驅つてバルカン問題硏究の基地たるウヰン大學に入學せしめ、バルカンに出遊せしめ、ダニューブを上下せしめたのである。而して今もバルカンは依然として歐洲の噴火山的存在である。歷史は繰返すと云はるるがバルカンは如何にも呪はれたる國であり、而してダニューブは其の根幹である。此の河畔に立つて悠久の昔と悠久の將來を思ふ。自ら興味の湧くを禁じ難いものがある。

一、明治三十四年除夜ダニューブの月

五洲大豈無ニ知音一、蠖屈何傚ニ梁甫吟一、凍月霜寒多惱夕、照ニ吾二十五年心一、

二、明治四十三年十月ベルグラツドにて

從ニ新月沒ニ馬兒干一、紛々小邦事ニ構難一、須下起ニ英雄一試中合一上、不レ然曷得ニ生民安一、

三、同、ベルグラツド城頭吟

此地曾覊新月旗、山川更レ主幾春秋、城頭遠望感ニ何事一、只見大江天際流、

四、昭和十二年九月ウヰンに入る

風物山川無古今、依稀何巷舊盟尋、依然一片大江月、猶照封侯萬里心、

何時見てもダニユーブの流は悠久であり不變であるが、人類の興亡は數限りもない。而して四十年前同遊の士で今に存するは十の二、三を出でない。只だ邦人に在つては牧野老伯が八十歳の高齡で猶ほ健在であり、獨逸人に在つては中央アジヤ探検以來の舊友ホフリヒター大佐が同じく七十五の老軀を以てエルベ河畔の山莊に閑居せるは、自分をして心を怡ばしるものがある。偶々「ダニユーブ河畔の諸國」を讀んで、ダニユーブを想ふて。（八月二十四日後五時山莊にて記之）

二十四、ウォーレスの著を讀み、又簡素の妙味を味ふ

昨日は簡素、簡單、單純が精神も肉體をも進化發達せしめるものである意味を述べて置いたが、今日米國副大統領ヘンリー、ウォーレスの「米國の選ぶべき道」を讀んで、同樣のことを述べてゐるのに逢着した。而して彼は面白いことを言つてゐる。曰く「總ての物は我等の母である大地から生れる。人間は生きた山水の一部であつて、山水と同じ材料から、同じ自然の作用と法則に依つて形造られる。人間の肉體思想及び精神は此山水の產物である。日光と土と風と空氣の產物である。太陽の下にある一切の物は雲も土も水も人も人の精神も現に運行中の同一組織體に屬するのである」と。又曰く、「吾々は幽靜な天然の場所に於て其の心神を爽快にし其の意圖を新にする必要がある。終日絨氈に足を載せ、椅子に腰掛けて、壁や天井ばかり眺めてゐる人は、眞の生活と神心更新の永久的源泉から一部分遮斷された人である。眼を天空に放ち、足を大地に着けてする仕事や遊戲には奇妙に心氣を回復させる力がある」と、如何にも我等東洋人の言ひさうな口吻であり、之が眞理である。其の生活を簡素にし、其の處世を簡單にし其の作爲を單純にして、一路直前、始めて天空快濶の境地となるのである。而してそは「言ふよりは行ひ」、「至誠一貫」世路を經盡くすに依つて得らるる境地である。ウォーレスは農務大臣として相當の治績を擧げた人である。彼は天然に憧憬し、自然に入神して自國の擇ぶべき道の那邊に在るかを會得したものと見へる。

然かも彼が北米は猶ほ若き國であり、之に中、南米を加ふれば開拓の餘地充分であり、住民が天然に憧憬し自然に入神して身心を剛健ならしめ得るに於て、今後少くも百年の間は西半球が文化の中心たり得るとしてゐる。而して人口と資源を說き人口多くして資源乏しき舊世界人の侵入を拒まんとするのである。彼の主張は自己本位に立脚してゐる。世界人類をして等しく其の惠に浴せしめんとする公正妥當の精神に缺けてゐる。現在の英米を主とする現狀維持國家群が、自己的主張を撤回せざる限り眞の平和は成立しない。彼も亦一のアメリカ人に過ぎないのである。我が皇道の精神と相距る遠きものがあると同時に我等の前途には幾百千の險難が横つてゐることを示すのである。我等は今日世界史上最も危險な時代に出逢つてゐる。特に次代を擔當する青少年は有史以來曾てなき難關に逢着し之を打開するの大責任を負はされてゐる。自分が次代國民の奮起を望み、立言立行、以て彼等を警醒し鞭撻せんとする所以も之が爲めに外ならないのである。

月の七日以來山莊唯一の寵兒として日夕吾等の眼を怡ばしめ、吾等の心を喜ばした長孫勝彥は其の祖母に伴はれて今朝歸京し去つて、終日久振りの快晴に陽光が燦々として庭樹を照らし、生々の氣に充てる裏に讀書の快を貪り得て、身心快適、思を天地有形の外に馳せ、神を風雲變體の裏に入らしめ得た、時已に六時、婢女の入浴を促がし

來れるに依り筆を擱く。（八月二十五日午後六時二分恰々山莊の階上、夕陽が赤雲の中に沒しつゝあるを望みつゝ認之）

二十五、第一補給圈の絕對確保、南進の第一歩

大西洋上に於ける英米兩巨頭の會談に伴ふ八項目の宣言に始まり、昨二十四日のチャーチル英首相の放送演說に依つて對日壓迫政策の全貌を露呈すると同時に、猶、東亞に於て日本と事を構へたくないと云ふ老獪の意圖が窺はれる。何れにしても我は我れ自を恃むべきのみであるが、指導階級は一面不動の方針を堅持すると共に、臨機應變皇國の運命打開と聖戰完遂に萬遺漏なきを期せなければならない。

英米が我が南進の眞の意圖を諒解すれば、自ら疏通の途あるべく、而かも之が諒解に一段の努力を爲し、又着々事實に依つて之を證明することが緊要である。我は佛印に平和的進駐を試みたが、タイ國に對しては英米が脅威せざる限り我より進んで事を構ゆるものでない。況んや英領馬來にしても我を排斥せざる限り、其の地域を侵すものでないことは屢次の聲明に依つて明かなるに拘はらず、益々我が平和的南進を歪曲し英米共同して我を壓せんとする限り、最後の場合に到達するも亦已むを得ないものがある。

然し、チャーチルの言を味ふに、日本の南進が現在のタイ、佛印線に止まるならば英國は日本との平和的解決を行ふべき用意あり、努力する積りなること、更に之に關し米國では日本の正當なる權益に對し最大なる保障を與へる用意あることが窺はれる。チャーチルの性格と其の地位よりして其の言に重大性を持つことを認識して、彼等をして我が眞意を諒解せしむるに不斷の努力を爲しつゝ南方共榮圈の實質的確保に專心し、今後の推移を凝視すべきである。當分の間、我が對南方國策は現在の線に限るべく、自力を養ひつつ、萬止むなき場合にのみ前進すべきである。

本年二月自分が佛印進駐の急務を認めて歸朝、佛印對策協議會を設け又個人として當路に力說したるもの、遲蒔きながら之が實現を見、今や企畫院の所謂第一補給圈確保に乘り出しつゝあるは頗る滿足する所であると共に、之が完遂には今後共、出來る丈けの聲援を送る積りである。而して必要の場合、自ら乘り出すことも辭せない所以である。（昭和十六年八月二十六日午前十時山莊階上に涼風を味ひつゝ認之）

二十六、又殘されたる道に就て

時々刻々轉變極まりなき現代に於て吾が殘された道如何。之に就ては從來屢々所言を攄べ來つた所で自ら明白であり、敢て玆に贅言を要する所ではないが、久振りの快晴、心氣一層澄明なるものあり、所感の儘を書き綴る次第である。

人は時代の產物であり、多くは時代の波に搖蕩さるるを免がれない所であるが、膽識ある傑物は克く時代を制し時代に乘じつゝ其の所信を斷行し、後世を稗益するのである。熟々現今の世界狀勢を察するに、其の好むと好まざるとに拘はらず、世界は英米を主とする現狀維持國家群と獨伊を中心とする現狀打破國家群とに二大別され、此の間に在つて我が日本は東亞に位し、多年白人の搾取の下に呻吟してゐたアジヤ諸民族を提げ、日、滿、支を中心とする大東亞共榮圈の確立とソ聯を中心とする共產國家群に分たれ、當分、惡戰苦闘を續けるの外ない情勢となつて來た。特に我が日本は猶弛緩せる日、滿、支の紐帶を結束しつゝアジヤの虐げられた諸民族を統合して人種平等、世

界統一の聖業に従はなければならない。謂はば英米や獨伊やソ聯に幾倍するの負擔を荷つて千里の道を往かなければならない運命に在る。

そこで、ウォーレス米副大統領の述べてゐる通り、我が國の現代國民は世界剖判以來、曾てなき苦難の路を歩むべく運命づけられてゐる。是に於て乎、我々の殘されたる道如何と云ふことになるのであるが、靜かに自己を省み自己の任務を想ふに、

一、自分の歩み來つた道は慥かに興亞一路でありアジヤを興すに在り、支那より南洋に南米に足跡を印し邦人の發展に半生を捧げたことは間違はない。然し其の跡を檢すれば、所謂パイオニアの惱みとも云ふべきか、僅かに世界の隨處に十數萬の人を送り、世界の數ケ所に開拓の步を印したに過ぎない。其の事業も小さく、其の足跡も從つて淺い之は自己の微力の爲めのみでなく、我が母國その物の猶ほ微力なりしに起因する所であると云へる。故に今後の國民の努力に待つべきである。少くとも自分は我が國海外進出の一パイオニヤとして四十年一貫の路を辿つて來た以上、出來る丈けのことはしたとの安心がある。

二、日支事變勃發、已に聖戰滿四年、切りに東亞新秩序の建設、大東亞共榮圈の確立が叫ばれ、之が完成の途として南進が不動の國策となつて來た。此の點に於ても自分は過去三十餘年に亘り南洋開拓の實踐者として、將た又南方進出の先陣として公私、其の推進に努力し來つたことは聊か自ら慰むるに足るものがある。最近昭和十年に於ける對南國策會社創立への關與、十一年の南洋平和使節、十二年の和蘭本國への國民使節、續て昨十五年より十六年にかけての現狀調査と彼我の交驩、而して現在に於ける佛印對策協議會の創設、對南問題に對する個人的の翼贊等猶、自己の爲すべき途が開けてゐる以上、敢て自ら求めざるも自己の信念の指す所、出來る限りの力を致すは已むに已まれぬ良心の衝動である。

三、然し、果して如何に對處すべきか。之に就ては世相と政情に鑑み　徒らに自ら求めず、左ればと云つて高踏的態度も亦國家に忠なる所以でない。宜しく人心の趨向を察し、世論の歸趨に見て、善斷善處しなければならない。渭川の漁父は八十歲にして始めて廬を出たが文王がなければ彼は隣人の笑を貽して窮巷に死んだであらう。今の世は必ずしも文王を待つべきではない。否な文王は居らない。此處が渭川の漁父よりも一層出廬の困難なる所以であらう。此處を克く洞察して奉公の道を求むべきであらう。勿論、奉公の道は必ずしも出廬を待つて始めて庶幾すべきではない。終生、草廬に隱るとも立言立行立德以て百世を益し、千古に生くること孔夫子の如き人がないでないが、其には孔夫子の如き天禀の英資がなければならない。只だ天禀の英資の有無に拘はらず、自己の經驗よりする識見と世界の情勢を洞察するの明とに依つて自己の力量を傾倒して立言以て後に貽すことも殘された道である。

四、而して顧みて自己の力量は奈何、今に滿六十四歲半敢て甚だしく老いたりとは謂はれざるも前途は必ずしも長しとは云へない。宜しく其の分に應じ、人生の秋半ばならんとするの自己に視て、善處すべきである。人生の秋半ばならんとする者の任務は自ら明かである。

進んで取るべくんば取り、退いて守るべくんば守り、行藏進退を天に任せ、斷じて躁急ではいけない。無理ではいけない。宜しく寸刻を惜んで讀書、思索に親しむと共に關係方面を通じて爲すべきのことを爲し、敢て自ら求め

ず、自ら售らず、自然の推移を靜觀しつゝ握むべき機は之を逸することなく、之を捉へて公に奉ずべきのみであらう。

五、然らば現在の關係方面と云へば、

（一）對支關係　東亞同文會理事、東亞振興會理事、同仁會評議員。

（二）對南關係　南洋協會相談役、日蘭協會副會長、タイ協會、ヒリツピン協會各評議員、佛印對策協議會世話人。

（三）對中亞近東關係　アフガニスタン協會々長、日本イラン文化協會顧問、日土協會常務理事、日本エーメン協會評議員、日希協會評議員。

（四）對歐關係　日獨協會、日獨文化協會、日葡協會、日希協會。

（五）對中南米關係　日墨協會理事、日伯中央協會副會長、日秘協會評議員、日亞協會理事、日本ラテン、アメリカ中央會顧問。

（六）拓殖人口關係　人口問題研究會常務理事、人口問題研究所參與、日本拓殖協會評議員兼顧問。

（七）海軍關係　海軍協會評議員（紫色有功章を受く）

（八）國內關係　辛未同志會理事。

（九）國際關係　日本國際協會評議員、同經濟委員會委員。

（十）教育關係　八紘學園理事、海外植民學校長、東亞同文書院。

（十一）事業關係　昭和ゴム會社取締役、東洋拓殖常務顧問。

（十二）社交、文化及娛樂關係　日本クラブ、交詢社、工業クラブ、霞山會館、水曜クラブ、霞ケ關クラブ、學士會クラブ、熱海ゴルフクラブ、輕井澤ゴルフクラブ。

等々、多くは自己の經歷の示す通り海外關係にして、內地關係のものは殆んど絕無と云ふ可く、就中所謂新體制に入つてからは、翼贊會關係のものなく從つて其の方面とは殆んど沒交涉であり、興亞同盟の如きも自己の關係團體からは理事長や常務理事が顏を出す關係か、自分には申出でがない、之も時勢の變化であらう。只だ對南關係は第一線を引けるに拘はらず、矢張衆目の視る所、自分と南洋を不可分に考へるのは常識となつてゐる樣で、今春歸京以來各方面の引張りだことなり、舊知の友人等は久振りに面語すると「愈々君の時代となつたな？」と云ふのが常例の樣である。之は彼等の自分に對する認識の淺いにも據るのであらう。自分は實は支那に始まり、南洋より南米と擴がつたのであるが、世人は南洋の聲が高まるに伴ふて忽ち自分を思出すのであらう。之も天の聲であらう呵々斯くて自分は此等の關係を通じて善處すると共に、必要な場合、必要の處に進出すべく、又退いて耕すも亦可なりである。要するに自分は早や老境に入つたものである。身心の强健は依然たるも人生の秋半に在るものゝ心境に安住して今後に善斷善處すべきである。（昭和十六年八月二十六日妻孫東京に去り、二婢を遊山に送つて獨り山莊の午後を樂しみつゝ認之）

二十七、危機刻一刻と相迫る、用意はよいか

昨二十六日、第一補給圈の絕對確保の要、而して其れが卽ち南進の第一地步を築くことであり、聖業達成の順序

であることを述べたが、本日の東日紙上に在る通り英米の對日包圍陣が、北より東より西より將た南より迫りつゝあることの一端を示してゐる。而して蘇峰翁は、死中活を求むべく、活きんとすれば死の外はないと喝破されてゐる。自分は此の場合、絶對に焦躁を排し短慮を戒め、孫子の所謂彼を知り己を知るに力めて百戰百勝の機を握るべしとすると同時に、速に擧國一致の體制を如實に實現して、「サア、コイ」の態度を整へることが第一義であると考へとる。（八月二十七日午後一時四十三分、山莊にて認之）

二十八、鳥尾將軍と秋月翁と自分

曩に大道社の茶會席上、日露開戰前、朝鮮處分案を草するに當り、敎を鳥尾得庵將軍に請ひ、長白山控制の要を說かれたことを叙說したのであつたが、本日新着の某紙上に於て川島浪速翁の「大陸皇化の基本策」の中に「鳥尾將軍が長白山を中心とする大陸施設の政策に就て明治大帝に上奏せんとした「神武太平策」のことを述べ、長白山を中心として發祥せし滿鮮民族の祖神は一面、愛親覺羅家の祖先であり、之を神祇史學、民族學より研究する時は實に我が素盞嗚命、大國主命の神裔たること、卽ち滿鮮兩民族の祖神は皇太神を同祖と仰ぎ奉る出雲系の神裔で、現康德皇帝は其の支流に在ますことを確めた」とあり、それは兎に角にも康德皇帝が新京に皇太神を御奉齋遊さるゝことの意義深きを覺へしむるのみならず、川島翁が長白山に祭祀を必要せらるゝ所以をも洞察し得て、將軍の言の深遠なりしを想起するのである。

又「日本及日本人」九月號上「明治詩話」の中に、會津遺臣秋月胤永翁のことが載せてある。翁の有名な七言古詩「行無㆑與兮歸無㆑家。國破孤城雀鴉亂云々」の句は少年時代に自分等の愛誦したもので、その秋月翁と自分との面白い會見談がある。事は明治二十七年夏、海軍機關學校生徒たりし頃、孤劍短褐、武者修業の旅に出で、到る處天下の士を訪ふて志氣を煉磨したのであつたが、熊本では友人庄野義雄（同じく兵學校生徒）君の紹介で熊本第五高中敎授たる翁（其の時は七十二）を訪ふた。名刺を持參せなかつたので姓名を問かれた。そこで一枚の半紙大に足立雅二と大書して差し示した所、翁は衣襟を正して申さるには「貴公は長者に對するの禮を知らない。維新前大小藩主が江戸へ參勤更代をするに當り、途で相過ふ場合には御互に列を正し、槍馬を整へ名乘り合つて嚴肅其の物であつた。如何に明治の時代とは云へ、貴公の態度は何か」と云つて懇々少年の自分を戒飭されたことは四十餘年後の今日も眼前に髣髴たるの心地がする。其の秋月翁が維新後、節を屈して明治の朝廷に仕へて左院少議生となり、後罷めて退耕されたが、明治十三年又上京して東京大學、第一高中に歷職し、更に五高に轉ぜられたのであつた。二十八年歸鄉、三十二年に東京で歿した時は七十七歲であつたと云ふ。二十五年の十月、翁が生徒と共に行軍して薩に入り西鄉翁等舊知の墓を弔ふや舊を懷ふの餘

生不㆓相逢㆒死相弔。足音能達㆓九泉㆒不。擧㆑鞭一笑敗餘卒。亦是行軍入㆓薩州㆒。

昔し會津の中老として三軍に將として干戈相見へたる者、彼等は墓木已に拱し、自己は白髮蒼顏で、自ら敗餘の卒と稱したのも無限の哀愁を喚るものがあるではないか。人の運命程測り難いものはない。而して自分が鳥尾將軍を熱海に叩いたのは明治三十六年冬卽ち三十九年前のことであり、秋月翁を訪ふたのは更に遠く四十八年前のことである。然かも世態幾變遷、吾は歐山米水、幾遊して今此の山莊の行雲流水に神心を長養しつゝある。之も人の一生である。時に朝來の晴天が暴かに曇つて雲氣四邊を壓し來つた、浴せざるべからず、乃ち筆を擱く。（八月二十

七日後五時天雨降らんとするの時認之）

二十九、松蔭吉田先生を憶ふて

陶山務氏の新著「吉田松蔭の精神」を讀んで、改めて其の人を懐ひ其の精神に感ずる所が多い。先生は短い三十年の生涯を通じて至誠一貫、生き貫き鬪い抜かれたのであつて、今も我等の心の中に先生は生きてゐる。六十五翁も三十歳の先生に負ふ所少くないのを憶ふ時、人壽の多少は問題でないことは先生も夙に之を喝破して居られる。先生が斷頭臺に導かるる途中で高吟されたと傳ふる。

吾今爲レ國死、死不レ負二君親一、悠々天地事、鑑照在二明神一、（安政六年十月二十七日口吟）

の五絶、其の前々日卽ち二十五日「留魂錄」を草された際に詠める

身はたとへ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂　　二十一回猛士

の如き、之を朗吟せば脈々として烈士の膓を抉ぐるものがある。先生の詩歌で後に貽れるもの數多いが、安政六年五月二十二日、野山の獄中に於て家兄杉梅太郎氏に寄せられた左の句に次韻して見た。梅太郎氏は人壽を全ふし、明治四十三年十一月八十三歳で老歿されたとのこと、兄弟各々其の道に從つて天分を盡くされたのである。

四窓客去夜沈沈、無限悲愁又復侵、萬里重傷父母志、卅年無レ益邦家心、

狂頑弟尙爲二豪語一、友愛兄强助二放唫一、情至鶺鴒難二說得一、棣花落盡綠陰深、

之に對し

寥廓乾坤落日沈、山莊秋動早涼侵、欲レ酬二君國一奈二素鬢一、唯剩二兒孫一有二赤心一、

伏虎幾年嵎角負、臥龍往日隴中唫、何時四海干戈息、生類齊霑雨露深、

と歌つて見た。卽賦固より體を成さざるも暫らく留めて先生を偲ぶのよすがとしたい。身先づ老いて唯だ一片赤子の心を餘すのみ、此の身果して何の處に向つてか棄てん、敢て求むるに非らず、靜かに身心を養つて天の命を俟たんのみ、寅二郎たるも人の運命なり、梅太郎たるも亦然り。（八月三十一日朝來の霖雨止まず、獨り檐滴の音を聽きつゝ之を記す時正に午前十時四十五分なり）

三十、荒尾東方齋先生のラヂオ・ドラマを聽いて

今日午後一時半から東方齋荒尾精先生のラヂオ・ドラマが名古屋から放送されるとのことに、折惡しく自家のラヂオに故障があつたので晋の宅に赴いて之を聽いた、秀も同伴である。

先生が漢口に梁山伯を築いた時代に話題を起し、浦敬一君の伊犂行を送るの處、當時の同志が懷抱せる支那改造の意見、ロシヤの南下を阻止するの要、諸豪を各地に派して人材を求め實情を察せしめる所、次で明治二十一年に一旦歸國せんとして井澤彥三郎と問答する邊、何れも大出來で、後ち日淸貿易硏究所設立に關する苦心を最後に、二十九年十月臺北にてペストに罹り僅か三十八歳の壯齡を以て「嗚呼、東洋が東洋が」と呼び續けつゝ客死する迄約三十分に亘り頗る要領よく演ぜられた。「彼の南洲翁宅に寄寓せる際、一夜翁御夫妻の雨漏りに關する寢物語に感激し、翌朝翁に對し謝辭を述べたる所、翁は筆を採つて「一貫唯々諾、從來鐵石肝」の一律を賦して與へらるる段」の如き、全く自分は直接先生より聽取した所が演題となつたもので、先生正傳は自分の「巨人荒尾精」の外には之れなく、最近に出た小山、佐藤兩君の先生傳の如きも拙著に負ふ所多いのであり、從つて今日のドラマも拙著

を經として組立てたので、此の挿話も出て來たのだと思ふ。何れにしても時至り、先生のことが喧傳されて一世の關心を唆る所、人生も亦妙なりであらう。

一昨秋、名古屋に於ける自分一席の先生談が動機となつて東方齋顯彰會の計畫を見たるに拘はらず、今猶實行の緒に就かないのは主將〇〇氏の會頭辭任等の故障に依るべきも、此の際力めて之が促進をせねばならないことを感ずる次第である。（八月三十一日午後三時ラヂオを聽き終り歸莊して認之）

最近に至り先生の生地枇杷島に於て生地記念碑建立の計畫進みつゝあり。（昭和十八年十二月追記）

聽二東方齋先生戯曲一不レ覺涙下卽賦述懷　八月三十一日

一篇戯曲易二銷魂一。迂直之謀耳底存。四十七年蹤似レ夢。若王子畔錦楓村。

三十一、間宮林藏の事蹟に伴ふ所感

佐々木千之なる人の新著「間宮林藏」を通讀した。彼が失意の裏に六十五年の生涯を閉ぢたことを知るに及んで一言を記したい心地がする。彼は五十餘にして已に逆境に入り遂に大に其の能力を發揮することなくして窮巷に陋居した。卽ち時代が此の北方探檢家を生み、そうして時代がこの探檢家を葬り去つたが、日露干戈を交ゆるに至つた明治三十七年の四月に、その偉績が酬いられて正五位を贈られた。然し斯る御恩典は毫も彼の期待した所ではなからう。彼は只だ彼の志の向ふ所、北邊の警を叫んで國家に盡くした丈のことであらうが、後人をして彼を想はしむるの榮譽でなければならない。豹は死して皮を留め、人は死して名を留むと云ふ眞に然りである。

此處で思ひ浮べるのは彼れ死する年正に六十五、丁度自分も今日彼と同年となつた。幸に身心共に强健で各方面に關係し何かの御役に立ちつゝあることは仕合であるが、自分も彼と同じく海外發展の一パイオニアである。開拓者である。而して皇國當面の難關を打開し得れば兎に角、然らざる限り南洋、南米各地に蒔いた種が中途にして枯れるかも知れない。卽ち時代が自分の蒔いた種を長生せしめないかも知れない。之も時代の流れであらう。然し皇國の運命を信じ、其の將來を期待する限り、必ずや遲かれ早やかれ、實を結ぶの秋がある。其の時の到來が遲くば遲い丈け其の結實も亦大なるべきを信じて疑はない。一昨日以來「吉田松蔭」を想ひ、又間宮林藏を想ふて、自己の胸中に去來するは益々初一念に邁進し、興亞一路に直前して悔ひざることである。

左るにても頭を回らして自己の親炙した先輩を念ふに、明治三十年シベリヤ行を共にして川上大將は五十六の壯歲で夭折されたのを初めとし、兒玉大將の同じく五十六、伊藤公の六十八、明石大將の五十六、松石中將の五十七と云ふが如く、先輩知友の多くは六十前後で此の世を去づたものが多いのに、自己は幸に六十五となつて猶ほ壯心の勃々たるものあるは天の命に依るものと云ふべく、天の命を俟ち天の命に恭順して一路奉公の道に直進するの外ないことを想ふのである。偶々間宮英宗が窮巷に其の尊き生涯を終へたのが、自分と同庚の年であつたことを知つて此記を綴り置く次第である。（九月一日正午夜來の雨止んで微風庭樹を拂ふの時認之）

三十二、先哲の壽命を稽へて自己を省みる

小閑に松田某編「皇朝賢哲遺訓」なる小著を繙いて彼等二十賢哲の壽命を按ずるに六十五を限度として以上十一以下九、而して自分は今六十五を算するに至つた。偶然にも二十賢哲の略々半ばに攀ぢたのである。

六十五以上のもの

澁澤青淵九十二、貝原益軒八十五、德川家康七十五、熊澤蕃山七十三、白川樂翁七十二、伊達政宗七十、二宮尊德七十、福澤諭吉六十八、小林一茶六十五、小早川隆景六十五。(十一人)

六十五以下のもの

山鹿素行六十四、荻生徂徠六十三、林子平五十六、佐久間象山五十四、山岡鐵舟五十三、西鄕南洲五十一、加藤清正五十、中江藤樹四十一、吉田松陰三十。(九人)

中、佐久間、西鄕、吉田の三哲は非命に斃れたのであるから之を除けば十七賢哲の中、年齡よりせば自分は第十一位に上つてゐるのである。然かも今や國家は前古未曾有の非常時に際會してゐる。宜しく先哲の跡を追ひ全身全靈を擧げて我が皇我が國に捧ぐべきであることは云ふ迄もないが、さて男子の出處進退には自ら機あり、能く先哲の蹤を顧み最善の途を歩まねばならない。之に就て先哲の遺訓は我等に訓ゆる所少からずである。

之を思ひ付きの儘に順序なく掲げて見ると

蕃山の所謂　一、仁者の心動きなきこと大山の如し、無慾なるが故に靜かなり。一、智者の心、留滯なきこと流水の如し、穴に滿ち低きに就きて終に四海に達す。一、名聞深ければ誠少し、利慾厚ければ義を知らず。

南洲の所謂　人を相手とせず、天を相手とせよ。天を相手として己を盡くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

青淵の所謂　益友を近づけ損友を遠ざけ、苟くも己に諂ふ者を友とすべからず。

政宗の所謂　元來客の身分なれば好嫌は申されまじ、今日の行を送り、子孫兄弟に能く挨拶して娑婆の御暇申すがよし。

家康の所謂　人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思へば不足なし堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。

淡窓の所謂　余に大病三あり、曰く懶惰、曰く畏怯、曰く吝嗇、此の三は同出にして異名、もし攻めて其の一を破らば則ち二つもの自ら破れん。

福澤の所謂　一、人に交るには信を以てすべし、己、人を信じて人も亦己を信ず、人々相信じて始めて自他の獨立自尊を實にするを得べし。一、日本國民は男女を問はず、國の獨立自尊を維持するが爲めに生命財產を賭して敵國と戰ふの義務あるを忘るべからず。

樂翁の所謂　一、寧靜、是れ養心の第一法。一、謹嚴、是れ保身の第一法。一、讀書、是れ廣智の第一法。一、勤儉、是れ治生の第一法。一、令容、是れ待人の第一法。一、愼交、是れ遠害の第一法。一、安詳、是れ應事の第一法。一、知足、是れ享樂の第一法。一、存厚、是れ招福の第一法。一、寡慾、是れ延壽の第一法。

鐵舟の所謂　腹を立つは道にあらず候。

松陰の所謂　士規七則は誰れでも暗誦してゐる所。

彼等先哲の遺訓は今も猶、我等の體內に宿つてゐる。要はその實踐にあるのみ、實行にあるのみ、況んや齡六十五となつて先哲を想ふの秋、自ら慚汗背を浸すを覺ゆるのである。力めざるべけんや、力めて倦まなければ、聖賢攀ぢ難きに非ずである。(九月二日午前十一時、宿雨晴れ陽光燦々として庭樹を照らすの處認之)

附――轉じて自分の先輩知友に見る。

大隈侯の九十一、森村翁の八十二は別として伊藤公は六十八、目賀田男は七十、鶴原定吉氏は五十八、川上大將兒玉大將、明石大將は同じく五十六、松石中將は五十七、小學時代からの同窓で名を存するは一もなく、中學時代も早稻田時代も亦然りで、海軍時代の同志は將校、機關を合せて三十八名の中、現存せるは僅かに十四名で亡者二十四名に及んでゐる。又東亞同文會創立當時の近衞公始め、陸、池邊、平岡、江藤、佐藤、中西、宗方諸氏を始め牛込粱山泊時代の埴原、原口、沖、五十嵐、田野、高月其の他何れも他界して、今に存するもの指を屈するに堪へず、小幡、山川、大內、白岩等數輩に過ぎない。人事の變は恰かも過隙の駒の如く回望して悽愴の感なからずである。宜しく一日存すれば一日働くべしである。（九月二日後二時追記）

八十八、昭和十六年初秋、恰恰山莊隨錄　二片

一、臺灣經濟審議會委員の件

曩に八月三十日附を以て長谷川臺灣總督より近く臺灣工業並に南方國策樹立の爲め審議會設立の企畫あり、實現の場合には委員として渡臺方希望し來り居りたる處、十月初石井殖産局長、總督代理として來訪、委員就任の依賴あり、次で臺灣より委員委囑の來信あり、渡臺の手續を終へたる處、只今十五日附にて官制公布、正式委員任命の辭令ありたる旨打電ありたり。

リンジ　タイワンケイザ　イシンギ　カイカンセイ。ホンヒコウフセラレ。ド　ウジ　ニキカヲイイントシテナイガクヨリハツレイアリタルニツキ。ゴ　ホウス。ヨロシクゴ　ジ　ンリヨクヲコフ」タイワンソウトク、ハセガ　ワキヨシ

其の顏觸は本日新聞記載の通りなり。

依つて十月二十一日夜東京發二十二日神戸出帆の富士丸にて渡臺來る十一月六日基隆發大和丸にて歸京の豫定也（十月十五日認之）

同夜十時半に至つて更に總督より來電あり。愈々出張に決せり。

二、南方問題の顧問的地位に就くべく某閣僚の好意と其の經緯

近衞第三次內閣成立後、間もなく自分を南方問題の顧問的地位に祭り上げて其の協力を求むるがよいとの意見が舊知の閣僚や、其の他の上層部の間にチラホラ起りつゝあつたことは、樞密院〇〇〇の〇〇〇〇の言に依つても察知されたことであつた。特に〇〇側が自分に多少の期待を持ち〇〇は固より少壯〇〇部の間に自分を推さんとする空氣あり、〇〇〇〇の如き「南方問題に就ては貴下は第一人者なり。貴下の協力を望む」と明言されたことあり。〇〇〇〇相も亦同樣の口吻を洩されたこともあつた。斯くて一轉第三次近衞內閣となるや、〇〇が〇相に〇〇が〇相となり、而して〇〇〇が拔かれて〇相となるに至つて、此の問題が表面化するに至つたのである。たしか、九月〇〇日の日曜日に〇〇〇君を其の私邸に訪ふた際、談茲に及び君は「明後〇〇日の閣議の際、之を關係閣僚に持ち出すに付き君も其の場合には、有無を言はず、承諾すべし」とのことであつた。斯くて〇〇日の夜

十時頃、同君より電話にて「本朝閣議の際、先づ〇〇〇相に持ち出した所、直に贊成したるを以て、次で〇〇〇相と語りたるに〇相も之に贊成し、〇〇省に於て如何に取扱ふかを研究すべしとのことであつたから、事務的の取扱に就て誰か懇意な者に細目の點を相談しては」とのことであつた。依つて第三次内閣成立後に〇〇代理であり、此の間の消息に多少通ずる所ある〇〇局長に打明けて置き、〇〇日正午からの工業クラブの〇相招待會に出席して〇相と相語るべく、豫じめ〇相と打合せ、同日午餐會を終ゆるや、〇相の自動車に同乘して閣議席上に於ける〇〇兩相の此の問題に關する意見交換の詳細を聞取し、更に〇相官邸に入つて對坐、其の餘を盡くした際、〇相曰く「自分も首相の懇請已み難く〇相の椅子を引受けたのである。此の非常時局に一身を拋つて奉公するは、臣子の分である。君は南方の權威者である。南方問題の重要なる今日、我々に協力するは當然である。斷じて辭する勿れ」と云ふのであつた。

斯くて自分は〇〇〇相からの意志表示を靜かに待つてゐる。他面に〇〇局長に就て側聞するに局長曰く「人事課にて取調べた所、あなたには昨年四月〇〇〇相時代に發給された〇〇〇省囑託の辭令があつて今に有効である。而して〇〇顧問と云ふのは官制上に定められてゐて、あなたを此の官制に依る〇〇顧問とすることは當らない。南方問題に關する顧問と云ふ地位に御願ひするのであるから、囑託の辭令を活用して〇〇から改めて之を御願ひする形式を取るがよろしい。それで左樣に取扱ふこととしたい。〇〇とも相談しました。又〇〇にも異議がないから、すぐ其の手續を取る」とのことであつたが、其の後、局長からの電話に「此の際〇〇から改めて依賴狀を出すの煩を取らず、直接〇〇が面接して之を御依賴する樣にしてもよいと思ふ」とのことであつた。自分としては形式は左したる問題でなく、〇相の眞意を正せばよいと考へてゐたが、十月に入つて九日の朝、〇〇局長より電話あり、「〇〇〇〇と自分三人鼎座の上、相談の結果、取り敢へず〇〇から君に直接面會して御依賴することとなつた。〇〇とは〇〇の都合つき次第面會ありたい」とのことで、翌々日の後二時〇〇〇〇と會見した處、〇〇曰く「〇〇からあなたに依賴狀を差出すべしとの意見もあつたが、先日〇〇とも打合せた上、直接あなたに口頭で御願ひすることになりました。先輩に對し改めての辭令もどうかと思ふのみでなく、依賴狀を出すが如きも禮を失する嫌ひがあるので、〇〇の御意向を受けて玆にあなたに御願ひする次第である」とのことであつた。斯くて「自分が從來からの囑託の辭令を活用して南方問題に關する高等政策に就き進言し得る地位を得たのである」仍つて、越えて十三日早朝より活動を開始し、午前十一時に〇〇省に赴き〇〇〇〇を經て〇〇大臣に此の決定のことを傳へ、後二時〇〇省に〇〇相と會見約三十五分に亘り懇談、同三時半、〇〇省に〇〇少將、〇〇大佐を訪ふて同じく報告、特に南方出張の際は通譯一人を周旋されたき旨を依賴し、五時〇相を〇〇省に訪ひ約一時間懇談し、重て〇相の決意のある所をも聽取し、十四日、早朝芳澤佛印大使と會見して意見を交換し、午後二時〇〇省に大臣を訪ひたるも不在の爲め〇〇秘書官並に〇〇局長を訪ふて大臣への傳達を托し〇〇〇局長官と會見して近衞首相に報告方を依賴した。斯くて第三次内閣成立直後から話頭に上つたらしい。自己の南方問題に關する政府へ協力するの途が開かれたのであつた。

一方臺灣よりは兩回の電報にて渡臺を依賴し來るあり、昨日より三日の休暇續きの秋晴を利用して高原の秋色を探るべく、昨朝離京、此の山莊に入つたが、明けて本朝の新聞に依つて、近衞内閣總辭職のニュースが出た、去る日〇相との會談並に四邊の空氣に依つて局面打開の爲めには總辭職の外なきを豫感されてゐたが、玆に事實となつ

たのである。此の收拾如何。後報を待つの外はない。昨入山の際に道元禪師の山の一絕に次して

又探秋色上高山。翠壁紅楓一面山。不敢學永平老衲。人間至樂在居山。

禪師の原韻

古佛修行多在山。春秋冬夏亦居山。永平欲慕古蹤跡。十二時中常在山。

（昭和十六年十月十七日十時半、恰々山莊にて燦々たる陽光の紅楓を照せる處に認之）

八十九、昭和十六、十七、歳晚年首の所感　二片

一、歳晚、昭和十五年の今月今日

去年の今月今日は朝七時バタビヤ飛行場を立つてスラバヤに向つた日である。「南進の心構へ」參照。九時半にスマランに着き、笹村正金支配人の出迎を受け直に建源本社に社長黄中涵君を訪ふて、傾談二時間、日支聯結の要と在瓜華僑の認識を需めた後、ホテルに午食し、一路四十「キロ」を馳せて高原に高橋農園を訪ひ、其處に一泊して除夜を送り、主人の手厚き待遇に異鄉に在るの思を忘れて、明くれば本年（十六年）正月元旦農園を後に再び飛行機に依つてバタビヤに歸り、二日朝九時、バインテンゾルグに於ける蘭印總督との會見となつたのであつた。

正月十二日、バタビヤを立ち、スマトラ、英領馬來、タイ、佛印を經て臺灣に立寄り東京に歸つたのは二月十一日のことで、爾來匆々十ケ月餘、今、歳晚に臨んで感慨の新なるものがある。

昨三十日、獨り一婢を伴つて海莊に入り、夜に入つて十三夜の寒月が中天に懸り凜として劍に似たものがある。皇軍が千里の外に馳驅して、身を皇に獻じ、百戰百勝の歡聲、闔國に滿つるを想ふては、席に安んぜざるものあるも、天恩の我を江湖に放たるるは亦聖世の惠みである。二句あり。

天恩許我老江湖。晚入海莊淸夜娛。射闖寒光凜似劍。自欣胸裡一塵無。

又

去年今日栖灣飛。說破渠頭心莫違。自笑飛機曠千里。今年今日濯征衣。

午食後、後山に登つて久振りにゴルフを試みつゝ大海を眼下に臨み、又々皇軍の太平洋征壓の苦心を偲び、歸つて錦浦に杖を曳いて、乾坤に獨りの我ありの境地に浸る。日高くして烟霞漸く散じ、白鷺の一雙、水を掠めて飛ぶを見る。

曳杖長堤坐釣磯。乾坤此處謝塵機。日高洋上殘霞散。白鷺一雙掠水飛。

日暮海莊に歸り一浴して餐を採り、携帶の岡倉天心翁著「東洋の理想」を讀み、深更に及ぶ、時に蕭風颯々として聲あり、切りに圖南の雄心を鼓舞するが如し。（昭和十六年十二月三十一日後九時息心海莊にて認之）

二、年　首

大東亞戰爭の緖戰に我が海陸將士は有史未曾有の赫々たる武勳を立て、一億臣民感激歡呼の中に十七壬午の元春を迎へた。自分は暮れの三十日俗塵を避けて此海莊に入り昨三十一日には後山に登つて豪宕の氣を養ひ、今日は二階の溫室に陣取つて、朝は岡倉天心の「東洋の理想」を繙いたり、新聞に目を曝らしたり、詩作に耽りつゝ刻を移

したのである。

陽光は燗燦として玻璃窓を射、風亦歇んで眼前遠く無限に連る大海を俯瞰し、又近く梅花の兩三點香の動く處、小禽の囀々として南枝に啼くの邊り、全くの別乾坤であつて、今更に皇恩の廣大無邊と我が前線將兵に頭が下るのである。乃ち筆を執つて元旦の規箴を草せんとす。

イ、心　戒

一、我れ來る二月を以て滿六十五歳を迎ふ。宜しく一日一刻を倦怠せず、只管らに向上の一路を辿るべし。

一、斷じて物を逐はず、物吾を逐ふや否やは之を天に委すべく、自ら求むべきに非らず。

一、南方經略は三十餘年一貫の素志なり、此の時運に際會す。宜しく精進努力、應分の貢献を爲すべし。

一、之が爲めには冗事を省き、冗費を愼しみ、心力を必要缺く可からざるの方面に致す可し。

一、時局の推移に依つて出動の機あらば敢て之を辭せざるの覺悟ある可し。

一、然かも人生の秋に立つ者の分を守り、力めて後進を誘導し、又言を立て德を立てて後世を補益すべし。

ロ、處　理

一、本年正月中に永見君著す所の「興亞一路井上雅二」發行を見るべく、以て同憂後進の批判と啓蒙に補あらば幸なり。

一、〇〇方面の慫慂もあり「論策集」の編纂公表を爲さんとす。

一、大戰の進捗に伴ふ南方工作には事情の許す限り之に關與するを當然の責任なりと信じて、あらゆる機會に國策の推進に當る可し。

一、民族政策研究所事業に一段の努力を拂ふ可し。

ハ、家　事

一、年を經るに從つて納税、物價騰貴、關係範圍擴大等の關係より支出多く、而かも收入増加の途は漸く尠く、從つて收支の平衡を缺くの虞れあり、宜しく前記の通り冗費を省き生計を節し、有餘を公に奉じ又後に貽すべし。

一、家妻益々健在に、全身全靈を其の職域に捧げ、長男は獨逸に在つて同じく其の業務に力め、嫁は二兒を擁して、忠實克く內を守つて吾等夫妻をして後顧の憂なからしめつゝあるは吾家の至幸至福なり。嘗夫妻並に杉田夫妻其の幼兒共に異狀なきも幸なり。

一、鄕里留守宅も輝雄一家の努力に依り異狀なく運行を見つゝあるも亦幸なり。

一、以上の如く家庭の事情は順調にして吾等夫妻、外に出でて公に奉じ得るは何よりなり。

書して玆に至り、日漸く西嶺に沒して、東海の暮靄遠くより來り、庭前の枯葉は微風に搖き、小禽の更に庭樹を繞つて鳴くあり、梅花の香と松樟の節と共に野人の心懷を淸且つ勁ならしむるものあり。元旦の偶成二首を錄して筆を擱く。

元　旦

同　其二

燗燦陽光風斂レ威、崔巍高閣晝封レ扉、簷梅且喜迎レ吾笑、乃曳ニ孤筇一出ニ海圻一、

開レ歴韶光滿ニ九衢一、米英當レ屠蔣當レ誅、展レ箋呵レ筆奔ニ龍虺一、吾不レ逐レ物物逐レ吾、

（昭和十七年壬午元旦、午後四時半、息心海莊にて認之）

夜に入つて十五夜の寒月、大海を照らして萬里遠征を想ふの情に堪へず、即賦して懐を遣る。

一死唯存ニ報國忠一、東征西伐靖ニ宸衷一、海莊今夜皎皎月、同照平洋萬里空、（未定稿）

九十、昭和十七年初春隨感　九片

一、名古屋の一日

名古屋新聞主幹森一兵君より南方研究所を設けるに付、特に其の發會式に參加して一場の講話を願度旨の依頼あり、二十六日夜十時三十五分、鳥羽行の列車に搭じ二十七日朝六時〇分着名、出迎の同社社會部長伊東博君、新興亞會の村田直治常務理事、同佐々木登一郎常任監事等の出迎を受け、兼ての豫定に從つて拂曉先づ豐國神社に詣でた。天未だ明けず、鳥居も社殿も薄霧の中に包まれ寒氣亦激しく跪坐して戰勝を祝し今後の加護を祈つたのであつた。

拂曉神前跪拜長、乾坤凉爽氣如レ霜、太閤地下當ニ微笑一、今日皇威掩ニ八荒一、

七時觀光ホテル第五二六號室に入り一行と共に朝食し十時より伊東君等の案内にて佐藤市長代理、相川知事、櫛淵師團長を歴訪、伊藤百貨店に立寄つて正午、「ホテル」に歸り十二時半開會の同心會に列す參會者四十餘名、食後約一時間に亘つて南方談を試み多數の人士と語り、二時豐田、奥野二氏の東導にて商工會議所に於ける名古屋貿易振興會主催の講話會に列し、奥野理事の紹介にて約一時間半に亘り講話し四時終了多數の人士と交驩し、四時五十分豐田氏に送られて「ホテル」に引返し五時半よりホテルにて開會の名古屋新聞主催の南方研究所發會式に臨み、終つて一同と晩餐を共にし森君の挨拶に對し七時半より九時迄來會者五十餘名に對し第三回目の南方談を爲し九時村田、伊藤二氏の案内にて新興亞會幹部の小宴に列し。理事長森越太郎中將、小村名古屋新聞主筆等と飲み且つ語り、村田、佐々木、伊藤等諸君に送られ、十時四十六分發急行に投じ、本朝六時四十分品川經由七時半目白に歸宅した。

早曉に豐國神社に詣でたるの快感に加ふるに中京の有力者に對し一日三回に亘つて南方談を試みたるは私の過去の經驗が彼等の要求となつたものであらうが、私としても頗る愉快であつた。

名古屋の一日は昨今の生活の縮圖であるが、身幸に健にして人に盡くし先輩に酬ゆるを得るは望外の仕合である。丁度臺北に於ける荒尾先生建碑事業が去十九日に發起人會を開くとの報あり、必ずや其の成功を見ることを翹望してゐるが、本件は同心會に於ても之に言及し、且つ可成早目に實現を希望してゐる次第也。（昭和十七年正月二十四日後二時半、日本クラブにて認之）

二、今日此頃の忙しさ

大東亞戰爭開始以來南方問題が擧國の關心事となり各方面の招請やら問合せの文やら南洋行の斡旋依頼やらにて多忙の時日を生活してゐる。試みに最近の講演依頼に見ても、

横濱復興倶樂部、陸軍大學、名古屋新聞、聖ルカ病院。

等連日に亘つて居り又、誰もが私の顔を見るや、直に忙がしいだらうとか、出掛けるかとかの挨拶であり、〇〇海軍大將、〇〇陸軍大將等の將星を始め議會人も財界人も新聞人も「君は蘭印總督だらう」とか「南方總督だらう」とかと云ふ様な始末である。正しく私の多年の南方關係が萬人をして斯く叫ばしむるものなるべく顧みて微苦笑の外はない。

〇〇側からの意向も傳達され、〇〇側からの聲もあり、何等か話題となつてゐるだらうが、已に〇〇〇〇〇君が〇〇に、〇〇〇君が〇〇〇〇に赴くとの說あり、〇〇〇〇君も〇〇を辭して南方要職に就くとのこと、而して自分に對しては何等具體的の交涉なし、或は世上の噂に過ぎずして止むやも知れざるも、若し天の命あらば敢て最後の奉公を辭せざる積りなり。昨今の多忙を顧みて「南方と自己」を想ふて之を記す次第也。

畝傍書房の依賴に依る「南洋開拓を語る」の執筆も〇〇君の助力にて追々進捗しつゝあれば本月中に第一編を了して之を梓に附し二月中頃迄に殘餘を全部交附して三月初には公刊のこととする豫定也。

因に昨年九月より校正に附しつゝある「興亞一路井上雅二」は二月中頃ならでは完了せざる由なり。（昭和十七年正月二十八日後三時日本クラブにて認之）

三、小川邸弔問の一刻

射山小川平吉老七十四歲を以て昨日逝去の報東亞同文會より電話あり又夕刊に依つて詳に承知した。

仍つて寸刻を割いて午後二時赤坂新坂町の邸に老を弔問したる後、嗣子一平君、未亡人始め女婿宮澤裕、齋藤樹兩君夫妻其の他と弔詞を交換し、約一時間靈前に侍した。其の間に平沼前首相、木戸內府等の弔問もあり老の同窓の織田萬博士とも談話した。

仰げば康有爲の小川老に贈れる額が壁間に揭げられてあり、支那關係の古きを偲ばしむるものがある。想へば自分と老との關係は固より東亞同文會に始まるので今に四十餘年、特に大正九年の總選擧に際しては老の切なる勸誘もあり、時の首相原敬先生の直接の勸說、中橋德五郎翁の推薦等にて遂に鄉里にて立候補したが、其の最初の動機は小川老である。鄉里よりは無競爭であるから是非出馬せよとのことであつたが、自分は容易に腰を揚げず、牧野伸顯男、田健治郎男、其の他の先輩等の勸說に加ふるに老の切望もあり遂に政友會公認候補として出馬したわけである。

老は又南洋協會創立に當りても自分の志を贊し最初より理事の一人として參加し、國勢院總裁任官の爲め之を辭せられたるを以て同會相談役に推したが、昭和十一年の事件にて之も辭せられたのである。

尤も同文會の方は再び相談役となり、時々面會の機會あつたが、遂に御無沙汰に終つた。要之、小川老と自分の關係は對支那對南洋關係に終始したと云つてよい。政黨時代には老は首相級の一に數へらるるに至つたが、末路の稍や蕭條たりしは氣の毒に堪へない所である。然し人生の行藏自ら命あり、必しも言ふに足らずである。老や嫣然として永久の眠に就いたであらう。邸を辭し日本クラブに立寄り寸閑に此の記を綴り置く。（昭和十七年二月六日後四時日本クラブにて認之）

四、研究所の一刻

大東亞戰爭以來、南方の問題が擧世の題目となり、自然私の身邊も一倍忙がしくなつた。試みに昨年十二月以來

關係を委囑された團體も十數に上り講演に會議に更に地方出張に維れ日も足らない。

又遇ふ人毎に「君は忙がしいだらう」「君はイツ出掛けるか」「君はスマトラ總督だらう」「君は蘭印總督だらう」抔と叫ばないものはない。軍部の長老も財界の人物も、はた市井の徒も等しく一致して私の出馬を期待せるやに見へる。

然し○○側の○○○が發表されても○○側の○○○が發表せられても私には何等の赤紙も來ない。而して知人は曰く、「イヤ、○○當局はどうしても井上さんを引張り出したい。○○側も○○位には井上さんを煩はしたくない。今少し統合的な總括的な地位に祭り上げたい」のだらうと云ひ、又或る舊知の情報は「君は對南方の第一人者じやけん、必ず天の指命を受くるであらう、自重すべしじや」と云ふ、何れにしても可なり。

私は實際、自分の力自ら足らず、學問まだ精しからざるを知つてゐる。出來る丈け時を得て學び且つ考へたいと云ふ念が近頃時々に起つて來る。今日も紀元の佳節で朝食後家族と共に宮城を遙拜した後、研究所の二階に引籠り第一生命の人と女子大入學希望の中國人に會見した外は終日引籠つて讀書と執筆に一日を消した。

何を讀んだか、曰く、白人の東洋侵略史、アジア民族運動史、世界の未開拓地抔である。斯くして、家居の樂しみを喫し得たのである。此の處淸淨、名利は固より到らず、榮辱も亦然りである。而して尤も喜ぶは身心共に健に家妻並に家族亦健にして何等の家庭的苦悶ないことである。陽一は遠く伯林に在るも壯健、職務に力め、家を守るの嫁も二人の孫もスク〳〵と生長しつゝあるのは何よりの樂しみであり、背夫妻も杉田夫妻も秀も亦然り、實に私の生活は多幸の生活である。

一般に期待する如く若し私に呼出しがあり、徵用があつて、其れが果して私の使命と信じ又爲し得ると信ずるならば、固より身命を抛つを辭せない覺悟は充分出來てゐる。然し世間普通にありふれた名聞の徒は共に伍するに足らない。無益のことは爲さない。自己の信念に從ふの外はない。斯くて一生を草野に埋めるのも亦本懷である。必ずや死して後に稀に世上に出るであらう。出なくとも固より差支へない。所謂地下千尺の底に埋むるは吾の素志でなければならない。

左るにても十九歲にして臺灣に航してより玆に四十七年、先輩知友の多くは鬼籍に入り、又地下に埋沒せしに、幸に身健に心亦剛、先人の跡を顯彰し後人を奮起せしめ得るは何等の至幸ぞや。（昭和十七年二月十一日紀元の佳節に五禱莊內の研究所にて認之）

五、研究所の一刻　其の二

去三月の月曜日より又多忙の生活に入つたが、風邪後の無理は禁物なので寸刻に偸んで家居し、家居せば研究所に入るを常としてゐる。

何んとなれば研究所の二階は二面玻璃窓で日光を吸收して暖氣一層であるからである。今日も後四時半早く歸宅して五時よりの一刻を消した。正に心の落着きを感ずる。情報に依れば、

兒玉南協會長はジャバに赴き、林久次郎理事長も同伴、スマトラへは大塚惟精君が往くとのこと何れも御苦勞千萬である。

而して「君はなぜまだ出ないか」とは能く耳にする所であるが、常に申す通り自分の行藏進退は唯天惟れ隨ふで

あつて何等介意するに値しないが、此非常時局に於ては不肖ながら涓滴の誠を致すの熱意丈は持つてゐる。而かも紛々たる現狀では時機未到と云へる。

〇〇大將と〇〇〇相との會談、〇〇〇〇兩方面の期待、又昨日〇〇〇相、〇〇〇〇〇〇〇〇の言に依つても察し得る。自分は敢て時流を逐ふことをしないが、國家百年の大計を實踐するには誰人も當然身命を捨つるを辭せないのであるが、要は時を得るに在るのみ。

研究所に入つて神氣澄清、片塵なし、此生を不滅不死の境地に進めんことこそ第一に願はしけれ。（三月六日後六時半研究室にて認之）

六、九軍神に泣く

三月六日の放送は海軍九軍神の眞珠灣に於ける散華の狀を發表し翌七日の新聞は一齊に此の記事を掲げ之を讀んで不覺、感淚の落つるを禁じ難いものがあつた。

眞に淡々として死地に就ける年若き勇士には頭が下がるのである。記して後に傳へんとす。

七、蘭印全面降伏

蘭印交渉三十餘年の僕として日蘭協會副會長としての僕として最も先づ愉快を感ずるは今回の蘭印全面的降伏であり、彼の山、此の水、悉く視野に入つて感は新なるのみでなく、一方頑迷なる彼等の皇軍の實力を知らず英米に躍らされた憐な姿は同情に堪へない。總督スタークンブルグ今奈何、瓜哇銀行總裁ウキヒヘルス何處に在るや。

此日、ジャバ行の兒玉伯壯行會に臨んで茲に一言及んだのであつた。（三月十一日研究室にて）

八、昨今の所感

皇軍の赫々たる戰果に伴ふて如何に建設すべきかが重大問題で一言にして云へば至難であると云ふことである。

我等國民の任務は建設の萬全を期するに在る。此の意味に於て相當の憂を抱くは獨り自分のみではない。

自己の信條として敢て求めざるの境地に安住せりと雖も、此の重大時局に在つて帝國の臣民たるもの何れも身心を捧げて國家に酬ゐなければならない。況んや南方建國に精進したる自分とし、一層其の責任の重大を感ずるのである。

曩に近衞第三次内閣時代に〇〇〇相の提唱に依つて對南方相談相手となり、又此の間各團體の顧問となり、最近には〇〇に於ても相談相手の一人とするの申出あり、斯くて自己の責任の重大を感ずると共に昨今續々として徵用せらる〇〇〇〇の人々を瞥見して人なしとの歎を發するは獨り我等のみではないであらう。

此の秋に至つて自己の任務は一層の重大性あるを想ふのである。

本日も兒玉伯は其の南行の承諾の理由として一に伊藤公の奉公、二に先代の南進の抱負を擧げたが全く然るべし而して自分も乾坤一布衣として此の時局丈けには挺身奉公すべきものと信じてゐる。

然かも第一は第一線に於て總督又は最高顧問として統治に與かるに在り、第二には中央に在つて官民を誘導して大局に誤なからしむるに在り、何れにしても適處に任ずるが必要であり、售らんかなは固より自分のことでない。

暫らく世の推移と輿論の動向を正視し靜思して之に善處せんのみ。

偶々寸閑を獲て研究室に入り、蘭印降服に伴ふ施設の重要性を感じ玆に所懷の一端を披瀝する次第である。（三

月十一日夕刻研究室に於て認之）

九、靜居の一日

今日は午後四時から工業クラブで鄕男の追悼會を催さるるので出席の豫定であつたが眼前に差迫つた書き物もあり、交詢社の午餐會はどうでもよいので、旁々一日の靜居を樂しむこととした。

七時起床八時研究室に入つて直に申告書の作製や其の他の執筆を爲し午後四時に終つた。

此の間に東拓の望月、東亞興業の內田、刀江の鎌田君等に電話して所辨し、又東京商工會議所、昭和ゴム松本專務等の電話に接した。會議所よりは川口會議所の集會に出席の依賴であり、松本君よりは陸軍側よりの依賴の件であり、又住友古田總領事祕書の電話は古田君と會見の時日の件であり、其れ〳〵應答した。

一方秀より女子大入學志望者の件に付電話あり、又刀江書院、凸版常務山田君よりの電話は拙傳印刷の件であつた。斯の如く彼我數度の電話往復あり。

午食後、〇〇局の要求に依る履歷書二通の作製に時を費やし彼れ此れ後三時となつた。

京都より佐藤尙武君の來電に接した曰く、

貴電多謝、切に御加餐を祈る　　佐藤尙武

昨日車中宛、拙電に對する返電なり、同君は駐ソ大使として一昨朝赴任の途に就かれたもの。

斯くて後四時に至つて漸く本朝の新聞に目を通すの時間を獲た。然し靜居して一日を明朗に過ごし得るは亦天の恩惠と云ふ可く、今後は雜用とか、どうでもよい用事は可成之を省いて靜居するは、一は以て精神を養ひ、一は以て身體の保健に益あるを以て、許す限り靜居の機を得たきもの也。

本日の發信、秋平師、鄕里、住友吉田、大阪荻野、權、門馬、其の他約十餘通、來信亦之に適ふ。

大詔奉戴日偶成

不レ滅ニ驕胡一不レ洗レ兵。昭南島是我長城。閒窓此夕無ニ塵到一。門外時聞萬歲聲。　（三月十三日研究室にて）

九十一、昭和十七年春五籌莊隨想　七片

一、興亞の先覺と山田良政君

東方齋荒尾先生が興亞の先覺であつたことは、世の普く知る所であるが、舊友山田良政君が孫文に依つて「興亞の先覺」なる稱辭を呈せられてから昨年汪精衞の來朝に當り、山田君の名が喧傳せられ、今更の如く同君を偲ぶものが出て來た。周化人の此の一文も亦然りで、明治二十八年冬より二十九年春にかけて臺灣の蕃界で苦樂を共にし又明治三十一年秋、戊戌政變に際し同君と共に王照を拉して難を北京より東都に避けしめたこと抔が思ひ出される。

東方齋先生は三十八の若さで急逝され、山田君亦不幸惠州の變に孫文の爲め身を犧牲にした。古より先覺者は多く夭折するか又は生前に志を得なかつた者が多い。

自分の如き早や六十五を越えて猶、世に在るものは江湖に埋沒するが普通である。然かも南方問題の起つてから自分に期待するもの漸く多く。之も時勢の然らしむる所で一笑の外はないが、山田君を念ふと共に自分の努力未だ

足らざるを愧づる次第である。時は正に大難局、而かも世界的轉廻期に際し、一日も永く存在して自己の身命を國家に捧ぐべきであつて、之を惟へば自重自愛せざるを得ない。

去る二月中頃の風邪に起因して大原博士の診察を受け、之が動機となつて十餘年放任の姿に在つた糖尿の試験を爲すこととなつた。四月八日と本朝の二回に亘つて帝大阪口内科に就いて糖尿の検診を仰いだ。

其の結果、普通人よりも糖尿多く且つ血糖も普通人より多い。患者としては輕度でないが强度でもなし、先づ中度といふ所であるそうである。

斯くては矢張り、食療養に依つて糖分の減退を期するを賢明とする。時局の推移を案ずれば、早晩挺身南方に赴くの必要あるからである。敢へて求めざるも國家の重大事となり自分を國家が要求するに於ては挺身の外はないからである。（昭和十七年四月十一日夕刻五疇莊にて認之）

二、〇〇省事務囑託の件

昨十六年九月、時の〇相〇〇〇中將の提議に依つて南方問題の一權威として〇〇の相談相手となることとなり、〇〇省囑託の名を利用して時の〇相〇〇大將より挨拶を受けたが、去る三月中頃〇〇に勤務せる〇〇長官より〇〇の意を傳へ又〇相の意向も側聞してゐたが、無給の囑託として南方問題に參劃願度旨の〇〇局の希望あり。之を受諾したる處、次いで履歴書二通提出せよとの當局よりの來信あり、同十五日附にて返答したる處去る四月八日附を以て人事局長の名を以て

〇〇省事務を囑託す

の指令あり。一山百文、十把一束の辭令と察せらるゝも、要は之に依つて多少の貢献を時局に爲し得れば則ち君恩に答ふるの一助と相成るべく。之を承諾して置いた。

要は活用の奈何に在る。〇〇が能く自分等を利用し得るや奈何は、後の推移に待つの外はない。〇〇側の意向は已に知られる。南方建設に直に挺身し得るの時機となり、又其の委囑を蒙るの秋となれば、自分の南行も問題となるのであらう。要は自分の出なければならない幕となれば出るの外はないのであつて、其の幕が來なければ中央に在つて微力を大局の維持と進展に致すべきである。

偶々〇〇省の辭令を受けて一言を書す次第である。（十七年四月十一日認之）

三、開山堂寄進と井上權現の新築

去る三月末の歸郷は、二年振りの歸郷で中祖百六十年、亡祖母三十三年、亡父十七年、亡母十三年の年忌を營むの外、菩提寺たる黒井興禪寺の開山堂寄進に伴ふ檢分と井上權現の新築、之に伴ふ祭祀も其の重なる用務であつた。

井上一雄君の死去に依り、興禪寺の壇家總代となつた自分は、兼々住職秋平德乘師より相談あり、開山大師を祀る開山堂の寄進を發念したのである。時節柄手不足の爲め工事未だ半なるも、二間に四間の白壁コンクリート作りの堅固なる建物で本年夏頃には完成すべく、其の工費は約三千數百圓の見込である。

又自宅背後の小丘、井上山に奉祀せる井上權現は安政三年（八十七年前）の改築に係りしものが八十七年の風霜を経へて半は朽ち廢れてゐたるを改築し、三月二十八日に井上「まき」のものを集め、儒佛混合時代の制に隨ひ、秋平老師に讀經を依頼して祭祀をなし、翌二十九日は興禪寺に於て開山堂敷地を檢分すると共に親戚故舊二十餘名

を招きて法會を修したる後、午餐を共にして祖先の遺德を顯彰したのであつた。

興禪寺は、住職の手腕にも依るが、幸に基礎堅く、郡內屈指の名刹となつた。春日局の出生所たることは餘りに有名であり、又幾百年の歲月を經て世の變遷も滋く、近くは片山、荻野、山本等の有力者も多くは土地を離れられたに拘らず、我が井上本家が幸に此等の蹤を追はずして鄕里に嚴存して現在に至り、吾等兩人が多少の貢獻を國家に爲し、父祖の名を辱かしめず、又相當の後繼者を獲て今後に家門を持續し得るは、全く父祖の遺德善行の賜と云ふべく。此等を想ふて此の擧に出でたることを陽一始め自分等の後繼者が克く感得すべきである。

昭和十五年三月歸鄕作あり。

家　鄕　途　上

舊都雪色白方皚。西入二故鄕一春蕩駘。忠孝家風來二遠祖一。墳前幾拜掃二靑苔一。

歸　盧　翌　晚

雪埋二千圃一未二鋤耘一。四方連山滯二宿雲一。晚入二我盧一窓不レ鎖。曉來鳥語枕頭聞。

忠孝の家風は遠祖より來り、墓前幾拜して靑苔を拂ふ時の氣持は、只だ感謝に滿つるのみである。又歸宅して奧座敷に熟睡して覺むれば、枕頭に鳥語を聞き、起きて中庭に出づれば母屋の戶も窓も鎖さずにゐることが判つた。正しく平和の徵象で、田園の純朴な且な淸澄な境遇が偲ばれるのである。此の氣持は歸鄕每に感ずるのである。乃ち今度の鄕里歸還に際しても同樣であつた。句あり。

歸　盧　　次二舊韻一

日暖中庭蘚色蒼。春來門外菜花黃。相傳三百有餘載。父祖遺風自溢レ鄕。

丁度中庭の苔蘚は、漸く蒼色を帶び、門外の畦圃には黃金色の菜花が滿開であり、一村能く治まるは父祖の遺風の致す所であるのは有り難い。(昭和十七年四月十七日認之)

四、昭和十七年三月の歸鄕

前項所載の如く、三月末一家を提げ歸鄕して祖先を追憶すると共に初春の數日を樂しく暮らした。

是より先、自分は二十四日の夜行にて東京を立ち、二十五日正午より大阪商工會議所內、南方經濟調査會の招きに應じて講話を試みたる後、同夜七時半黑井下車、林町長及留守宅の出迎を受けて直に歸宅第一夜の夢を結んだ。二十六日午前中、菅原實家の墓に謁し家兄夫妻並に村役場の重なるものと會し、約を履んで石生驛より乘車、折よく熊谷丑松君と同車し福知山にて又衣川梅之助君來會し、豐岡にて多田茂君其の他城崎郡敎育會の代表等と交驩し後四時、城崎溫泉下車、三木屋に投じた。

城崎溫泉は父祖の常宿で、就中自分が五、六歲の幼童の砌、井上祖母等と同宿したる際、祖母が誤つて土瓶を轉がしたのが自分の脚を火傷せしめるの因となつて永く「糞ばば」と呼んだことも早や六十年の昔となつて思出は盡きない。熊谷、多田、衣川、三友は共に當時南方開拓の苦心を共にしたるもの。

衣川は福知山自動車會社長に、多田は豐岡農學校長に、熊谷は多紀鄕里の村政に各々活躍しつゝあるの人、五十七、八歲より同五十二、三歲の中老となれり。樓を出でて背後の溫泉寺に詣で、返つて一浴して共に杯を傾け、談は滾々として盡きず。

城崎温泉與二南方同志一會飲

温泉寺下水施レ藍。三木樓邊翠醮レ嵐。竟夕團欒話題旺。皆言素志在二圖南一。

翌二十七日朝、四人同伴三木樓を出で途中玄武洞を一瞥して一時半豐岡町に着き町長の案内にて河畔の某亭に午食し、一時より第一國民學校講堂に於て郡教育會總會に約二時間に亘り長廣舌を試みた。聽衆三百餘名盛會也。驛頭に多田君夫妻並に郡教育代表と別れ、福知山に衣川、黒井に熊谷に別れて夕刻山田に歸宅せば二十六日夜行にて東京を立つた秀子始め嫁シナ子、孫勝彦、恒彦共に在り。同夜は輝雄一家等と快談し、二十八日午前中、井上權現の祭祀を終へ午後は柏原町長の招きに同町に赴き公會堂に有志二十餘名に講話し三友樓に夕食を共にして同夜歸宅した。

明くれば二十九日は早朝秋平老師等と墓前に祈願し、十一時興禪寺に於ける法營に臨み、一同と午餐を共にし父祖の遺風を慕ひ來會者の諸君と別れて後三時歸宅又一夜を平和に過ごしたのであつた。

明くれば三十日後一時半黒井發にて立ち、福知山經由、後四時半京都下車、出迎への足立、中田等諸君に拚し直に京都ホテルに入り、グリルにて夕食の後、自分は寺町佛教會に於ける新興亞會主催の講演會に列し約二時間の講話を爲し九時半歸館。

三十一日は朝九時發一行と先づ自動車を驅つて桃山御陵に參拜し大業完遂を祈願し石階の下で記念撮影し共より神后を祀る御香神社、豐國神社、妙法院門跡等に神后の雄圖や太閤の英風を慕ひ瓢亭に一同と會食し、後一時若王子畔に東方齋並に延年臺の跡を偲び二時約を履んで南禪寺畔に稻畑勝太郎翁の和樂園を訪ひ抹茶の饗を受け共より翁の東導にて園内を巡覽賞翫した。流石は國際人の布置ではある。句あり。

瑞龍山下玉龍奔、和樂園中笑談温、八十星霜人未レ老。凌雲意氣此翁存。

四時ホテルに引返し、六時より順市、シズヱ、二弟妹を招いて會食して舊を語り、十時半京都發の列車にて四月一日朝一週間の日程を終へたが久振りに家族的の樂みを樂んだことであつた。(昭和十七年四月十六日認之)

桃山御陵參拜の一家

ストツクホルム郊外と陽一

上海の杉田夫妻

駐日民國大使徐良君と一家

五、ローヅを憶ふ

去十一日福島日東紡績工場長廣川君（旅順工科學堂出身）に會見したる際、同君曰く「私は青年時代から、あなたを承知して居る。其れはあなたの譯述された「セシル、ローヅの私生涯」と云ふ本を通じてである。他の書物は、多く散逸しましたが、貴著は今も書棚に保存して居る」とのことであつた。仍つて其の本を頂戴したいと申せしに、早速自轉車で工場から社宅に歸り、其を持參された、看ると表紙の裏に

此の書は井上雅二氏が南方蒼霧の中に「ローヅ」たらん希望を以て譯述されたもので讀者心して之を見るべし

とあり、又裏面に

精神之力

と記してあつた。廣川君は三十年前の青年時代に、拙著を見て、多少の感化を受けられたものと思ふ。今や五十餘となつて、日東工場長として、千數百名を指揮して、産業の勇士となつてゐられるのである。

書を公にするの樂は、斯る未見の友を遠邇隨處に贏ち得ることとである。廣川君も其の一人である。

本日は、閑居の一週間目で、身體の樣子殆んど全快となつたが、日曜日の爲め終日靜居を樂み、午前より午後にかけて「詩と人と境」の第三卷を整理し、又其の序文抔を綴り、終つて濱田成雄なる人の著に係る「南阿開拓の偉人セシル、ローヅ」を再讀して見て、三十二年前自分が南亞細亞會社を創立し、ローヅに擬して南方開拓に精進したる當年を偲んだのであつた。

彼は三十七で、ケープタウン移住地の總督となり三十九で樞密顧問官の官を授けられ、ローデシヤを建設して四

十九で病死した。其の偉跡を想つて、自分の使命の猶、今後に存するを思はざるを得ないのであつた。彼の敵手たるクルーゲルは、彼と戰つて敗れ七十九で祖先の地和蘭で憤死した。想へば人生の遭遇は天のみ之を知る。只だ人間は人事を盡して天の命を待つのみ。一直使命に向つて突進するあるのみ。成敗利鈍は、之を天に委すべきのみ。

舊臘十二月八日の大詔に依つて、皇國の向ふ所は明かに示された。大東亞共榮圏の確立、アジヤ十億の解放は、我が大和民族の指導に依つてのみ達成し得る。此の未曾有の盛事に際會せる吾等皇國の臣民は、各々其の職域と天分に應じ、全力を傾けて事に從ふべきのみ。然かも進退行藏自ら機あり、深く藏して內、自らを養ひ時流に諛びず時勢に媚びず、正を踏み一路直進するあるのみ。此の間心境湛然、餘裕綽々たるものがある。況んや本年は、靜居の年と感ず、充分に身心を涵養して時を待つべきのみ、復た奚んぞ疑はん。（昭和十七年五月四日の休日、研究所樓上にて認之）

六、一身革新の秋

明治十年二月二十三日が誕生日とせば、本年二月二十三日で滿六十五歲の誕生を迎へたことになる。丁度本年二月十六日かに在東京私立高女教育會に招かれて茗溪會館にて講話した時は非常に寒かつた。暖房の設備がなかつたので寒を淩ぎつゝ約一時間半に亘る講話を試み、歸つて多少の發熱あるを探知し、閒居したが、二十二日には西下の約あり、正に出發せんとして偶々大原博士の來訪を受け、風邪の徵候ある限り旅行すべからずとの診斷を受け、急に名古屋行を中止し、獨り名古屋のみならず京都、大阪方面にも迷惑をかけた。

此の風邪は二、三日にて終りを告げたが、二十八日かの交詢社午餐會に於ける講演の約を果さんとして起床せんとしたるに突然目眩を感じて之も中止とした。其の後兩三日にて恢復し、爾來不相變の活動を續け、兵庫縣なり大阪なりの先約を果たし三月の末には夫妻嫁孫等を帶同して鄕里の墓を展し、井上權現の新築祭を爲したるを始め四月に入つても或は桐生に或は其の他の方面に、特に五月に入つて東北四縣への强行的旅行をも試みた。偶々飯坂溫泉の勝景に入神して同所に二泊したが、第二泊目の夜、十二時入浴して臥蓐し、十二日朝は未明に起きて神を自然に馳せ、同溫泉を出で、新潟に赴く車中、右胸に多少の疼痛を感じた。夕刻新潟市の大野屋旅館に入つて醫師の來診を乞へるに發熱三十七度四分、風邪との事、約に依り講演して同夜は早くも九時に就床して連日の睡眠不足を補ひ、翌十三日は又朝發、長驅して秋田に到り、同夜講演後八時半の列車にて引返し十四日朝九時歸京した。十二、十三兩日の右胸疼痛は大に緩和したが、更に十六日より徐民國大使と名古屋行の舊約があるので小松醫師の診斷を受けたが、右胸の疼痛は肋膜の前徵なり西下不可との斷定であつた。已むなく徐大使に其の旨を通じ新興亞會の岡少將監事に同大使と同行西下を依囑して其の責を塞いだが更に大原博士の來診に依り未だ肋膜と云ふ程度にはならないが、其の前徵なりとのことに外出を一切中止して今になつてゐる。幸に十五日夜以來、平熱となつて已むを得ざるの來客と接してゐるが、外出を止めて靜養してゐる。

却說、大原博士とも話したのであるが、生來六十有五年、世界を家としてマラリヤ以外曾て病氣らしい病氣をしたことがない。氣力も毫も壯年時と變らない。然かし身體が自然老境に入つたことは事實である。而して此の狀況となつた。卽ち一身革新の秋である。

海外に出遊、前後五十年、此の歳となつて身心不調を來すは生理上必至の經過であつて、此の際にこそ靜養して身體の保存に力め、其の身體を恢復して今後の世局に貢献するは、丁度國家の爲めにも民族永久の爲めにも必要であり義務である。幸にこの秋に於て出來る限り、靜養に力めるが第一義と信ず。仍て今後少くも半年位は身體の革新と更生を第一要義として其の規準の下に進退するに決心せり。

天は幸に自分にこの機會を與へられた。此の機會を充分に活用して妄動せず輕擧せないこととした。寔に有難い仕合である。世難は寧ろ今後に在り。而して之を擔當するの人極めて稀。自分の特に自重せざるべからざる所以を心銘すべし。（昭和十七年五月十八日後七時研究所樓上にて認之）

閒居　其の一

老來不レ免鬢毛衰。幹古心剛自致レ差。醫戒幸允二同臥境一。南窓日煖與レ孫嬉。

同　其の二

赫奕皇威照二四隣一。大東天地命維新。皇恩許レ我閒居地。好作二晴耕雨讀人一。

同　其の三

醫戒留レ吾門不レ開。鶯聲雨響入二詩媒一。年光如レ矢春將レ盡。馥郁籐香透レ牖來。

七、壬午は靜居の年

一昨々十八日「一身革新の秋」一篇を草したが、昨日は外出して松本樓に於ける陸軍關係の人士十數名と會し、自然座長に推されて今後の處置に就き相談し、來集者に竹井、飯泉二君と共に世話人として陸軍に出頭挨拶を爲すこととしたが、今日は早朝より永見七郎君の來訪を受けて「詩と人と境」第三卷の口授を爲し、又宇佐、門馬二君の來訪あり。各々〇〇〇部の意向を聽取する所あり。午後四時に至つて、宮本雄介大佐の來訪あり。同大佐は易學に造詣深く、昭和十三年に手相より自分の將來を豫斷する所あつた人、昨夏以來一年振りに相語る二時間に及んだのである。曰く、

一、竊かに貴下の運命を按ずるに、本年は出遊の秋に非らず。「興亞一路」二三五頁、（五）「滿五十八年の我」の一欄に在る通り、天を相手にして人を相手とせず、靜かに天運の循環に順應せられたきこと。

一、本年は外遊せば病氣其の他の故障に遭遇せられしならん。靜居がよし。

一、明年も自重せらるべき秋なり。自ら求めざるべし。

一、明後年卽ち六十八歳となつて飛躍の機至るべし。

一、時局は一、兩年後に困難を來すべし。貴下を煩はすの期必ず至るべし。

一、南方建設の第一人者たるは衆の認むる所、機會の來る迄は自重せらるべし。

云々とのことであつた。

今朝宇佐君は〇〇側並に〇〇側の意向を傳へ、門馬君も亦同斷なるのみならず、久振に來訪せし永見君も亦曰く先生はジーツとして居て下さい。北辰が中心となつて衆星之を繞るが如しです。敢て求めず敢て進まず天の命に依つて行動さるるがよいと。

永見君は曾て自分の傳記を草し、昨秋亦其の追加を爲して今度新に公版に附せられんとしてゐる。

大東亞戰爭の開始となつて今日に及んだ以上、先生の傳記に加筆すべきもの少なくなかつたのに惜しいことですとのことであつた。永見君の「興亞一路井上雅二」は漸く本月末に出版となつた。已に印刷に附してから半年の日月を經た。同君の言ふ如く、今日となつては更に加筆すべき點が多からう。之は再版の機に委するの外はない。何れにしても宮本君始め本日來訪の三人者の等しく言ふ所は一致してゐる。曰く、

一、自重すること。一、自ら求めざること。一、身心を長養すること。一、他日必ず雄飛の期あるべし。之が用意を爲すこと。

以上の數語に盡きる。自分も其の心を以て對處する積りである。

掲レ臂張レ胸吸二大空一。嘯レ風和レ雨立二冥濛一。世間識否人生妙。唯我獨尊在二箇中一。

（昭和十七年五月二十一日宮本君去つて研究室にて認之、時正に六時五十五分、暮靄遠くより到り、四隣寂たるの時）

九十二、昭和十七年晩春、息心海莊閒居　三想

一、郷里の二先輩たる田男と本郷大將を憶ふて自己に及ぶ

陸軍大將本郷房太郎氏は昭和六年三月二十日七十二歲を以て薨去され、男爵田健治郎氏は其の前年即ち昭和五年四月十六日七十六歲を以て他界された。相距る僅かに一ケ年弱にして私共は多年師事せる郷里の二先輩を失つたのである。昨日來の新聞に依つて議會に下し賜はりたる詔書を始め東條首相、賀屋藏相、東郷外相、東條陸相、島田海相の演説を精讀し、又新に成立せる文學報國會の使命に稽へ、正に世紀の大轉換機であり、世界史の新創生期であるに考へ、而して自己の立場、責任、將來の使命に及んで、偶々書棚を仰いで田、本郷兩先輩の傳記を認め、之を卒讀して兩先輩を偲ぶと共に自己を戒め自己を顧みて見た。

田男が日露戰役の功に依り男爵を授けられたのは五十三歲の時であり、始めて閣僚として寺內內閣の遞信大臣に任ぜられたのは六十三歲の時であり、原內閣の臺灣總督を拜命されたのは六十五歲の秋であつた。大正十二年九月山本地震內閣の農相兼法相となられたのは六十九歲であり、七十二歲で樞密顧問官となられ、在任の儘、昭和五年七十六歲で薨去された。而して私の首唱した南洋協會には當初より力を致され芳川會頭の後を襲ふて大正八年六十五歲の時に同會頭に推され、爾來薨去の日迄、其の椅子に居られたのである。

本郷大將が青島守備軍司令官より入つて陸軍大將となり軍事參議官となられたのは大正七年、五十九歲の時のことで、大正九年六十二歲で定年迄猶三年を餘すに拘はらず、後進に路を開く爲め豫備役となられたが、六十六歲で久邇宮宮務監督を拜命され翌大正十五年には大日本武德會々長に就任、昭和六年薨去の日迄、其地位に精進されたのである。

仍つて思ふ。自分は六十歲で海外興業社長の地位を退いて第二線の人となつたが、匆々早や六年の歲月を經過して六十有六の齡を重ねることとなつた。正に田男が遞信大臣となられた時よりも三歲の長者となり、本郷大將が陸軍大將を退いて豫備役に編入された時よりも四歲の長者となつたのである。

勿論田男は六十九歲で再び臺閣に列せられ、七十六歲薨去の時には樞密顧問官であり、本郷大將は武德會長とし

て七十二歳薨去の前迄東奔西走された。

自分は六十歳で第一線を退いた際に於ける身邊の係累は當時物せる「山莊獨語」に記せる通り、關係事業會社六國際又は文化公共團體三十二、學校四、社交又は娛樂クラブ十三、計五十五を數へたが、本年四月の調べに依ると、關係事業會社二、國際又は文化公共團體六十四、學校二、社交又は俱樂部十四。計八十二を算し、卽ち事業關係は大に減じたが關係諸團體は二倍に增加したのである。兩先輩は一は文官、一は武人として終始されたが爲め、身邊の係累は自分の如く多數に上らなかつたであらう。然かも自分の係累の斯く集積したのは自分が創設に干與せしものの殆んど總ては、今に繼續してゐる爲めであらう。例へば明治三十一年に創立された東亞同文會は今に四十四年の歲月を經、南洋協會は三十年、昭和ゴム會社は三十二年と云ふ風に何れも創立以來の關係を持續して居り、其の他、人口問題研究會、日土協會、日伯中央協會、東洋協會、日蘭協會（インドネシヤ）等の如き何れも創立以來の關係であり、特に日支事變より大東亞聖戰となつて國民の耳目が支那、南洋に向けらるるに及び俄然、其の數を增して來たのは已むを得ない所であらう。

のみならず、斯く創立以來の諸團體に關係を持續し得るは自己の壯健なること、同僚と意見相違はざること等が其の要因たるべく、事情の許す限り自己の責任を果たすべきである。只だ年漸く老いて氣魄却つて益々豪なる限り自然、身體を酷使するを免かれざると共に、斯く多數の係累ある限り、夫れ夫れの任務を完全に盡くす能はざるは亦已むを得ざる處、是に於て乎、心すべきは左の諸點に在り。

一、身と心との調和を計ること。

一、之が爲めには事の大小輕重を計つて其の小且つ輕きものを他に委し、大且つ重きものに重點を置くこと。

一、兩先輩の經路に鑑みるも、最早や人生の秋も漸く半ばならんとしてゐる以上、自重自愛して、今後は活動と休養を合理的ならしむること。

一、時局は益々重大となるべく、擧國一心、奉公を致すの秋、老人は老人の使命あり、就中自分の如き南方開拓の先覺として一般に認めらるるものに在りては、其の評の當ると當らざるとに限らず、誰人も之を認める以上、之を天の聲とも稱すべく、又、自己に課せられたる天の使命とも申すべく、而して國難は今後に在る以上、少くとも茲兩三年は、特に自力を養ひて自ら求めず、天の使命ある場合、挺身之に殉ずるの用意を爲すことが、當面の第一義である。

一、況んや此の歷史の轉換機に當つては、過去を顧みると共に過去に捉はられず、自らを創造し自らを建設して皇國の使命を達成するには、廣く學び、深く考へ、其の構想を雄大にし、其の建設を周密にせなければならない。其れには何としても靜思の時が必要である。切りに道塗に奔走して惟れ日も足らない樣では、到底自力を養ふの隙がなくなる。此の點よりしても、今後は宜しく事の大小輕重を計りて出處進退する所がなければならない。

然かも兩先輩は英邁の資を以て文武の顯官に擧ぢられ一世の仰ぐ所となられたが、自らは六歲にして豐太閤たり、十歲にして鎭西八郞に傾倒し、三十五歲にして明治の豐太閤たるべく、セシル、ローヅの偉跡を蹤して南方に建國を企てた。其の一生は太閤と八郞の間を縫つた一生であり、ローヅに擬した所謂海外發展のパイオニアとして終始して來たもので、江湖の遠きに居り、無位無官を以て自ら甘んじ、天下の平民を以て自ら任じ來つたもので、兩先

輩とは稍々其の道を異にして來たから、自己の天地は別に存する次第である。宜しく此の別天地に終始して、其の終りを全ふすべきである。古來名を後世に貽した多くの哲人英雄は、早世して居られる。之が後人をして一層其の人を偲ばしむる一因でもあらう。

然し自分は此の聖代に生れ、此の重大時期に際し出來る丈け身心を存養して出來る丈け長壽を保つて其の時代時代に副ふべく御役に立たなければならない。人は長壽耻ぢ多しと云ふも、自分は敢て當代に求むるの意はない。江湖の一閑人も結構であり、無名の一浪士たる亦可なりであつて、要は一息存する限り、至誠奉公、以て皇國の隆運に椽の下の力持たれば可なりである。復た奚んぞ疑はん。（昭和十七壬午晩春五月念八日、息心海莊にて認之）

二、閒居隨想

（一）二十六日晩、息心海莊に入つて明三十一日歸京せんとす、此の間、閑居五日、門を出でず、讀書と作詩と錬思に刻の移るを覺へず、近來になき好日であつた。

臨時議會の狀況も、政府の聲明も議員の論議も戰況も、將た世局も只だ朝夕の新聞に據るのみであつたが、曩に突如、高田直屹君を失ひ、今は又三好重道君の訃に接した。兩人共に古稀を超へた老人であるが、日夕往來した仲であつて見れば哀悼の情に堪へない。昨二十九日には此の地、在住の村上直次郎君の訪問に接してインドネシヤ協會の今後を諮り、終つて萬平ホテルに午食を共にして別れたが、今夜は大阪より上京せる上山勘太郎君が歸阪の途次、此の山莊を過訪との電話あり、待つて居る次第である。村上君は老齡七十四、臺北帝大學部長を最後として勇退し、蘭學の長老としてインドネシヤ協會に因緣深き人、上山君は年壯猶五十餘、夙に除蟲菊の栽培に成功して巨富を獲、柑翁と稱して風流韻事を好み、兼て殘生を南方に抛ち、身後の香を求めんとする浪華財界稀有の逸材である。自分は何の策を以て其の期待に副ふべきかを思案中なのであつて、君の過訪も亦相互の心の交流を庶幾せる爲めであらう。方今人を要するの秋、君の企が成るを得ば啻に君一身の快のみでは勿論ないのである。（上山君は自分の留めるを聞かず、其の後、十七年の冬渡南して飛行機事故にて夭折せり、悼む可し。追記）

五日の閑居、門を叩くは唯だ此の兩君のみであらうが、存外に日は移り易く、朝は大抵六時に起き、夜は十時に蓐に就き、終日靜居して而かも底事を爲し得たか。寒山の詩を讀み、無門關の一端を窺ひ、田本鄉兩先輩の傳記に目を曝らしたる外には、朝夕新聞を見たると、詩を拈りたると、到著の文書を處理したると、三度の食事、二度の入浴が一日の行事として大半を費やしたのであつて、顧みて眞に隙駒の感に堪へないのである。

「アジヤの民族」、「南方諸對策」の如き切角海莊に齎らしたものの、猶手に觸るるに至らない。今夕より明日にかけて之に及ぶの外はない。

（二）今朝大隈侯等主唱の「菅沼貞風顯彰會」に發起人たらんことを求められて欣然參加の回答を發したが、之には因緣がある。自分は貞風君の實弟周次郎君とは東都攻玉社在學時代よりの友人で、兵學校へは君も一年後れて入學し親交を結んだのみでなく、貞風君の同志、福本日南氏は東亞會創立以來の先輩であり、貞風君の同鄉人たる沖禎介君とは牛込梁山伯時代よりの心友であり、又岩永八之亟、石橋禹三郎、稻垣滿次郎等平戶出身の諸氏とも一日の交りあり、且つ大正十三年海外興業社長となつてよりダバオの麻事業に後援し、マニラに在ること二回、貞風君の墓に展ぜるは勿論、ダバオ麻事業の發展に邦人を送ること一萬餘、貞風君の遺志の一端を實踐に移したものと

云へる。斯様な次第で只今左の二首を賦して周次郎君に贈つたのである。

憶㆓貞風君雄圖㆒寄㆓實弟周次郎少將㆒

餘生不㆑願老㆓京華㆒。殘骨唯當㆑埋㆓絶陲㆒。名雋夙留南進句。遐洋今樹日章旗。
盤㆑空鵰健波濤急。乘㆑汐帆飛浪背夷。與亞同心君與㆑我。幽明相隔護㆓皇基㆒。

同上　其の二

意氣當年壓㆓日邊㆒。後五十年志屢宜。想㆑君欲㆑酹人何在。眞珠灣頭草暾㆑煙。

閑居絶句九首を獲た。何れも未定稿なるも、即感即賦として玆に掲げて見た。

一、讀寒山詩　其の一

寒山仰見路巍乎。欲㆑践㆓仙蹤㆒雲際趨。盡日逞追難㆑討㆑迹。峰頭唯有㆓月輪孤㆒。

二、同上　其の二

閑居三日絶㆓塵機㆒、精進期㆑披未透扉。不㆑管寒山行路杳。悠悠步步帶斜暉。

三、聽杜鵑

節入㆓黄梅㆒萬綠鮮。哺㆑雛乳燕落㆓簷前㆒。松聲檐滴俱相好。況又半庭啼㆓杜鵑㆒。

四、樂無窮

惠風滿㆑畝麥芒豐。烟雨如㆑絲畫亦濛。知否箇中滂㆑耳客。身心脱落樂無㆑窮。

五、自東來

坤輿爲㆑宇一心恢。霜雪作㆑朋雙鬢摧。煮㆓茗山莊㆒志猶在。風雲呑吐溟北來。

六、忠烈九軍神　其の一

碧海埋㆑身臣子分。生非㆑所㆑覓惕求㆑勳。猛然自爆殲㆓敵艦㆒。忠烈千秋名姓薫。

七、同上　其の二

點塵不許涴㆓戎衣㆒。遺恨十年全勇揮。殘月懸㆑天天未㆑曉。軍神一死決㆓軍機㆒。

八、同上　其の三

虐雪酷炎何敢辭。乾坤隨處颺㆓皇旗㆒。眞珠灣外人如㆑虎。自爆獻㆑皇一劍知。

九、將歸京、望富嶽

閑居數日與㆑心閑。又下㆓崖亭㆒落㆓坳寰㆒。唯賴㆓襟懷涼似㆑水。破顔一笑對㆓靈山㆒。

寒山の詩を繙いて神を有形の外に馳せ、又朝夕、太平洋の波を俯瞰して斯の心を恢弘し、米虜の腥風東より來るを呑吐するも好く、泉聲雨滴に耳を澇つて身心脱落するも亦樂しみ窮りなし。某社より眞珠灣九軍神を賞づるの詩を徴せられて六、七、八の三首を獲た、京に歸れば、又塵寰に落つるのであるが、襟懷涼しきこと水に似たる限り何物にも拘はる所がない。破顔一笑して富士の靈峰に對するのである。

時に東京より電話あり、上山君の聲なり、曰く是非立寄りたき希望なりし所、寢臺券に東京より乘車とあり、熱海に下車出來ないことが判明したので、乍殘念、此回は素通りする。近く又上京すべきに付、其の際必らず拜訪すとのこと。來るも來らざるも浮生の事、何れでも可、只だ近く君に會して其の志を成さしむるの端を啓きたいと存

ずるのみ、之より筆を投じて讀書の佳境に入らんかな。（昭和十七年五月三十日後五時息心海莊にて認之）

三、閒居隨想　其の二

今朝來、例に依り二階の温室に入つてバツクストン著「アジヤの諸民族」の譯書を讀み、序説より第二のアジヤ諸民族の起源、次で各論に入り、西方アジヤの近東、中東諸民族に及び、印度に至つて早や正午に近く、乃ち卷を掩ふて閑坐、ふと庭中の梅樹を見れば實も相當に太り、眼前の双樟や巨松を始め綠樹の森森たるあり、居を玆にトしてから早や十三年、綠陰に苔蒸して雅趣多く、鳥聲が微かに耳に入つて神爽かなるを覺へる。閒居五日、興は中々に盡きざるものあるも、俗務は歸京を促すので、暮煙を逐ひ、折柄の月を載いて歸るの外はない。

載」月　歸

綠樹森森梅子肥。苔庭寂寂鳥聲微。閒居數日吟難」盡。狂逐二暮煙一載」月歸。

更に想は走馬燈の如くに飛んで往く、先づ家庭のことであるが、自分は積年の活動に身心稍々調和を缺くが如くで、當分出來る限り、雜務を省き身心の共健に力め、最活動の機に後れを取らない樣にするが第一だと思ふ。家妻は多忙の身を以て存外强健なるは幸であり、長男はストツクホルムに在つて戰時下最適の機を得て修養に力めて居り、嫁も二孫も極めて元氣且つ順調であり、長女と次女の夫妻も共れ〲の任務に就て活動しつゝあるのは仕合である。今後御互に相助け相戒めて奉公の誠を盡くさなければならない。

翻つて身邊を望むに人事轉々停まる所なく、高田豐樹中將と四王天延孝中將が東印度振興中央會の正副理事長になるかと思へば、外務省三局長の移動が目に着き、友人安東君の令息が早や局長の椅子に据つた。當然の順序である

るが「四時の序功を成すものは去る」の原則が行はれてゐるのである。然し七十、八十の老人が引張り出される機會もあるのである。要は自ら求めざるも常に刻苦勉勵、自己の信念を長養し、自己の經綸を修熟し、天の命あらば何時にても之に應ずるの準備をせねばならない。天の命あると否とは問ふ所ではないのである。

左ればと云つて歲は爭はれず、時代は變化する。克く人生の秋に在るものの姿を凝視して、其の時に適するの態度に出で、聊かも出過ぎるの態度であつてはならない、と同時に、常に身心の長養に力め、大公望が隱遁して渭川に釣し、八十にして始めて出馬したるが如き、天の命ある限り天に從つて行動することも亦人生である。其の邊の呼吸に入神するがよい。只だ常例を以てせば、人生の秋に入れる者は自分の夙に喝破せる通り、第一線を後の賢者に讓り、其の足らざる所を助けると共に、立言、立德以て天下後世を益するの心懸がなければならない。

自分は二十三歲の秋に「支那論」を草してより、今に五十三年、其の間に數十册を公にし數十に上る所見を當路に開陳して世に小補あらんことを期し來つて、多少の功果を貽しつゝあることは、各方面よりする未見の人の書信や各處に未見の知己が存在するの事實に依つて實證されてゐる。今後も此の方面に力を致すと共に、次代國民の造成に力めたいと思ふ。（昭和十七年五月三十一日午後二時息心海莊を下つて京に歸らんとして認之）

九十三、昭和十七年晚春五禱莊　三想

一、獨自の步み

昨日滿洲移住協會の役員會を拓相官邸で開くとのことに、久振りに滿洲移住の近況を知りたく旁々本日後四時半

に後れて會場に列した。丁度今回新に理事長となつた石黒忠篤君の挨拶最中で、約五分間で終つて閉會となつた。聞けば、小磯大將が理事長を罷め、石黒氏の新任となつたので、之が披露挨拶の緊急召集とのことである。

終つて列席の小磯朝鮮總督、井野拓相、石黒氏、植場次官、下村宏、那須皓、高岡熊雄、津崎尙武、上原轍三郎加藤完治等の諸氏と挨拶を交換して辭去、午後三時半に門を出で五時半に歸宅した。官邸に在つたのは、僅に三十分位に過ぎない。然かも此の間に感じたことの一は「自己の獨自の步み」と關連しての一齣である。

自分は豐太閤と鎭西八郎の間を往き、セシル・ローヅの經濟建國を南方に行はんとしたもので、固より皐謨を異域に布き、大日本を世界の中心たらしむるに在ることは、申す迄もない。斯て十九歲、臺灣に航してより今に四十七年、而して今は、一個の平民井上雅二である。フト卓を圍れる諸君を見ると、

小磯大將（朝鮮總督）の約六十二、三。井野拓相兼農相の五十二、三。石黒忠篤君（前農相）の六十一、二。下村宏博士の六十八。高岡熊雄博士の七十二、三。那須皓博士の五十七、八。津崎尙武君の六十。植場拓務次官の五十。加藤完治君の五十七、八。

等が目に着く、然かも何れも第一線的に働いてゐる連中である。然るに自分は、六十六歲とは云へ、身心猶ほ剛健なるに大體第一線を退いてゐる。此處に日本獨特の人生行路があり又自己獨自の步みがあるのを覺へしめる。世人は自分を以て南方關係の第一人者視するに拘はらず、大東亞開戰以來南方關係の大東亞〇〇〇〇會にも〇〇〇〇にも呼出しがない。僅かに昨年第三次近衞內閣時代、〇〇〇〇相の發意に依つて〇〇相の〇〇となつたこと。本年四月に入つて〇〇が自分を無給の囑託として、相談相手となつたに過ぎない。其の理由は兎に角、未だ表面に押出さるるに至らない。

勿論自分も、現在程度の〇〇〇〇などには、特別の懇囑なき限り、就任の意はない。〇〇側の云ふ如く、今少く〇〇が進捗するに至らば、一度現地を視察して方策を立つるに、補ひあらしむることは、敢て望む所である。今日も井野拓相、植場次官にも、明年に入つては適當の時機に南遊すべく、其の場合には拓務省と連絡すべしと申せし所、兩氏共に直に贊同せり、斯くて〇〇〇〇並に〇〇等の關係を以て〇〇することは當然起るべき事實であらう然し自分はどこまでも天下の平民井上雅二である。太閤と八郎の間を往く者であることは忘れてはならない。斯くて、どこまでも獨自の途を步み、頂天立地、乾坤に俯仰し、求めず售らず、身心を長養して永く遺烈を後に貽すべきである。後繼者を得て斯の志を繼がしむべきである。拓相官邸の半時內に世相を觀て歸つて所感の一端を認め置く次第なり。（昭和十七年六月十三日後六時研究所樓上にて認之）

二、又、名古屋豐國神社に詣づ

今度は、名古屋市役所の招請に依り、十四日の夜行にて東京を立つて十五日朝六時四分名古屋下車觀光ホテルに入り、市役所並に新興亞會東海支部役員の案內にて、名古屋城、市役所、日陶を經て名古屋ホテルの新興亞會主催の午餐會に列し、師團長、市長、縣總務部長等の諸君と會合し、後三時より商工會議所に於ける市主催の講演會に赴き聽衆七、八十名に對し、約二時間に亘り「南方經濟建設」に關する講話を爲し、五時半より同所にて、一同と會食。六時半收樂館に於ける新興亞學院學生に對し、約二時間の獅子吼を爲し、同夜ホテルに一泊、翌十六日早起朝食德川義親侯と談り、市の細田君の東導にて又中村公園に豐國神社に謁し、加藤清正公の廟に詣で、園內に在る

森春濤先生の一絶、

中興覇略説㆓豊公㆒、公亦幼時是牧童。烟雨満村春靉靆。可㆑無㆔牛背出㆓英雄㆒。

が目に着いた。仍つて其の玉韻に攀ぢて、

少年結髪慕㆓豊公㆒。垂老到㆑今心尚童。雨霽一天清若㆑拭。綠陰濃處訪㆓英雄㆒。

と即吟した。引返し名古屋驛に至り、市及新興亞會諸君の見送りを受けて、九時五十六分發一路東海道の風光を賞でつゝ、後三時半歸京した。

垂老今に到つて心尚ほ童の如くあり得るは、人間の一幸ではなからうか。（昭和十七年六月十八日認之）

三、勢ひと云ふ字

今日の日曜日は、大阪より上京の上山柑翁（勘太郎氏）の來訪があつて、午前九時より十一時迄、南方對策に就き意見を交換した。

氏は、〇〇當局と計り、南方資源室様のものを自力にて新設して、世局に益したき希望あり、之を大成せしむる爲めに適當の事業をも經營したしとのことに、之に助力するを厭ふ所に非らざるも、自己多年の經驗と南方進展の基礎として、大和民族を、隨處に植付ける點よりして、開拓の事業を起すに就て多少の案もあり、上山氏としても之に一臂の力を藉さるゝことが、其の志望に副ふ所以なるを力說し、其の贊同を得た樣子であつた。氏は年齒猶ほ五十二、三、巨萬の富を彼の「除蟲菊栽培」に獲、餘生を昭和の「紀の國屋文左衞門」として終へたしとの夢を夢みつゝあるの人、自分は氏の懇望に對し、適宜の指導を與ふるを辭せざるの心地がするので、自己の體得する開拓業に依つて氏の志を果たさしめんと欲するのみである。

氏去つて獨り研究所樓上の人となり、午後の半日を靜思と讀書に費やした。南亞や西亞の風雲を觀測し、終つて廣瀨豐著山鹿素繙く所、中田千畝氏著南方外交史話、ソ聯中央亞細亞等で、行言行祿を一氣に讀了し、特に「自警十四則」の最後の項、

「凡そ時機には、勢と云ふものがあるから、無理をしてはならぬ。孔子は「愚にして自分から用ゐられん事を願ひ、賤くして自分から思ふ樣にしようと思ひ、今に生れて昔からの立派な道に反對する樣なものは、必ず不幸なことになる」と云はれたし、

子思は、「何事でも、其れ〳〵の禮儀があり、其れ〳〵の財源があり、それ〳〵の時機がなければならぬ」と云ひ又孟子は「智惠があつても、其れ許りでは、駄目だ。矢張り勢に乘じなければならぬ。鋤鍬があつても矢張り時機を待たねば、農作物は出來ない」

寔に然りである。先生は赤穗の謫居十年の後江戶に歸られたのは五十四歲の時で、爾後長逝の時迄の十年が、最も圓熟大成の秋であり、然かも自警自戒、死に至つて猶ほ止まざるの概があつた。

自分は、早や六十六、先生退擧の時を超ゆ已に二歲、當然に這般の消息に徹せねばならないのであつた。幸にして由來名利に恬淡なりし此の生涯は、今頽齡に及んで何等俗累に煩はさるゝなきは、天の恩寵として、感謝の外はないが、先生の如く益々自警自戒して神人合一の境に攀ぢねばならない。（六月二十一日後四時五禱莊にて）

九十四、昭和十七年夏恰恰山莊隨想　十五片

一、背　沼　日

六月二十日の發起人總會にて、背沼貞風顯彰會成立し、同三十日附にて、會長より幹事の一人に指示された。南進の實踐者たる自分としては、欣然之に參加應分の助成を爲すこととした。

七月七日は、貞風君の忌日に當るので、東京市公會堂に催された慰靈祭に參列し、令弟周次郎少將と久振りに握手したが、昨八日同少將の來訪を受け、午前の忙しい時間を割き、約二時間心談を試み、午後三時十分の上野發で歸山の車中、新に求め得た江口禮四郎氏著「南進の先驅者背沼貞風傳」を卒讀して貞風の雄圖を懷ふと共に其の文献なり詩藻なりが如何にも自分の青年時代に似たものあるを思ひ感極つて落涙を禁じ難きものあると共に、時々微笑を催さざるを得なかつた。人は爲すべきを爲すのみ、人の知ると知らざるとは、全く所謂人のことで、自分のことでない、貞風君も定めし地下で今日の顯彰のこと抔は、知らずにゐよう。それでよいのである。東方齋先生の場合も亦同樣である。東方齋顯彰の企が、臺灣にも名古屋にも、企てられつゝあるも亦同調である。而かも頽齡に及んで、此等興亞先驅者の顯彰に參加し得る自分の幸を幸と想ひ、ひたすら其の餘光が國運の進展に補あらんことを希ふものである。

乃ち左の貞風君の長句を朗吟して、車中の客を驚かしたのも一興であつた。

北極之南南極北。地勢雄濶多二島國一。久抱遠交近攻謀。欲下向二何邊一展中我力上。太閤雄圖徒勞レ民。七郎奇計空頼レ

人。功名別有二必成術一。當レ途何爲事二逡巡一。沖繩遙望濠洲路。青點綴山無數。葬レ身本分鰐魚腹。埋骨豈期舊墳墓。君不レ見天下虎騰又龍蟠。小者常危大者安。不レ知誰能拓二我地一。變レ小爲レ大危爲レ安。又不レ見天公委レ我好版圖。多島海邊皆可レ略。不レ知孰能植二我民一。視レ機察レ變取二溟漠一。西土密雲近二雨期一。恰是蛟龍飛躍時。苟能一變攻守勢。眞韮之麻足三以繫二日本之旗一。

初　夏　村　居

林鳩喚レ雨暮雲垂。新樹陰浮綠一池。若鎖二閑庭一人不レ到。香煙上處獨思レ詩。

秋　日　山　居

白雲生處卜二山居一。屈レ靜山高意自舒。空苑扶レ笻追二木石一。閑窓憑レ机伴二詩書一。松琴朝奏秋風急。楓錦夕懸斜日徐。怕下向二人間一泄中消息上。世塵或又到二茅廬一。

二十餘歳の青年としての此の心境、以て常人に非らざるを知るべし。（昭和十七年七月九日朝、鶯聲を聽きつゝ於二恰々山莊一認レ之）

二、滿六十五年五ケ月の我

フト思ひは馳せて現在の我に及ぶ。「興亞一路」を繙ぐに其の二一〇頁の所に、

大正八年末の我　　年齡　四十二年十一月。身長　五尺四寸。體重　十六貫五百。健康　輕微の糖尿と右眼結膜炎あるも、身心共に壯健何等の故障なし。

家族　養父　六十八。養母　六十五。妻　四十三。子供長女　二十一。長男　八。次女　七。實父　八十。實

母 七十四。長兄 四十八。弟 三十七。妹 三十。皆健在。

更に大正十四年九月二十五日、太平洋上ヱムプレス、ヱシヤ號にて、南米より歸航の舟中、滿四十八年八ケ月卽ち夏の下半期に入つた頃の部「更生の道」（二一五頁）の所に、

今後の第一線活動期を十一ケ年とし、六十にして健ならば、更に十年を期して七十に至り、七十猶、健ならば天の命ずる所に從ひ活動、死に至つて止むこと。

とあり、又昭和四年、五十三歲の時の感想錄（二一七頁）に、

自分の實父は八十二、母は八十の壽を保つた。長壽が遺傳すとせば自分も八十位までは、生き得るであらう。假りに自分の壽命七十五として餘生二十二年、之を第一線活動期の六十五までの十二ケ年間、惰勢的活動期の七十五までの十ケ年、其の後を立言期と見て後半世の計畫を次のやうに目論んで居る。

と述べ、其の「惰勢的活動期」の所に、

六十五歲に至つて經驗益々加はり、心身亦健在なれば、過去の惰力を以て第一線に活動すること亦已むを得ざる場合あるべきも、大體としては、漸次適材を後任に推して、自分は間接の地位に立つて此を後援するの立場を守り、而して自己の經驗と信用とを基礎として、廣く國家社會より、延て世界を益するに力む可し。（二一九頁）

とあり、更に昭和七年七月十日熱海海莊に於て綴つたものに「滿五十五歲の我」の一篇がある曰く、

梅雨未だ霽れず、獨り海莊に泊して曉起、窓を開き、長椅に踞するに、綠樹蒼々として生氣滿ち、啼鳥欣々として自然を歌ひ、海は烟霧に鎖されて遠く白雲と連り、身は人界を超越して天界に在るの心地す。仍つて今の我を思ふのである。

一、現　況

一、身體檢査（七月一日矢田浩藏博士檢診）

身長　五尺三寸八分。體重　十五貫九百匁。血壓　百十五。血脈極めて柔かにして內臟何等の故障なし。糖尿　朝食後千分の二。但し特に食療養を加ふるの要なし。

二、關係事業會社　七。

三、關係公共團體　三十六。

四、所屬社交俱樂部　八。　計五十一。

二、將　來

今は非常時なり。非常時には、非常時に處するの法あり。一旦緩急あらば、自己の力を揣るに遑あらずして、驀然之に赴かざるを得ざることあるべし。然れ共、苟も一國民として、一社會人として斯の世に存する限り、過去の因緣、經歷、環境に順應して其の最も適當する方面に於て、最も妥當とする方法に依つて善處するを可とし、此の意味に於て、自己の將來を忖度するに大要左の範疇を出でざる可し。

一、開國進取の宏謨に依り、今日迄に築き上げたる日本を、更に一層恢弘し、日本民族の使命とする世界の平和亞細亞の興隆、東亞細亞に於ける大陸日本の建設に向つて全力を傾注して此れを後世に引紹ぐこと（中略）。之が爲めには、自己の信念を培養し、自己の經綸を捧げて、之に貢献するを期すべし。時局問題に就て常に當

路に獻策し進言し、又自ら實踐せんとしつゝあるは之が爲めなり。（中略）

一、今後十年間第一線に立つものとして、六十五歳に至り境遇之を許さば、本舞臺から退いて後進を誘掖し、又屢々世界に出遊して心身を養ひ、更に教育機關に携つて、青年を訓育すると同時に、自己の退氣を剪除し、讀書、修養に力め、時に著述し、時に吟咏し、立行、立言、立德以て世道人心を稗益するに努む可し。

一、更に十年の後、健在ならば（七十五歳の後）餘生を最も愉快に、最も有効に國家民人に盡さんことを期す。

一、三年後には、長男次女共に、學業を終へる豫定なるを以て、其の後の適當なる機會に、夫妻相携へて、世界を一周せんことを期す。（其の後五年、卽ち昭和十二年に之を實行せり）

更に四年卽ち滿五十九歳昭和十一年海興社長を退いて、人生の秋に入つたが、當時に於ける身邊の係累を見るに

關係事業會社　六。公共團體　三十三。關係學校　四。社交クラブ　十三。計　五十七。

とあり而して「秋に處するの道」として

結實期を今後の十年卽ち七十歳迄とする。此の間に後を善くする爲め、幾段かの手順を要する。（中略）最も心に關するは、南洋と支那の兩方面である。南洋は自分の立場上、今後少くとも十年は、不斷の努力を傾注しなければ濟まない。支那に至つては、混沌として未だ歸趣を知らずと云ふ有樣であるが、然し皇國が東亞の安定勢力として、今後十年の努力を拂へば、滿洲國の基礎も確立し、皇國の眞意も諒解され、日支相互の理解成立し、亞細亞復興の大勢を馴致することは、必至である。幸に日支連絡成り、南方も亦皇國の勢力圏に歸するならば、玆に皇國の世界に於ける使命の第一階梯は、先づ出來上つたと申して宜しいと考へられる。

斯くして自分の身邊は、漸く繁より簡となり、疎より精となり、立行より立言となり、希ふべくんば、立德となり、物質界より精神界に入り、人生の至境に透徹せん爲めの努力となり、最後の冬期（七十歳以後）となる。卽ち秋の結實を他に傳へ、又後に貽すために、或は言を立て或は四方に遊行して道を宣べ、遂には德を樹つるの冬となり、彼の一粒の種が伸びて百丈の巨幹となるが如く、自分の蒔付けた種子が、四方に傳播して生々發展不滅の域に達する樣になるのが本則であらう（中略）

斯くして七十にして冬となるとせんか、心身の長養に力めて猶ほ健康が許すならば、この最後の冬には、本來の使命にどの位、長く精進し得るか、五年か十年か將た十五年か二十年か、其れは解らぬが、古來七十以後は、身心共に退嬰期に入ると云はれるから、第一線の活動は、無理であらう。況んや自分には、秋の結實を完ふして、早く冬に入つて其の使命に安住したい希望がある。徒らに紛々の塵外に出沒したくはない。（中略）

而して今や更に、更に六年も須臾に經過して、滿六十五歳五ケ月、昭和十七年七月となつた。

朝來群書を閱し、午食後、獨り「ポーチ」に晏臥して靜思す、室に掲ぐるの掛軸は「乾坤一草亭」であり、自分の揮毫に係る色紙であり、手にするは「リザールと其の母」であり「菅沼貞風」である。然かも窓外の流鶯は璧尤も耳に佳く、庭前の山百合花はまだ蕾である。乃ち滿六十五歳五ケ月の我を憶ふのである。

一、現　在

一、身體檢査（大眞博士檢診）

身長　五尺三寸八分。體重　十四貫三百。血壓　百十乃至百十五。糖尿　食前千分の一、八乃至一、六。食後